910.2
F651
③

始

コ－3506

910.2
F65A

藤岡作太郎著

國文學史講話

岩波書店刊行

大正
15. 9. 9
内交

63-53.

序

むかし貫之任國にありて愛子を失ひ、惆悵の念に堪へず、婦人の筆に託して、哀慕の情を漏らしゝ一篇歸京の日記は、國文の上乘として、今なほ世にもてはやさる、文人の不幸が名篇佳作を出ずの所緣となること、東西その例に乏しからず。昨夏、東圃家を擧げて、暑を小田原に避くるや、余も亦東上の歸途、その僑居を訪ひ、君が家庭の一員となりて、松青沙白の間に、君が子女と優遊嬉戯すること數日、偶、君が最愛の長女光子孃、この春より學校に通ひそめたりとて、極めて活潑なるが、ひと日心地すぐれずとて、打臥せしに、病俄に漸みて、只三四日の間にはかなくなりにき。假初のわづらひとのみ思ひけることの一大事となりけるに、君が歎き、余の驚き、今更に言ふべくもあらず、夢路をたどる〳〵後の事ども行ひて、今は箱根の山の白雲も、相模の海の清き渚も、なき人のありし朝な夕なの思出とのみなりて、見るに物憂く、家をたゝみて君は東、我は西、言葉すくなに露けき袂を分ちしも、只昨日の如く、眼大きく黑き瞳に人を見つむる光子孃の

面影、まながひにかゝれるを、早くも一周忌のめぐり來て、これが記念のためとて、心こめて物せる君が國文學史は成れり。白金も黃金も玉も何せむに、寶の子を失へる悲みには、天地をあげても換へ難きは、人の親の心なるめれど、大方の世の人は、君が光子孃を失ひたるを悲むよりも、此好著を得たるを喜ぶなるべし。こは君にとりては快からぬことならんも、生涯短き光子孃が、此書によりて永く世に生くるを得ば、亦以て慰むるに足らんか。

繪團扇のその朝顏や露じめり。

明治四十年八月

藤井紫影

東圃學兄が其著國文學史講話を亡兒の記念として出版せらるゝに當りて、余の感想を述ぶ

三十七年の夏、東圃君が家族を携へて歸鄕せられた時、君には光子といふ女の兒があつた。愛らしい生々した子であつたが、昨年の夏、君が小田原の寓居の中に意外にも此子を失はれたので、余は前年旅順に於て戰死せる弟のことなど思ひ浮べて、力を盡して君を慰めた。然るに何ぞ圖らん、今年の一月、余は漸く六つばかりになりたる己が次女を死なせて、反つて君より慰められるゝ身となつた。

今年の春は、十年餘も帝都を見たことのない余が、思ひがけなくも或用事の爲に東京に出るやうになつた。着くや否や東圃君の宅に投じた。君と余とは中學時代以來の親友である。殊に今度は同じ悲を抱きながら、久し振りにて相見たのである。單にいつもの舊友に逢ふといふ心得のみではなかつた。然るに手紙

にては互に相慰め、慰められて居ながら、面と相向うては何の語も出ず、唯輕く弔辭を交換したまでゞあつた。逗留七日、積る話はそれからそれと盡きなかつたが、遂に一言も亡兒の事に及ばなかつた。唯余の出立の朝、君は篋底を探りて一束の草稿を持ち來りて、亡兒の終焉記なればとて余に示されたが、かつ今度出版すべき文學史をば亡兒の記念としたいとのこと、及び余にも何か書き添へてくれよといふことをも話された。君と余と相逢うて亡兒の事を話さなかつたのは、互にその事を忘れて居たのではない、又堪へ難き悲哀を更に思ひ起して、苦悶を新にするに忍びなかつたのでもない。誠といふものは言語に表はし得べきものでない、言語に表はし得べきものは凡て淺薄である、虛僞である、至誠は相見て相言ふ能はざる所に存するのである。我等の相對して相言ふ能はざりし所に、言語はおろか、涙にも現はすことのできない深き同情の流が心の底から底へと通うて居たのである。

余も我子を亡くした時に深き悲哀の念に堪へなかつた、特に此悲が年と共に消えゆくかと思へば、いかにもあさましく、せめて後の思出にもと、死にし子の

面影を書き殘した、而して直に之を東圖君に送つて一言を求めた。當時眞に余の心を知つてくれる人は、君の外にないと思うたのである。然るに何ぞ圖らん、君は余よりも前に、同じ境遇に會うて、同じ事を企てられたのである。余は別に臨んで君の送られたその兒の終焉記を行李の底に收めて歸つた。一夜眠られぬまゝに、取り出して詳かに讀んだ、讀み終つて、人心の誠はかくまでも同じきものかとつく〴〵感じた。誰か人心に定法なしといふ、同じ盤上に、同じ球を、同じ方向に突けば、同一の行路をたどる如くに、余の心は君の心の如くに動いたのである。

回顧すれば、余の十四歲の頃であつた、余は幼時最も親しかつた余の姉を失うたことがある、余は其時生來始めて死別のいかに悲しきかを知つた。余は亡姉を思ふの情に堪へず、また母の悲哀を見るに忍びず、人無き處に到りて、思ふ儘に泣いた。稚心に若し余が姉に代りて死に得るものならばと、心から思うたことを今も記憶して居る。近くは三十七年の夏、悲慘なる旅順の戰に、唯一人の弟は敵壘深く屍を委して、遺骨をも收め得ざりし有樣、こゝに再び舊時の悲哀を

繰返して、斷腸の思未だ全く消え失せないのに、又己が愛兒の一人を失ふやうになつた。骨肉の情いづれ疎なるはなけれども、特に親子の情は格別である。余は此度生來未だ曾て知らなかつた沈痛なる經驗を得たのである。余は此心より推して一々君の心を讀むことができると思ふ。君の亡くされたのは君の初子であつた。初子は親の愛を專にするのが世の常である、特に幼き女の子はたまらぬ位に可愛いとのことである。情濃やかなる君にして此子を失はれた時の感情はいかゞであつたであらう。亡き我兒の可愛いといふのは何の理由もない、唯わけもなく可愛いのである。甘いものは甘い、辛いものは辛いといふの外にない。これまでにして亡くしたのは惜しからうといつて、悔んでくれる人もある、併しかういふ意味で惜しいといふのではない、女の子でよかつたとか、外に子供もあるからなどいつて、慰めてくれる人もある。併しかういふことで慰められやうもない。ドストエフスキーが愛兒を失つた時、又子供ができるだらうといつて慰めた人があつた。氏は之に答へて How can I love another child? What I want is Sonia. といつたといふことがある。親の愛は實に純粹である、其

間一毫も利害得失の念を挾む餘地はない、唯亡兒の俤を思ひ出づるにつれて、無限に懷かしく、可愛さうで、どうにかして生きて居てくれゝばよかつたと思ふのみである。若きも老いたるも死ぬるは人生の常である、死んだのは我子ばかりでないと思へば、理に於ては少しも悲むべき所はない。併し人生の常事であつても、悲しいことは悲しい、飢渴は人間の自然であつても、飢渴は飢渴である。人は死んだ者はいかにいつても還らぬから、諦めよ、忘れよといふ、併しこれが親に取つては堪へ難き苦痛である。時は凡ての傷を癒やすといふのは自然の惠であつて、一方より見れば大切なることかも知らぬが、一方より見れば人間の不人情である。何とかして忘れたくない、何か記念を殘してやりたい、せめて我一生だけは思ひ出してやりたいといふのが親の誠である。昔君と机を並べてアービングのスケッチブックを讀んだ時、他の心の疵や、苦みは之を忘れ、之を治せんことを欲するが、獨り死別といふ心の疵は人目をさけても之を溫め、之を抱かんことを欲するといふやうな語があつた、今まことに此語が思ひ合されるのである。折にふれ、物に感じて思ひ出すのが、せめてもの慰藉である、死者に

對しての心づくしである。この悲は苦痛といへば誠に苦痛であらう、併し親は此苦痛の去ることを欲せぬのである。

死にし子顔よかりき、をんな子のためには親をさなくなりぬべしなど、古人もいつたやうに、親の愛はまことに愚痴である、冷靜に外より見たならば、たわいない愚痴と思はれるであらう。併し余は今度この人間の愚痴といふものの中に、人情の味のあることを悟つた。カントがいつた如く、物には皆直段がある、獨り人間は直段以上である、目的其物(End in itself)である。いかに貴重なる物でもそは唯人間の手段として貴いのである、世の中に人間ほど尙い者はない、物は之を償ふことができるが、いかにつまらぬ人間でも、一のスピリットは他の物を以て償ふことはできぬ。而してこの人間の絶對的價値といふことが、己が子を失うたやうな場合に、最も痛切に感ぜられるのである。ゲーテが其子を失つた時、Over, the dead といつて仕事を續けたといふが、ゲーテにして此語をなした心の中には、固より仰ぐべき偉大なるものがあつたでもあらう。併し人間の仕事は人情といふことを離れて外に目的があるのではない、學問も事業も究竟

の目的は人情の爲にするのである。而して人情といへば、たとへ小なりとはいへ、親が子を思ふより痛切なる者はなからう。徒らに高く構へて人情自然の美を忘るゝ者は反つて其性情の卑しきを示すに過ぎない。金州城外馬不前の一句ありて愈、乃木將軍の人格が仰がれるのである。

とにかく余は今度我子の果敢なき死といふことに因りて、多大の敎訓を得た。名利を思うて煩悶絶間なき心の上に、一杓の冷水を浴せかけられた樣な心持がして、一種の涼味を感ずると共に、心の奥より秋の日の樣な淸く溫き光が照して、凡ての人の上に純潔なる愛を感ずることができた。特に深く我心を動かしたのは、今まで愛らしく話したり、歌つたり、遊んだりして居た者が、忽ち消えて壺中の白骨となるといふのは、如何なる譯であらうか。若し人生はこれまでのものであるといふならば、人生ほどつまらぬものはない、此處には深き意味がなくてはならぬ、人間の靈的生命はかくも無意義のものではない。死の問題を解決するといふのが人生の一大事である、死の事實の前には生は泡沫の如くである、死の問題を解決し得て、始めて眞に生の意義を悟ることが出來る。

物窮すれば轉ず、親が子の死を悲むといふ如きやる瀬なき悲哀悔恨は、おのづから人心を轉じて、何等かの慰安の途を求めしめるのである。夏草の上に置ける朝露よりも哀れ果敢なき一生を送つた我子の身の上を思へば、いかにも斷腸の思がする。併し飜つて考へて見ると、子の死を悲む余も遠からず同じ運命に服從せねばならぬ。悲むものも悲まれるものも同じ青山の土塊と化して、唯松風蟲鳴のあるあり、いづれを先、いづれを後とも見分け難いのが人生の常である。永久なる時の上から考へて見れば、何だか滑稽にも見える。生れて何等の發展もなさず、何等の記憶も殘さず、死んだとて悲んでくれる人だにないと思へば、哀れといへばまことに哀である。併しいかなる英雄も赤子も死に對しては何等の意味も有たない、神の前には凡て同一の靈魂である。オルカニヤの作といひ傳へて居る畫に、死の神が老若男女、あらゆる種類の人を捕へ來りて、帝王も乞食もみな一堆の上に積み重ねて居るのがある、榮辱得失もこゝに至つては一場の夢に過ぎない。又世の中の幸福といふ點より見ても、生きのびたのが幸であつたらうか、死んだのが幸であつたらうか、生きて居たらば幸であつ

たらうといふのは親の欲望である、運命の祕密は我々には分らない。特に高潔なる精神的要求より離れて、單に幸福といふ事から考へて見たなら、凡て人生はさほど慕ふべきものかどうかも疑問である。一方より見れば、生れて何等の人生の罪惡にも汚れず、何等の人生の悲哀をも知らず、唯日々嬉戯して、最後に父母の膝を枕として死んでいつたと思へば、非常に美しい感じがする。花束を散らした樣な詩的一生であつたとも思はれる。たとへ多くの人に記せられ、惜まれずとも、懷かしかつた親が心に刻める深き記念、骨にも徹する痛切なる悲哀は寂しき死をも慰め得て餘あるとも思ふ。

最後に、いかなる人も我子の死といふ如きことに對しては、種々の迷を起さぬものはなからう。あれをしたらばよかつた、これをしたらばよかつたなど思うて返らぬ事ながら徒らなる後悔の念に心を惱ますのである。併し何事も運命と諦めるより外はない。運命は外から働くばかりでなく、内からも働く、我々の過失の背後には不可思議の力が支配して居る樣である。後悔の念の起るのは自己の力を信じ過ぎるからである。我々はかゝる場合に於て深く自己の無力

なるを知り、己を棄てゝ絶大の力に歸依する時、後悔の念は轉じて懺悔の念となり、心は重荷を卸した如く、自ら救ひ、又死者に詫びることができる。歎異鈔に「念佛はまことに淨土に生るゝ種にてやはんべるらん、また地獄に墮つべき業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり」といへる尊き信念の面影をも窺ふを得て、無限の新生命に接することができる。

明治四十年十一月

西田幾多郎記

自序

早くも三四年を過ぎぬ、深川の本誓寺に詣でゝ、五百羅漢の畫幅を拜觀したる事ありき。畫は菊池容齋が經營慘澹の筆に成りし大作にて、春秋の彼岸にはこれを懸け列ねて供養し、普く有緣の參拜を許す由なれば、友人平出君を誘ひて歩を運びしなり。容齋が執筆の因緣については、哀れなる物語あり。今日廣く世に行はるゝ前賢故實はこの歴史畫家が畢生の心血を絞りて描き成し、以て風教を補はんとしたるもの、辱くも今上陛下が日本畫士の號を賜ひしもこれが爲なるべく、また和氣清麿に神號を追贈あらせられしも或はこの書がその動機となりしなるべしとも傳ふ。されど初はこの十年苦心の作も發行の書肆なく、上梓の資財なく、久しく筐底に籠めて、徒に紙魚の棲となるを待つばかりなりしかば、この事あまりに情なく、折節は忘年の親友なりし福田行誡に向ひて堪へがたき遺憾の情を漏したりき。時に幕末の頃、江戸牛込に加藤金兵衛といふ商人あり、手の中の珠とかしづきし一人の女年頃にもなりしかば、或る方に

嫁入らせしに、幾ほどもなくして身まかりぬ。婚禮のをり持參の衣服調度今はこなたにおきても詮なし、唯歎きの種ぞとて、壻の方より里方に返す、里方にはうけ取らず、一旦遣はしゝ女の道具は卽ちそなたの物、それを返さるゝは死したるものを離緣するやうにて、草葉の陰にもいかばかり悲しからん、これはそなたへ、いやこなたへと押問答の果、金兵衞は腕拱ぬきて、さらば吾に思案あり、今深川におはす行誡上人は淨土宗の大德、古今の名僧と聞くに、この聖に託しまゐらせば、衆生濟度の便ともしたまひて、なき女が往生の緣ともなりぬべしといふに、乃ち相談は決し、かの調度を賣代なし、なほ首尾を合せて一千兩の金を行誡に捧ぐ。さてこそ行誡は容齋を招きて、喜ばれよ、御身の志は成りぬ、印刷の料は調へ得たりとあるに、容齋は涙ぐむまで難有く、脫稿の後凡そ二十年にして、こゝに前賢故實の出版に取りかゝりしなりけれ。年來の宿望は今しも遂げたるに、いかにしてかこの大恩に報ゆべきと尋ぬるに、行誡は善い哉、さらば五百應眞の圖を畫きて供養したまはゞ、亡者の爲、施主の爲、いかばかりなる功德ならん、御身の滿足より引いては世間の滿足も、ひとへに世を早うせし乙女

の爲、それを悲む父母の爲なるをと示す。それこそ吾にはふさはしき業、いかで加藤氏の名を萬世に朽ちせぬばかりと、沐浴齋戒して書き上げたるが、この本誓寺の什物なりとかや。

吾等が參詣せし折も、くさ〳〵の供物を捧げたるが中に、小兒の玩具の珍らしく面白き取集めたるがありぬ。これも近頃愛兒を失ひし人の、その遺物をこゝに納めしなりとの事なりしが、一わたり哀れと見たるばかりにて、さして心にも留らず、畫幅の由緒も平たく聞きたるまでにて、容齋の筆法はとあり、思想はかりなど思ふまゝの事を言ひ散らして、さて過ぎにき。今思へば淺はかなりしことかな。昨日は人の身の上、今日はわが身の上など、古めかしき言ひぐさながら、今こそひし〳〵と心の底に染みぬれ。吾も一昨年の夏長女を失ひぬ、長女名は光、時に七歲、笑ひさゞめき遊び戲れしものの、はかなき病に忽然とこの世を去るべしとは誰か思はん。わが身は既に四十に近し、この後爲すべき事の奧も計り知られたり、唯わが子のみぞわが誇、わが望なりしを、一朝にして死の手に奪ひ去らるゝこと、あらばあらるゝ事か、かくても過さば過さるゝことか。ある

時はありのすさびに過してし、なくてぞまことの哀れさは知りぬる。よくもあしくも咲き出でたる花の、手折らるゝはさてありぬべし、固き苔の人の目にとまるともなくて、不意の嵐にもぎ取られし恨はいかばかり。年長けて少しにても世にある甲斐の務をなしたらば知らず、やう〳〵物のあやめも覺ゆる程に早くももとの闇路に歸りなば、かゝるもののありしと知るは家の内の人ばかり、世にも知られで空しく來りまた往くこと、いかに悲しきことぞ。愚かなる親は、せめても亡き兒のわが心にまた人の心に忘れられずば、それをしもなほ生きたりと喜ばん。固よりわが家のものの生涯忘るべき筈もなし、たゞ忘れじとにはあらず、幼き罪なき兒はさま〴〵の教訓をその親、その祖母に教へたり、もしや吾等の將來に得るところあらば、そは卽ちわが兒の賜ともち齎きてんさりとても現なの心や、過ぎ去りし面影と、殘しゆきしこの教へとを身にしめて、いまだ足らず、願はくは忘れんとするわが友の一人にても、わが兒を思ひ出でんことを、知らで止みなん世の人の一人にても、かゝるものもありしよと愍まんことを、これのみぞ望なき後のわが望なりける。

豐太閤が朝鮮征伐を思ひ立ちしは、老いての後やう〳〵淀君の腹に生ませしみどり兒に死なれて、鬱悶やる方なく、いかにしてかその悲を忘れんが爲なりと、傳ふることのあるを、歷史家はそは英雄の心事を解せず、着々として歩を進めたる經營に心づかざる僻ごとなりといはん。されど凡人にもせよ、英雄にもせよ、人の情は同じきものを、當時の秀吉が胸の内を思ひやりては、是非は知らず、傳ふる事のまた所以ありと思はざるを得ず。華山天皇は愛妃を先だてゝ、御悲みに堪へたまはざりし、その機に乘じて、藤原道兼がそゝのかしまゐらせしかば、則ち宮中を遁れ出でて出家せさせたまひき、後にぞ道兼が欺けるなりと知りて、悔しく覺し召しけると、古史には記したるが、果して法皇は悔みたまひけんや。かれ佞臣が欺けるなりとは知りつゝも、それも得菩提の善智識、亡き人の爲にはよくこそ朕を誘ひけれと、逃れ去る道兼を見送りて、滿足して御髮は下したまひけんかし。おほけなき例を引くにはあらねど、今わが身に思ひしむにつけて、更めて昔の跡を顧みるなり。健かなるものは日々の務に勵みて、その悲を忘るべし、悟あるものはせん方なき世の習と、術なき思に沈まざるべし、あ

はれ身も心も弱きものの、奮ひ立ちて働き勞るゝことも得せず、さりとて一節に思ひ諦らむることもならず、つく〳〵と日毎に同じ歎きを繰返すかな。永祿四年毛利元就の嫡子大膳大夫隆元頓死す、家臣等父君の愁傷いかばかり甚しかるべきと、心配一方ならざりしに、案のほか元就は悲痛の色なく、その子吉川元春、小早川隆景、及び家臣等を呼びて、隆元の死亡は偏へに尼子滅亡の基なり、わが子の弔合戰と思ひて、皆々心を一つにして向はゞ、强敵もいかでか挫かざるべき、勝利は掌の中なり、隆元の爲ぞ、位牌の見てあるぞと、勢こんで言ひしかば、上下愁眉を開いて勇み立つ。これをしほに進めやとて、元就自ら三軍を率ゐて、やがて白鹿の城を拔きたりといふ。論ずるものは、いふまでもなく、これ軍氣の沮喪するを憂へて、人心を鼓舞せしなりといふめれど、それのみにては物足らず、夭折せし愛子を悼みて、一勝一功もその手に成りしと知らせばやとの、親心ならじやは。勇ましき世のことは思ひもよらず、吾にははかなき筆のあるのみ、南海の任に下りし時伴ひし人の、歸り上る時は一人足らずと、歎きて書きし貫之朝臣の日記に思ひ比べんには、似も似ぬすさびながら、千年の前後に通ひ

めぐる人の心ばかりは同じかりけり。されどわが日記は同じ事を繰返し〳〵て、人に示すほどのものならず、何をがな世に公けにして愛兒の記念とせんと思ひ成りぬるも、筆執ることさへも懶くて、はか〳〵しくも心を定めず。

脇本十九郎君は家弟幸二の親友なり、最も亡兒を愛して、わが家に來る毎に、これと戯れ遊びたりき。君また文を能くす。されば吾一人にては事の成否も疑はしきに、君にこそとて、意中を述べたるに、君快くこれを諾す。これより暇ある毎に、吾口授し、君筆記す。されどなほもどかしからぬにあらず、吾のこゝちわろしとて、休むことも少からねば、君また他に務あるに、うち任せては身を委ねがたし。かくて一箇年の後にはと思ひしことも、あだに過ぎ、更に月日は過ぎて、早くも三年めになりぬ。今更飛び立つやうに覺え、われ人ともに急ぎて、やう〳〵に稿を了へたるがこの文學史なり。此方はたゞ思ひ立ちたる儘にて、成案もなく、組織も立たず、ましてや拙き口より、とりとめもなくつぶ〳〵と呻き出づるを、書き取りてこれだけに順序も立て、文章にも綴り成せしは、ひとへに脇本君の功なり。これにて一わたりわが語りし事を世に示し得べく、否、わが語りしより

も以上に君は仕上げたりといへども、元來がよからぬ素地なり、仕立師の術もせん方なきところあるべし。われも新たに工夫して機を立てたるものにもあらず、わけて現代の文學の如き、概略をのみ申し譯に添へたれば、食ひ足らぬことの多かるべし。かくて誇らはしく世に示さんこと、江湖に對して、また亡兒に對して、耻かしくは思へど、今はたそれもすべなし。なほ緒言としてさま〳〵の懷をも述べばやなど、初は思ひしかど、畏友西田君が眞心こめたる序文もあるを、既にこの三四枚の繰言さへ蛇足に似たりとやいはまし。さらばこゝに筆を擱く、同じ心にあはれと見る人あらば、わが望は足りなん。

明治四十一年一月三十一日

藤岡作太郎

目次

總論

第一章　團結心と家族制……一
第二章　自然の愛……一六

太古

第一章　この時代の概觀……三三
第二章　大化以前……三八
第三章　大化より奈良朝の終まで……五六

平安朝

第一章　この時代の概觀……九五
第二章　弘仁時代……九四
第三章　延喜時代……一一〇
第四章　藤氏全盛時代……一二四
第五章　院政時代……一五〇

目次

中世

第一章　この時代の概觀……一七
第二章　新古今時代……一八
第三章　鎌倉時代……一九
第四章　南北朝時代……二三
第五章　室町時代……二六

江戸時代

第一章　この時代の概觀……二七
第二章　啓蒙時代……二八
第三章　京坂の盛運……二九
第四章　文運東遷……二八
第五章　江戸の盛運……二七

明治の世……四〇

索引

國文學史講話

文學博士　藤岡作太郎　著

總論

第一章　團結心と家族制

文學と社會

一國の文學はその國民の思想を表はすものならざるべからず。或は曰く文學はその書だけの價値あれば可なり、社會の思想を代表するとせざるとを問はず、社會の多數に愛讀せらるゝとせられざるとを論せずと。この言は偏固に過ぐ。文藝の作品はすべて觀賞家を豫想す、作者と讀者とは相待つて存すべし。或は積年苦心の跡を擧げて、名山の巔に藏むるものあり、或は雙肩に重き自家の書を湖水に投じて、龍神を祭るものあり、火に燒くもの、井に埋むるもの、これらは世事を慷慨するの餘に出づるか、又は己の伎倆に不平なるが爲のみ。追悼禁せず、わが詩を束ねて棺中に亡妻の枕とせしもの、他日更にこれを發掘して世

に發表せしロセッチの行爲は、卽ち文藝に對する作者の期待を說明するものにあらずや。されど最も多くの讀歎者を有する作品が、必ずしも最も優等なるものにあらず、當時一般の社會の思潮を代表する著述の、凡俗見るに堪へざるものあり、絕世の妙技が時代と睽離し、文運の推移と交涉なく、卒然として現はるゝこと彗星の如きあり。これはいづれも往々にして見らるべき事實にて、國民思潮の代表と技術の優劣と直接なる關係を見んとするが如きは、過ぎて及ばざるの說なるべし。かやうの極論は暫くさしおき、同一の伎倆ある甲乙の作品にして、甲は一代の思潮に觸れ、乙はこれと風馬牛の觀ありとせよ、乙は漕ぎ行く跡の白波、時の間に消え去つて跡なきに、甲は國運の盛衰と深き關係を有して、永く人心の奧に不磨の銘を刻む、文藝は一國文明の花、甲の如くにして、文學も始めて大なる價値あり。

國民の理想

或は曰く、文學の優秀なるもの、必ずしもその時代の思潮に合せず、百年、二百年の後、始めて全社會に歡迎せらるゝものあり、これをしも國民の思想を表はすものといふかと、固よりなり。元祿の世に住んで、元祿の思潮に浮沈するものも可なりといへども、文化、文政の世に在りて、明治の文明を豫言するものは、更に可ならずや。人間は現在に滿足せず、必ず未來に對して何かの要求あり、この要求は時には迷宮奧深く潛んで、社會みづからこれを覺らず、詩人ひとり感じてこれを筆にす、蒙昧なる世俗なほ覺らず、却つてこれを異端邪僻の言とすること少からず、年を迎へ年を送りて後、始めて先醒の言に驚く。國民の思想といふを一代に膠着して見ることなく、三世に涉りて見よ。しかる時は、時相を離れて、百步の外より希望の途に世人を導くもの、これ國民詩人の最も尊きものなり。世運は變遷一日も留まらず、沈滯するものは衰ふ。國民はその理想に向うて進まざるべからず、文學者は國民を率ゐて旗幟を飜さゞるべからず。文學は國民を代表する時に健全なり、その理想に向うて進む時に健全なり。

國民の特性

如上は國民の思想と文學との關係について一言せるのみ、されど余輩が國民文學の特色といふは、この一般の交涉を指すにあらずして、國民の特性を發現せるところにありて存す。國民にその國民性あること、一個人にその個人性あるが如し、感情に、思想に、異なる國民は一種まぎるべからざる色味あり、これを

避けて他の色味を現はさんとすとも、本來の特性はなほ頴脫し來つて、何處にかその眞相を露出せずんば止まず。これを個人の作品に見よ。紫式部には紫式部の特性あり、近松には近松の特性あり、一作家が自己の個性を沒却して、不本意のところに筆を着けんとすれば、思想洞徹せず、筆路精銳ならず、苦心を重ねても失敗を免れず、本來稟け得たるところに脚を立つれば、感興湧くが如くにして、一個の小天地は讀者の面前に躍出す。國民におけるもまた個人に同じく、よく國民の特性を發揮する時は榮え、これを蔽ふ時は振はず、國民文學の花には必ずこの特性の蕋あり。この特性は固定して動かざるものにあらず、漸次進歩して理想の境に近づくこと、個人の人格がまた日に〳〵變化するが如しされど三ツ子の魂百まで失せず、國民の心裡に蟠まれる根本の特色は、その國民の存するかぎりまた存すべし。但その根本の特色は時々に形色ともに異なる衣裝を纒ふを以て、眼光の鈍きものは服飾と本體とを同一視することあり、一時流行の姿を以て、國民が不變の趣味と斷ずるが如きは、憤んでこれを避けざるべからず。しからばわが國文學の特性とは何ぞや、國文學が表はせる國民の

一系の皇統

特性とは何ぞや。

日本國民の最大の特色は團結の強固なるにあり、全一體として相離れざるにあり。小にして家を成し、大にして國を成し、家族は團欒して一人の如く、國家は和諧して一家の如し。支那の東海を縫うて、しかも大陸と離れたる洋中、超然たる仙洞高く墻壁を築いて、外犯すべからず、內紊るべからざる、強固なる國民は養成せられたり。而してこの國民はかけまくもあやに畏き現つ御神を上に戴き奉る。檝なき舟は行方を知らず、主腦なき團體は蜘蛛の子と散るべき烏合の衆なり、國民にはこれを導くべき理想の光なかるべからず、現つ御神は赫燿として千秋ゆるぐことなき大光明と申すも恐あり。一道の靈光脈々として古今に涉り、仰望せる國民は精髓をこゝに養ひ、理想をこれに求めて活動す。大君いましてその下に國民あり、連綿たる皇統こゝに三千載、泝つて神代史上、天岩屋戸の神話を思へば、動きなき教訓は儼として存す。

天岩屋戸の神話

神代の昔、素戔嗚尊同胞の親に乘じて、君臣の別を辨へず、暴威を振ひて天照大神を苦め奉る、大神これを厭ひ、天岩屋戸を閉ぢて籠ります。天に懸つて國土を

照す光明、影忽ち消えて、黑闇々の中、民衆何を便に動くべき、隙を覗ひて、禍つ神は五月蠅なす湧き出で、紛擾亂雜、開けたる國家はまた混沌の世に歸らんとす。八百萬神天安河原に集ひて熟議し、心を一にし、力を合せて、更に天日の照臨を祈る。憧憬の後に希望あり、山の如き岩戸は開けて、曈々たる旭日天地を別ち、是非を明らめ、民衆その光明に浴して、各自の分を盡すを得たり。歷代の聖帝は卽ち不窮の後に天祖の神靈を體現したまふもの、天つ日嗣の御名は國民が古今に通じて奎運發展の敎化を仰ぐところの目標とします。普天の下、卒土の濱、王土、王臣にあらざるなし、常燈上に輝き、國民その下に共同一致して、一定の理想あり。一定の理想を追うて進めば、人をして極端に奔り、邪路に陷るを得ざらしむ、草も木もわが大君のものなるに、何處か鬼の棲なるべきぞ。理想の光は空假の幻に終ることなく、現實は時々刻々にこれに向つて近づかんとすれば、國民は希望に充ち、現世を虛僞罪惡の巷として厭ふことなく、樂觀的に人世を觀じ、世間的活動を以て人間の務とす。上に萬世不滅の皇統あり、金甌無缺の國體はその國民をして無限際に無限力を發揮せしむべし。

族制政治

日本の社會は一の大なる家族たり、君は專制の君にあらず、民は不平の民にあらずして、國家は卽ち父子夫妻兄弟を廓大したるものなり。日本上古の風、所謂族制政治を以て成り、家族と國家と緊密なる關係あり、二者に大小の差別ありといへども、そのもと一物なり。こゝには家族制と君主制とが社會における出生の先後を論ずるにあらず、一般の法則としての、これらの發達交涉の順序は、社會學の說くところ、今、余輩の關するところにあらず。唯歷史ありてこのかた、聖皇を仰ぐの制と家族親しむの制とは合一して、日本の社會を構成したり。而して盡未來際、國民がわが大君を拜み仕へまつるが如く、家族の親睦も一代を限りてのことにあらず、一代を限れる家族は强固に結合したる家族と稱すべからず、わが家族は一系の氏姓永く過去未來に涉りて動かず。國家に天祖あるが如く、一家にまた氏神あり、氏神は卽ちその家を開ける祖先を祀れるなり、代代の子孫皆この神の血を分てることを自覺して、同血の眷親十人も百人も唯一人と凝結し、家長を中心としてその手足の如く働く。現在家族の世にあるみな祖先の賜なることを知り、益々一家の榮達を計るは、自己の爲に止まらず、祖先

の名を辱めざらんが爲、後世子孫の幸福の爲なりとす。かくして個人の活動はその死と共に消滅せずして、五尺の血肉の外に意義あり、輯睦せる家族は集まりて社會を組織し、こゝに和氣靄々たる國家を見る。

國運振興の機

聖德太子の十七箇條憲法の第一條に和を以て貴しとすといへり、一家の親は引いて一國の和となり、君民上下合體して、確立せる理想に向うて進む。されど庭前の樹を見るも曲折あり、四季の變遷その順を違へずといへども、時に寒暖の期を失することなきにあらず、社會の秩序の紊るゝ時あり、民衆の歸趣の藏はるゝ時ありて、國家は沈滯萎靡す。唯國民が全一體として最も强固に統合せられ、理想の燈最も明かにその前に輝く時、個人は國家の利益の爲に一死を惜まず、現在を未來の犧牲として憚らず、國運こゝに於てか振興す。上古、神功皇后が韓國を征服したまひしが如き、その好例なり。鎌倉幕府の創立は天皇と庶民との間に障壁を築きて、國民歸嚮するところを失ひ、天下漸く亂れ來りしが、變太閤の出づるに及びて禍亂を戡定し、日光再び天に高く、久しく抑壓に艱みたる希望は勃然と頭を擡げて、更に韓國の征討となりぬ。國民が一體として活動

する時、國運の最も發揚すること、以て見るべし。されどこれには註脚を要すべし、かくの如きは日本國民に限りての特色にあらずして、世界を通じて國家興廢の一般の運命なりと。然り、この言には異論なし、余輩はわが國史を說くよりも、普通の歷史の規則を說くやうなるが、さりながら日本國民の團結力の殊に强固なるは、なほ何人も許すところにあらずや。その人種的天性なるか、または國土の形勢によつて養はれたるものなるかは知らず、とにかくに古今を通じて萬國に比類なきところなり。世界のうち、一國興りて一國滅び、一朝絕えて一朝繼ぎ、千年の舊國老いてなほ盛なるものなきに、ひとりわが國が上下三千載、抑揚波瀾を經て益振ひ、更に青年の血氣を回復したるもの、これ何の力によれるか。

國勢と文學

これを文學に見るに、國民が固く團結し、かくして得るところの勢力を自覺する時に、詩人は彬々として輩出す。萬葉集はかくして成りたり、人磨等が長歌に、まづ天孫の降臨より說き起すを例とせるを思へ。天往かば汝がまに〳〵、地ならば大君います、海行かば水づく屍、山行かば草むす屍、わが大君のへにこそ死

なめとは、萬葉詩人の信仰にあらずや。外國の影響を排して、國民が己の力量を正當に認識し得たる時、古今集は出で、源氏物語は作られ、一は和歌の範を後世に示し、一は前後無匹の小說と成りたり。宇津保、源氏には、神聖なる皇統永く傳はりて、犯しがたき威あるを見るに、狹衣に至りては上下の分を紊るところあり、文學もこれより皇室と共に萎縮して振はず。元祿時代に俳諧戲曲小說が鬱然として一時の盛を極めたるも、從來屈辱に馴れたる中流以下の社會が、一躍して元氣を回復し、己の社會が國民の有機的一部なることを自信して、始めて芭蕉、西鶴、近松等の大家を輩出せしめたるなり。

階級制度

長所も一轉すれば短所となる是非の別るゝところ、一髮の間にあり、家族制はやがて階級制の發達を促しぬ。家族が遠く歷史を縫うて、前代を仰望するあまり、祖先の職務をも改むるを肯んせず、朝廷に政を執るもの、武器を製するもの、土地を耕すもの、鳥獸を獵るもの、いづれもその家業を世襲すれば、家業により て更に貴賤の階級を生ず。代々神に仕ふれば、その家おのづから尊貴に、世々屠殺を事とすれば、その分おのづから微賤に、氏姓は一目して上下の別を示す。上下の別あるは可なりといへども、これを過度にして、上級の士ひとり權力を恣にして下民を壓し、下民は蠢々として無意義なる生活を營むのみにして、文明の雨露に浴せざるに至つては、既に國民の全一を破るものなり。まして封建の世、群雄の割據は諸國を區々に分離し、遠近隔絕、民庶は城下あるを知つて國家あるを知らず、幕府また政事を左右して、皇室の尊嚴を蔽ふ、支離滅裂、仰ぐべき理想の光明も黑雲に蔽はれたる時、國民は方向に迷ひて、合一的動作を能くせず、國力と文學と併せて疲弊するも、自然の勢なるべし。

階級と文學

階級の制は平安朝に至りて一時の極に達せり。少數なる廷臣のみ漢土の文物を輸入し、人民と手を分ちて遙かに前に進み、大多數の民はこの先進者と何等の交渉もなく、都鄙懸隔、上下睽離、文藝は京都貴族の專有に歸す。萬葉の和歌は貴賤文武共にこれを詠じ、東歌あり、防守の歌あり、敢て社會の一部の獨占を許さゞりしに、平安朝の和歌小說は月卿雲客が春宵秋夜の玩たるのみ。古今集、源氏物語が絕世の文學書として、なほ優柔にして單調なる嫌を免れざるは、ひとへにこれが爲なり。「わが國の梅の花とは見たれども、大宮人は何といふらん」の

一章、階級の弊害を罵倒して、快極なし。鎌倉時代に至つて、平安朝の積弊は壞れたれども、別途の階級制は尙更に大なる禍を釀し、中世を通じて文藝の暗黑時代を生ず。「皆人の世にあるうちは數ならで、憂きには漏れぬわが身なりけり」、人世の最後ばかりは刹利も首陀も變らねど、宮と藁屋との隔は遠く、數ならぬ身の大君の御光を仰がず、君が日影は薮しわかぬを、强ひて明暗の差を立てたるところに、いかで文學の花美はしく咲き出でなんや。江戸幕府時代に至りて、天下は一統せられ、幕府また皇室奉戴の意を表すといへども、諸藩の分立は依然として存し、階級の差別は更に制を定めて宣言せらる。「木曾殿と背中合せの寒さかな」と歌へる芭蕉の如きは、階級を超絶し、平等なる人世觀の上に俳道を立てたるが、一般の文藝はこの例に從ふこと能はず、上流は墨守し、下流は卑俗に、個々分立して立ちたるは、當時の社會が生みたる自然の弊ならずんばあらず。明治に至りて幕府は倒れて、國民は直に叡聖なる天皇の御稜威を仰ぎ、四民同等の權を得て、全一なる國家の統合ごゝに成る、近來國運の駸々として發展せるもこれが爲なり。赫々たる光明の下に、一般の社會を擧つてその讀者とすれ

因襲摸倣の弊

ば、文學の隆々として興るべきは、當然の數のみ、或る人は既に古人を凌ぐ、將來の運はた益〻多望なり。

されば階級の制を喜ぶは、わが國民の特性にあらずして、歷史に現はれたる一時の現象に過ぎず。蓋し階級制の起るや、或る一時代の世態を以て永遠の實相と錯認し、これを軌範として行動するより來れり。皇統連綿無窮に涉り、國民まだこれを仰いで進み、社會を組織せる家族は、各自祖廟を祀りて、系統永く繫がれんことを欲す。これまでは可なりといへども、この習慣は增長して、祖先を神と拜し、英雄と望む結果、何事をもこれに摸せんとするに至つて、誤れり。祖先が醫者となり、大工となる、皆その才の能くするところに從へり、これは一時の現象のみ、たとひその統を受くるものといへども、才に適否あり、各〻その適するところに向つて進むべし。さるを階級制の過重はこれを許さず、曩昔一時の現象に執着して、强ひて祖先の業を墨守す、世襲の慣習はかくして祖先の摸倣となり、因循固陋の弊となり、龍頭蛇尾、國運の沈滯不振を促す。祖先を仰望するの眞意は、かくの如き外形の事跡を追隨するにあらずして、一系の血脈の下に家族

の團結を強固にするにあり。祖先の魂は過去の事業に存せずして、己の血中に傳はり存す。

個性の銷磨

階級の制は古人の崇拜となり、先例の蹈襲となり、從うて個人の才能は發揮せられず、模型の中に押しはめんとして、個性を削り去る。典型を蹈襲すれば、おのづから形式を追ひて、內容を忘れ、文學も個人の心理的變化に注意せずして、境遇の推移をのみ重んずるに至る。個性の滅却はかくして起るのみならず、また社會の團結、家族の交渉が緊密に失することも、これが原因となり、彼此相促して天才を殺すこと少からず。團體の强固なる一致は規律を增し、服從を進めて、軍隊の武力の如きは專らこれに依るといへども、多數の爲に少數を犧牲に供して、才識ある個人も無學の團體の前に勢力なし、かゝれば個人もおのづから團體の指導に依賴して盲動す。且階級の制は先天的に個人の地位を定めて、材力の有無を問はず、如何なる才を包みても、青雲登るに難ければ、世人は一般にその才を養成するに勵まず。個性は漸々に銷磨して、唯團體を表はすところの類性あり、文學もまた複雜なる性情の發展なき、善か惡かの類性のみを寫せば、おのづから單調無味に流れ、この弊を隱さんが爲、纔かに事件の變化を多端ならしめて、讀者の好奇心に投ず、かくして個性の滅却はわが文學が屢、免れざる弊なるが、これを以て切り捨てがたきその特性なりとは斷ずべからざるが如し。

眞相と假象

個性の滅却を難ずるに當りて、余輩は再び一時の假象に拘はりて、事物の眞相を忘るゝの弊を說かざるを得ず。旗本八萬騎といふが如き、德川氏が幕府を建つるに當りて、己の家を擁護する親衛隊として設けたるものに過ぎず。世移り勢變じて、なほこの過去の方便に執着するは迂遠なり、將軍家も時運の已むなきを知り、大政を奉還して、恭順の意を表せる時、彰義隊ひとり上野に據りて、官軍に抗せんとす、誰かこれを以て義理を辨ずといはん。個人の才能は强ちに一時の世態に著するものにあらず、團體の精神はその形式に拘泥するを厭ひて、これを個人の一身に體現するを本旨とす。國民は各自相依り相待つて立つと共に、個人の才を十分に發揮することによつて進步す。一國民は砂石を積みたるが如きものにあらずして、松林村落、橋上の人、枝上の鳥、各、その所を得て、一幅

の山水畫を成せるが如し、無機的混合にあらずして、有機的融合なり。碁面の黑白の石よりは、むしろ將棊の駒に似たり、四十の駒各、その能を異にし、術を盡して、盤上その一を缺くべからざるが如し。天岩屋戸の前、鏡を鑄るもの、劍を鍛ふもの、或は祝詞を讀み、或は鹿骨を灼き、天鈿女は槽伏せて躍り、天手力雄は力に任せて岩戸を開く、慣習なく、束縛なく、渠等は共同一致して、しかも各、その個性の能くするところを爲したりき。個性は滅却すべからず、これを發展せしむるは、卽ち國民を發展せしむるなり。

不拔の特色と一時の現象とはよく辨せざるべからず、數百歳馴致したる習慣といへども、人心の根柢に浸みざるものは、移すべく、改むべし、未だ國民の特性とは稱すべからず。

國土と民性

第二章　自然の愛

國民の特性は初よりその人種に固有なるものもありといへども、またその住處の地勢氣候によつて馴致せられ、變化したるものも少からず。そのもと同じき印度歐羅巴種族が、東洋に、西洋に相分れて、寛猛柔剛匹を異にする種々の國民と成りたるは、南國の日、北地の嵐、山海さま〳〵の風物がこれを養ひたるなり。日本國民が全一體としてよく統合せるも、また蒼々たる煙波の外、四圍接するの國なき、その地位に影響せられしこと少からざるべし。さらばわが國民の特性を論ずるに當りては、日本の自然についても觀察を下さゞるべからず。

我國の風光

日本は東洋の樂園と稱せらるゝこと、歐洲における伊太利、瑞西の如し。氣候中和にして山水明媚、瘴烟毒霧の襲ふことなく、猛獸毒蛇も棲むこと稀に、曠茫たる平原眼界の盡きざるものなく、浩蕩たる長流數百里の山野を浸すを見ず、雄大瑰偉なる大陸的風致に乏しといへども、到るところ優麗嫻雅なる勝景に接す。東海の岸を縫うて進めば、富士を前にし、富士を後にして、長汀曲浦浪靜に砂滑かなり。瀨戸内海に船を行れば、松の島を迎へ、巖の嶼を送りて、朝日、夕日に移らふ景趣は應接に暇あらず、陽春櫻あり、晩秋菊あり、初夏の梢にかゝれる藤波は、紫の綾を池水の鯉に織り出し、季冬の森、鶫の聲暗き陰に、紅の椿は拾ふ兒な

しに切りに落つ。美なるかな山河、これに接するものは、怒れる心も和ぎ、結べる思も解けて、愛賞に他事なきを得ず。山川は優美なり穩和なり、これに馴れ、これを愛する國民が、また優美にして穩和なる特性を有するに至れるは、卽ち自然の感化が致すところなるべし。日本の土地は孔雀を生せずして、雉子を產す、國民の性もまた孔雀の姿の如く濃艶ならずして、雉子の如く淡泊なり。悲憤の情時には火の如く燃ゆることありといへども、概するに稟質猛烈ならずして穩健に、執着せずして洒脫なるも、また外圍の風物が漸次に養ひ來れるものならんか。

國土以外の影響

さりながら如上の論は斟酌を要す、國民の性質は國土の影響を被ると共に、その交通する他の國民の感化をも受くべく、食物などもまたこれを左右する勢力なるべし、相接する人間のおのづから相近づき來ることは、更めていふにも及ばざるべし、肉食の人が精力强烈に、菜食のものが恬淡なるなども、說明なくとも世人の認むるところなるべし。されば寒溫の氣、山川の風が國民性を動かすところの威權には、餘に大なる價値を附すべからず。この論はまづこゝに止めて、更に直接なる風土と國民との關係を說かんとす、何ぞや、わが國民が自然を親愛する念是なり。

自然の鍾愛

慈愛なる母の懷に養はれたる子は、生涯その恩愛を忘れず、日本の風土は國民の慈母なり、地味豐饒にして、河海に魚貝の利多く、生活をして自由ならしむるが上に、優美穩和なる山川は常に臉上に愛を湛ふる如し。接するものはこれに親み、親むものはこれを慕ふ、愛に迎へらるゝものは愛を酬いざるを得ず、天然の大公園に棲むわが國民が、その一木一草をなつかしむは、自然の情なるべし。都會の緣日に張りたる夜店には、食品も玩具も數ふるに足らず、露を帶びたる植木の葉の翠、花の紅こそ、カンテラの光に映えて水々しく鮮かなるを、中流以下の市民はあれこれと買ひ求めて、座敷に飾り、庭に植ゑ込む。裏長屋の道具の据ゑ所もなき窓前にも、稗蒔を作りて、田舍の景色の面影を偲び、破れ鉢に唐の芋を育てゝ、やさしき野趣を嬉しむ。長火鉢のわきの福壽草は鏡餅に對して暖かげに、軒端に吊りたる葱は、風鈴の音と共に冷し。上下貴賤を通じて、自然を愛することかくの如きは、他の國民にその匹ありや。

自然と物名

わが國民は母の慈愛をのみ享けて、父の威嚴を知らず、自然の愛すべきを見て、恐るべきを思はず。野をも垣をも吹き亂す二百十日の風も、野分の名にやさしく、峰も谷も一つに埋みてすさまじき冬の山里も、深雪といへばみやびやかなり。荒き猪も臥猪の床と唱ふるにやさしく聞ゆなど、兼好がいへるは、われらが自然に對するこの傾向を説明せるなり。雨といへば、照り續きたる夏などは嬉しけれど、一日の降も十日の照より飽き〳〵するに、卯の花くたし、時雨など、何れも趣ありて感せらる。自然の愛はかくして表はるゝのみならず、その名を借りて屢、人事に用ふ。すでに文學には、源氏物語の卷の名に夕顔、末摘花、葵、榊、朝顔、胡蝶、螢、常夏、藤袴、若菜、柏木、鈴蟲、紅梅等の類多く、これより源氏名の稱は起れり。われらはまた日常の用品にも、自然より出でたる名を用ふ。菓子に鶯餅、櫻餅、柏餅、萩の餅、紅梅燒、時雨など枚擧するに暇あらず。今の煙草にも、福壽草、白梅、皐月、あやめ、萩、紅葉等あり。古く獸肉を紅葉といひ、金貨を山吹に譬へたるもやさしからずや。ほんのりとのぼせたる美人の湯上りの姿を櫻色といひ、風にも堪へがたげにしなやかなる態を柳腰といふ。惡婆は薊に比べ、醜婦を南瓜と見る、團栗眼もあまり恐からず、腫物の膿みたるも酸漿の如しといふにきたなさも薄らぐべし。かくの如き類例は指を屈するに從つて思ひ出づべく、いづれも國民が自然の昵愛を示すものにあらざるなし。

自然の尊重

わが國民は自然を愛賞する餘、またよくこれを尊重せり。尊重するものには悅んで服從す、かれらは漫に人工の手を加へずして、自然の儘に自然を仰ぐ。この服從を以て屈伏といふ勿れ、悅服は自動的なり、屈伏は他動的なり。屈伏するものは不平なる奴婢が氣儘なる主人に對するが如く、悅服するものは從順なる兒孫が寛仁なる家長を見るが如し。任意的なるものは毫も抑壓の念をその間に感せず、他の意を以て喜んで己の意とす。花を愛する趣味の、われらがいかに西洋人に異なるかを見よ。薔薇は枝ながら、幹ながらの姿の美はしきにあらず、花一輪の色の艶に、香の芳しきなり、櫻は一枝の趣を賞するよりも、峰に渡り、川に沿ひて雲とたなびきたる態の目ざましきなり。花瓶に插す時、西洋人は花ばかりをちぎりて手毬の如くし、日本人は葉も枝もそのまゝに、願はくはこれに置く朝露をも落さゞらんとす。一は枝を撓めて花輪を作り、花瓣を卓上にふり

外國文學の刺戟

撒きて、歡興を助くるに、一は床上の盆石、盆栽に、自然の大景を方寸に寫す。彼は色彩の變化を喜ぶに、此は形態の多趣なるを賞すること、恰も油繪と水墨畫との異なるが如し。同じ菊を見るも、彼は色を重んじ、此は形を主とすといふ。西洋草花のチュリップ、ヒアシンスなど、その葉に何の趣もなくして、その花の妖艶なるは、寧ろわれらの眼に毒々しと感ぜらる。秋の野の女郎花、尾花、その花に何の美はしきことかある、されどあるかなきかの黄花を捧げて、なほたよ〳〵と下陰の蟲の音にもゆらぐ樣、ますほの色はやがて白くほゝけて、霧に濡れ、風に靡く趣は、われらが胸に浸みて忘れられず。日本人が花を愛するは、その外形にあらず、賦色にあらずして、その風情にあり、直ちに自然の懷にわけ入つて、その眞意義を握るにあり。かくしてこそ自然を愛し、自然を尊ぶなれ、自然に親しむことの深きは、これ日本國民の特性なり。

或は曰く、自然の昵愛はわが國民が固有の性質にあらずして、支那文學の感化多きに居る。山川の景、花木の美を愛する詩歌は、懷風藻、萬葉集に至りて多く、書紀、古事記には極めて稀なり。梅花の詠は百濟の王仁の歌と稱するものをその

嚆矢といふにあらずや、櫻花の美を賞する情を詩に賦したるは平城天皇に始まる。これらは隋唐詩人の影響に出でたるなるべく、公けに韓唐と交通せし以前の歌を見るに、專ら人事を詠ずるのみ、自然物をその中に挾むも、多くは蔬菜魚貝の如き實用の品にして、自然の美にあこがるゝ情を表はしゝが如きものは、殆ど見ることなし。知るべし、自然の愛もまた外國傳來のものなることをと。されどこの說には同ずること能はず。田野に鍬を執る百姓にも、中心深く詩情の存するものなからんや、たゞ機に觸れざるものは、終身その才を發揮することなくして已む、天稟の才情も、これを啓き、これを導くものなくんば、顯はれざるなり。小兒の好むところを見るに、賢不肖を問はず、植物園よりも動物園を喜び、床に飾りたる盆栽よりも汽車、電車の玩具を愛す。その平生に近き人事に興味を有して、これを摸擬すれども、大なる自然については考ふるところなきなり。上古の民はその單純なることなほ小兒の如し、その花を歌ひ、紅葉にあこがれざりしは、いまだこれを啓發するものなかりしが爲なり。璞玉石の如しといへども、磨いて炫燿の光を發す、光は內より發するなり、外よりは唯磨けるのみ、

支那文學の傳播は詩趣發展の機たりしもの、先天的に自然を昵愛する特性のわれに存するなくんば、この指南車ありとも、動くことかくの如く遠かならんや。

平和淺近

論ずるものまた曰く、自然の美を知るは、その美に見放されたる時にあり。曾て鄉里を出でざるものは、いまだ鄉愁の情を覺えず。霧深く、晝なほ燈を便る倫敦に住みて、始めて田舍の清明なる景色の愛すべきを知る。異鄉の旅客は松島の勝概を說けども、鹽竈の漁夫はたゞ網にかゝる魚の多少を數へて、松に降る雪を寒しと喞つ。優秀なる島帝國に住み、上下三千載悠々として過し來れるもの、誰か眞に山河の美を感ぜん、擊壤鼓腹の民は却つて君德を知らず。この論はまことにその理あり。子を失ひたるものにあらずんば、親の愛を知らず、親に別れたるものにあらずんば、子の愛を知らず、日本國民は子を有てる親なり、親の膝元にある子なり。かれらが自然に對するは、子を愛する情が先天的に人間に存するが如く、親に孝なるべき敎を人の子のげに理と守るが如し。中心に備はりたる情の、支那の儒敎文學等に啓發せられて、外に顯はれたるなり。爐を圍んで親昵せる家族の愛は、單簡なりといへども醇正なり、わが國民が自然の愛もまたかくの如し。苛酷なる氣候の恐るべきを知らず、悲慘なる人生の運にも會せざれば、明媚にして緩和なる自然の憧憬を痛切に感せず。たとへば慘澹たる苦心を重ねて、更に平坦に歸れる人にあらずして、生れながらに平坦なる人の如し、渾身の平坦は等しく愛すべしといへども、彼の心裏に潛める深刻の感は、遂に此の胸中に求むること能はず。國民が自然の愛は廣く上下にゆき渡りて、また極めて醇正無垢なるものなりといへども、その弊を數ふれば、平凡なり、淺近なり、猛烈沈痛、刺すが如く、剜るが如きものあるを見ず。やさしき自然の懷を離れざる國民の情は、おのづからかくの如くなるべく、その人生に對する思想もまた自然に對するに似たるべきことは、推測するに難からざるべし。

東洋と西洋

更に說あり、曰く、自然に執着するは、啻に日本人の性質たるに止まらずして、東洋人が一般の性質なりと。この說は既に定論として人のよく知るところなりといへども、記述の序に、またこれについて一言を費さゞるを得ず。そも〳〵事物の性質はこれに反對せるものと對照するによつて明瞭なり。夜あつて太陽

の光を知り、天高きがゆゑに人小さし、善あつて惡あり、女子の柔あつて益、男子の剛を見る。人間は人生を知れば可なり、文學は人生を寫すを以て、その目的なりといふ、されど人生を知るには、自然を知らざるべからず、自然は人生と對照す、二者を比較して、始めて各自の眞相を知るべし。故に古今の文學いづれも人生を寫すと共に自然を寫す、たゞ性に好惡あり、或るものは左に偏し、或るものは右に傾きて、公平なるを得ず。兩大陸を比較するに、西洋人の見るところは人生を主とし、東洋人は自然を重んず、諸般の文藝はよくこの相違を示せり。

兩洋の文學

古くは希臘のホーマーは人に同じき神、神に似たる人の交渉戰鬪を寫して、自然の敍述は極めて稀なるに、印度の戲曲は人をして自然の景物を說かしむること多し。希臘の彫刻は專ら人間の美を寫し、永く範を西洋に垂る。支那の文藝を見るに、詩經の如きは人事を主とすれども、これもまた自然によつて興を發せるもの少からず、清談家流、文人者輩は人生の煩を厭ひて自然を友とし親む。西洋人は自然を寫すにもこれを人間に擬し、東洋人は人間を說くにもこれを自然に比す。人間に擬すれば、自然もまた活動の氣を帶び、自然に比すれば、人間の濁れるを清くし、熾なるを和ぐる傾あり。わが國にしては、新古今集前後の和歌および元祿、天明の俳句がいかに敍景の詠に富めるかを思へ、謠曲が人事を主としながらも、なほ自然を寫したる文句の過半を占めたるかを思へ。これらはわが國民が固有の性の他の東洋人に等しきもあるべしといへども、また印度の佛典、支那の詩文の感化によれること少からざるべし。

東洋人の消極性

されど一般の東洋人が自然に對する感情は、かくの如きに止まらずして、なほ極端に向ふて走れり。西洋人は專ら人智の發展に勵みて、學術の研鑽器械の發明等に、あくまで人間の力を活動せしめて、自然の威權に敵し、抗し難しと思はれしその壓制にも反撥す。壯大なるゴシック風の家屋の如き、汽車、電車の運用の如き、いづれもこれを證せざるはなし。東洋には、現代の日本を措いて、かくの如き人力の發動なし。印度の氣候はその住民を懶惰にし、自然の猛威に屈せざるを得ざらしむ。支那には孔子の道の實踐を主としたる、老莊の敎の虛無を說きたる、細論すれば種々の區別あるべしといへども、世俗一般の信念とするところ、天運は抗すべからず、人間は己を捨てゝこれに調和せざるべからずとい

ふにあるが如し。榮枯盛衰の假象は人生に見、常住不壞の實相は自然に見る、人生は虛僞なる慾界の姿にして、自然は無限なる造化の鏡なり、彼は浮動、此は寂靜。されば不滅なる生命を得んとするものは、人爲の巧を捨てゝ、自然の眞に就かざるべからず、慾火の浮動は寂靜の水もて消すべし、山と動かず、水と拘はらざる自然の性を得て、人間は始めて完全の域に至れるなり。西洋人の社會觀の積極に樂天的なるに反して、東洋人が消極に厭世的なるは、かくして來れり。

消極的文藝

西洋人は人間を本とし、東洋人は自然を重んず。人間を本とすれば、强ひてその性情を矯めんとはせず、寧ろ天に稟けたるところを積極的に完全に發展せしめんとす、西洋の道德が概するに愛を主とし、また戀愛を神聖なりとしたるなど、皆この理に出づ、文學が個人性の變化を寫さんと力むるも、由つて來るところ深しといふべし。自然を重んずれば、人生を擧げてこれに從ふ、東洋の道德も一概にいふべからず、性善を唱へ、性に從ふを道とすといふが如きもあれども、なほ人性は汚れ易く、亂れ易し、道を得んとするものは、力めて克己の綱に意馬心猿の狂奔を拒がざるべからず、制慾は修身の鍵なり、己を空しうしてこゝに仁義ありとす。その文藝が人生を去つて自然を寫し、道德を人化したるが如き普遍性を寫すも、これらの思想に基くなるべし。わが國にては、東山時代の水墨畫が山水を主題とし、人間を寫しても、遁世得脫、寒巖枯木の如き清僧、居士を描きたるが如き、馬琴が小說に勸善懲惡を旨としたるが如き、進むところは異なれども、いづれも如上の東洋思想の影響に出でたるは、言はずとも明かなり。

わが國民の積極性

一般東洋人の自然に對するは、その威力に屈從せるなり、悅服せるにあらずして、懾伏せるなり、人間は自然の親友ならずして、その奴隸なり。その文學におけるも、人生を蔑視して、自然の一時的幻影とせずんば止まず。この點において、日本國民は大にかれらと性質を異にす。西洋人に比すれば、等しく自然を重んずるなり、されどわれらは他の東洋人の如く、自然を恐怖せずして、これに親昵す、あくまで自然を尊重するは、その慈愛を思へばなり、寒村の民が收斂の君に對するが如きは、われらの事にあらず。むしろわが國民は積極的なり、樂天的なり、生々として活動して、人生の力を無限に發展せしめんとす。これを證せんとせば、萬葉集の生氣ある和歌を見よ、また外國の影響を脫して、己の力を自覺せる

平安朝と元祿時代とを見よ。一の貴族的なると、一の平民的なるとの相違はあれど、共に感情を主とし、戀愛を寫して、赤裸々に人生を描き出さんとしたるにあらずや。落窪物語の如きは、自然に關する章句は始どこれなく、近松の淨瑠璃は謠曲より出でたるところ多くして、しかも景物の描寫の如きは、その道行の外には稀なるにあらずや。額田王の歌をはじめとして、日本人は春秋を比較して、秋に傾くこと少からず、その秋に傾くは、悽慘なる風物を見ずして、千種の花の色々の美を愛するなり。支那人は杜鵑の聲を悲しと感ずるに、われらは深更の初音を待ち兼ねて嬉しと聞く、わが國民は厭世の觀念尠くして、世間に活動し、希望は前途に洋々たり。

されど支那文物の輸入ありてより、日本國民は著しく東大陸一般の思想の感化を受けたり。かれらは從來覺えしことなき悲愁を感じ、人間の無常を觀じ、人生を提げて自然の中に吸收せられんとせり。奈良朝に兆して江戸時代に至り、殊に鎌倉、室町時代において、この傾向を著しとす。日本固有の積極主義と東大陸の消極主義とは、わが國において衝突したり、否、由來矛盾を好まざる平和の

將來の國文學

國民はよくこの衝突を和げて、反對せる二者を融合せんとしたり。されどなほ中世以來、消極主義の偏重せられたりしを憤慨して、上古の積極主義に歸さんとしたるが、國學者のみづから天職としたるところなりき。今日また別に西洋の活動主義の輸入したるあれば、わが國民の將來は、決して從來の如き受動的のものにあらじ。その行動を案ずるに、蓋し國民の本性を基礎として、これを彩るに東西兩洋の思想を折衷したるものなるべし。折衷はよく物の中正を得て、極端に走らずといへども、執着の薄きがその缺點なり。故に邦人の性、典雅、冲淡、酒脫の美は存すれども、凡俗、平板、淺薄の誹もまたこれあり。是非は何物にも存す、わが國民は唯その長所を發揮すべし。自然を愛するはわが特性にして、人生に執するもまた然なり。自然と人生とは車の兩輪の如し、兩輪といふよりも一物の二面なり、人生は卽ち自然の一部、自然はまた人生の反響なり、二者相離るべからず。時にその一面を放ちて見るは、他の一面をして明かならしめんが爲なり、便宜の爲に兩片とすといへども、これを理會すれば、渾然たる一體なり。健全なる思想は二者を分つてしかも分たざるところに存すべし。この意義を明

かにするは、卽ちわが國文學の任にあらずや。

時代の區劃

第一章　この時代の概觀

太古

茲にいはゆる太古とは、神代より紀元を經て奈良朝の終、平安奠都に至る間、おほまかにいへば神代このかた紀元千四百五十四年までの時代を總稱せるなり。されど大化以前の年數は頗る曖昧にして、歷史の敎ふるところもいまだ容易に信じ難く、思ふにさばかりの長年月を經たりとも覺えざれど、今は暫く普通にいふまゝに從ふのみ。この悠々たる年月の間、諸般の文物その變化一再のみにあらず、これが敍說に當りても更に一層時代を細別するを要すること當然にして、曩に余が著はしたる新體日本文學史敎科書にもこの文化の變遷に基きて、おほよそ四期を劃し置きぬ、神代以來、漢學公行以來、佛敎傳播以來および奈良朝これなり。而してこの四期やがてまた太古文學發達の四段落なることを論を須ひずといへ　しかもこはたゞ他時代に對する權衡上の區分に過

ぎずして、世古うして人文の發達愈〻遲く、到底これを以て進歩急激の後世に較ぶべくもあらず、その成績のごときも多く言ふに足るものなし。これを今日に傳はれる作品に徵するに、當代の文藝がよくこの四期を通じて漸次進歩發達せるは明かなる事實なりといへども、その歩武極めて緩にして、一々の期間につきて著しき變化の實跡を指摘するが如きは得て望むべからざるところ、一國文化の歴史よりいはゞ、文運の發展また當に大勢の變遷推移に伴はざるべからざるが如しとはいへ、この時代の文學については、余輩は寧ろ簡單に二期となすの便にして、且つ當を得たるを思はずんばあらず。二期とは大化以前（神代―一三〇五）、大化以後（一三〇五―一四五〇）是なり、而して奈良朝を以て特に後期に於ける文運發展の顯著なる時期とす。

時代の特色

概觀するに、この時代にありては文學なほいまだ後世におけるが如く外國文藝の影響を受けず、よし受けたりとするも、極めて僅少にして、わが日本國民が本來の國民性を最も赤裸々に表白し、從つて日本國民の純粹なる感情をありのまゝに窺ひ得る點において、他時代に見難き特色を有するものといふべし。

近世のいはゆる國學者等は、本邦道德の紊亂を以て專ら儒佛二教傳播の罪に歸せんとするものなるが、その極力外國文明の影響を排斥せんとするの結果、新に樹つべき倫理道德乃至制度の如きも宜しく範を天眞無垢なる原始の人間に則るべしとなし、最も熱烈なる憧憬思慕の情を寄せたるはこの時代にして、わけてもその初期にありと雖も、要するに文物風俗未だ開けず、思想の純潔は則ちあれども、單純幼稚の域を脱せず、いはゞ人間の搖籃時代に過ぎざりき。

太古の風俗

太古國民生活の質朴なるは想像の外にあり、明治の聖代となりては邊地僻境の民もなほかつこれを髣髴するに難し。政治の中心地といふも、今日の村邑とその繁華孰れぞ、奈良朝以前遷都の概ね帝位の繼承に伴へりしに照らしても、都といふ名はいかめしきが、實は宮殿のある所といふに過ぎずして、廢むるも建つるも誠に易々たりしさま想見すべからずや。當時、一般國民の地を相する、曠茫の平野を棄てゝ、山麓谿間の小仙境に就き、薪採るに易く、水汲むに便なるの邊、山を背うて暖きに面し、三々伍々その住宅を營む。家居多くは黑木作にして、棟梁を繫ぐに藤葛繩索の類を以てし、葺くに蕨を襲ね、柱を埋めて礎を用ひ

す。その他、日用の具、木葉を以て杯椀に供したるが如き思へば、衣服調度の類もまた概ね推知すべきのみ。

外國文物の傳來

時勢既にかくの如くなれば、よしや太古の太古には文學行はれたりとするも、なほ今日の片山里に僅かに盆踊の歌謠等の存するにも似たりしならんか。されどかゝる時代もこれを久しうしては、遲々たりと雖も文物の進歩漸く認むべく、わけて應神天皇の十五年(九四四)には漢學の公行(私にはこの以前既に行はれたりしならん)と共に、三韓の文化を輸入し、ついで支那との交通も開け、雄略天皇は殊にかの國の制度および產業に注意したまひて、衣食住の進歩益、見るべきものあり。この勢を頓に助長したるものは、實に佛敎の傳來にして、事は欽明天皇の十三年(一二一二)に屬す(私にはまたこの以前すでに傳はれりき)。時に聖德太子あり、英邁の資を以てこれが興隆に力めたまひしかば、その傳播幾ばくもなくして宇內に普く、從つて久しく國民の間に鬱屈せる思想は俄然として迸發し、憲法こゝに布かれ、制度こゝに改まり、造寺造像の美術そのほか百般の事物一時にその面目を新にして、やがて大化の改新となりぬ。蓋し眞正の意義における日本文明史は、佛敎の渡來を以て開卷となすといふも不可なく、頑固なる國學者、漢學者の輩、口を開けば佛敎輸入の惡果を呪詛して止まずといへども、その日本文化に對する第一の開發者たり恩人たるは、終に否定すべくもあらざるなり。

文藝の進歩

當時、支那は唐代の盛時にして、その一事一物悉くわが國民の模範となりたりき。卽ち我よりする留學生と彼よりする來朝者とがこれを傳へし結果は、聲鐘の如く國民の自覺心を喚起し、やがて奈良朝盛時は出現するに至れり。さきに余輩はこの時代を以てわが國民の搖籃時代となし、その文化は質實樸野の一語に盡きたりとなしゝかども、かくて太古も、神代ながらの太古と比較的後代の奈良朝との間には、著しき逕庭あり、特に奈良朝の建築彫刻は範を唐朝に取るといへども、その靑きは藍より出でて藍より靑きもの、洵に以てわが國藝術の誇とするに足る。かの推古式また飛鳥式と稱せらるゝ法隆寺の藥師三尊像の古拙素朴なるに反し、所謂天平時代の作品たる東大寺三月堂の不空羂索觀音等の諸像が精巧優美を極むるを見るも、思半ばに過ぎん。文藝の發展緩漫な

りといへども、しかも確乎としてその歩武を進め來れる、想ふべきなり。

文學と美術

されど文學美術に對する外國の影響を考ふるに、文學は、美術がかれの輸入とともに直ちにこれを摸倣し同化して、絶妙の域に達せるが如くに、著しき感化を被らず。そは彼我國民根本の思想を異にする外に、言語の不同といへる超越すべからざる一大障壁の横はればなり、漢文學傳來の後、年漸く久しく、漢詩を操縱するものさへ出で來りたりといへども、よく一人の本國の才人に追隨するに足るなく、日本固有の文學に至りてもこれがため特筆すべき直接の影響を見ざりしもの、もとよりその所なり。これらに關してはなほ後章に述ぶべし、要するに外來の風潮はわが文化に影響すること極めて大に、しかも文學のみは開發指導せられ、もしくは轉化左右せらるゝこと、他の藝術に比して少かりしをいひて、ひとまづ概觀の筆を結ばんとす。

第二章　大化以前

大化以前の典籍

大化以前の典籍にして今日に傳はれるものは甚だ稀なり。唯漢字を以て國語を寫したるものに、法隆寺の釋迦藥師兩像の光背の銘、及び中宮寺の天壽國曼荼羅の銘等あり、漢文を以て書けるものに聖德太子の十七箇條憲法幷に法華經義疏等ありて、これら二三によりて纔かに當時の情勢を察知するを得るのみ、純粹なる文學として見るべきものは全くこれあることなし。奈良朝に至りて古事記、日本書紀及び諸國の風土記等の成るあり。ついで平安期に及びては延喜式に祝詞を輯めたりといへども、これらはいづれも比較的後世の撰にかかれば、よく大化以前の面影を傳ふるに忠なりや、後世の思想によりて不純なる色彩を附加したることなしや、頗る疑ふべし。

記紀の二書

古來、古事記、書紀の二書は、神代以來の確實なる正史として許され、後人の貴重尊崇して措かざるところなり。されど書紀の記事が漢文を以て記されたるが爲に、動もすれば舞文曲筆、潤飾に急にして蒼然たる古芭を存するに疎きものあるは蔽ふべからざる事實にして、既に古人の辯じたるところ、甚だ當れり。ひとり舞文曲筆の弊の惜むべきのみならず、余輩はさらに進んで記紀の二書を

以て全然正確なる歴史として憑據するの、また甚だ所以なきを信ぜんとす。近くこれを明治三十七八年戰役の金州丸事件に見よ。一報傳へてこの運送船の悲慘なる運命を說くや、世人は乘組將士が花々しき最期を夢想して、如何にかれらを以てわが武士道の精神を發揮したるものとし、日本軍人の典型たるに耻ぢざるものとして、讃歎欽仰、殆ど最高級の歎聲を放ちて惜まざりしぞ。何ぞ知らん、潮わく日本海上に皇國の萬歲を三唱しつゝ護國の鬼となりたるべき渠等は、俘虜として露國に抑留せられ、二年の後、無事の歸朝却つて五千萬の民衆をして呆然自失せしめんとは。現在目前の事にしてなほかつ然り、況んや文字の記すべきなく、典籍の傳ふるなく、耳傳口誦、わけて千年の年處を經たる奈良朝に至りて國初前後の事實を筆にせんとするをや。その漸く事實を遠ざかりて、甚しく空想化せられたること知るべきのみ。果して然らば記紀の二書、これを上代純樸なる事歴を記載したる歴史と見んよりも、むしろ過半は太古の國民がその想像より產出し來れる神話なりといふを以て、一層妥當なる見解なりとせん。

記紀は既に神話なり、今その中の歌を檢するに、一々吟詠の時代と作者とを明かにすといへども、これもまた必ずしも信を置くに足らず。一二の例を引かんか。古事記に載せて長歌の始と稱せらるゝ、八千矛神が越の沼河姫を慕ひてよめる歌、及び姫の答歌、さては八千矛神の正妻須勢理姫命がよめる五首の詠など、綢繆たる人情を歌ひ出して、うたゝ稱讃に値すといへども、その餘に巧妙なるが爲、却つて後代の作たるを自證せるは、先人の早く注目せるところなり。古事記仁德紀の條に見えたる、隼別王が皇軍に追はれて大和の倉椅山に上りてよみたまへる歌が、肥前風土記の杵島曲と大同小異なるを見て、說をなすもの或は後者を以て前者を模擬せるものとなせど、事實は却つてこれに反し、肥前に行はれたる俗謠を以て隼別王に假託せるものなるは、推斷するに難からず。その他、古事記と日本書紀と詠歌の作者または由來の異、齟齬するところあるを見ても、二書の載するところ必ずしも盲從しがたきを知るべきなり。蓋し詩の國風が、誤つて後人の揣摩臆測に遇ひ、俚歌童謠の歴史的事實を以て附會せられたると同一轍か。

祝詞の醇醕

次に祝詞に至りては太古を通じてその風體著しき變化を被らず、概ね古式のまゝなりといふも、しかもまた自然に時代の影響を免れずして、その間往々後代の思想を交ふることなきを保せず、果してその何れを大化以前のものとして、いづれを後世のものとなすべきか、頗る識別するに苦む。要するに大化以前の文學的作品は今に存するもの極めて少く、その僅少なるものだに、眞贋混淆、もしその中につきて純の純なるものを求めばその數と量とはいよ〳〵減せん。これらは當來の文學研究者がまづ注意せざるべからざる重大なる問題なり。

開闢化生

日本の神話は天地開闢說、自然物化生を以て始まる。天地まづ開けて天神地祇生じ、ついでもろ〳〵の天然物化生してまた神とはせられたるなり。たとへば山は山祇、海は綿津見、火は軻遇突智、水は速秋津姫、木は句々廼馳、土は埴安、雨は高靈、雷は火雷、風は級長戸邊、五穀は歳神といへる類にして、この天然神話の事歴は天上卽ち高天原を以てその舞臺となしたるが、いつしか下りて豐蘆原すなはち地上のこととはなりぬ。これと同時に天然神話は一變して英雄神話となれりしが如し。素戔嗚尊は實にこの過渡期の代表者にして、尊の豐蘆原に下りたまひしが恐らく人間界の始なるべし。

素戔嗚尊

そも〳〵太古の思想を以て人間發生の原因を尋ぬるに、高天原に在りて罪を得しもの、この土に追はれて人間となる、すなはち神の墮落やがて人間の發生なり。そのいはゆる罪にはいろ〳〵の天つ罪、國つ罪ありて、これを贖ふには爪髮を截りて潮水に浴し、贖物と稱へて種々の供物を奉る。これ全く心靈と物質との二面を混同したるものなりといへども、當時の人はとにかくにこれを以て贖罪の手段と思惟したるなり。素戔嗚尊も高天原にありて罪を犯し、贖罪を終へて清淨の身となりたまひしが、なほこれが爲に人間界に墮落せざるを得ず、出雲國に至りて簸川上に八岐大蛇を退治し、奇稻田姫を迎へて妻としたまふ。思ふに尊は大國主命及び彦火火出見尊と共にわが英雄神話中の最大立物にして、恰も神代三幅對の觀あり。すべて鬪爭に端緒を開きて結婚に局を結ぶは、洋の東西を通じたる英雄神話の一般性質にして、素戔嗚尊は大蛇と戰ひ、大國主命及び彦火火出見尊は兄弟と爭ひて、これに勝ち、さていづれもその慕へ

る麗姫を娶るに至る。この英雄神話の内容たるや、強ち荒唐無稽なる空想の所産とのみしも思はれず、實際の歴史的分子ももとより混れるなるべく、この歴史的分子を經として、織るに他の神話的要素の緯を以てせるものなること、疑を容れず。

説明神話と動物神話

記紀に最も多きは、人生、風俗、物名、俚諺等を解説せる説明神話ともいふべきものにして、古事記に、高天原より遣はされたる雉子が、途に射殺されて、使命を全うする能はざりし事を記して、雉子の頓使（ヒタツカヒ）といふことを明かにし、伊弉冉尊がわれ黄泉（ヨミノクニ）に至りて日に千人を殺さんといふに、伊弉諾尊がさらばわれは日に千五百の産屋を作らんといへることを引きて、生者の數の常に死者にまされるを説くの類にして、茅渟の海、奈良の都等の地名を解釋説明せるが如きもみなこれに類す。また別に一種動物説話とも名づくべきものあり、隱岐より出雲に移らんとする兎が一策を案じ、鰐を欺きて、われらが家族は孰れか數多き、卿等まづ一族を連ねて海に浮べ、われうち渡りて數へ見んとて、鰐が唯々として橋を成す上を躍り越え、將に陸に上らんとする時鰐の愚直を嘲り、却つて捕へられてその裘を剝がれたりといへる稲羽の白兎の傳説、また牡鹿が一夜その身に霜ふりかゝると夢み、覺めて何の祥ぞとその妻に謀るに、牝鹿答へてこれやがて御身が鹽漬になるべき前兆なりといひしが、のち數日、果して獵人の爲に射殺されたりといへる、後世小説の濫觴とも稱せらるゝ夢野の鹿の傳説の如き、即ちこれなりとす。

神話の性質

何れの國にありても、思想單純なる時代における神話は、その國にのみ特に存して他國に類例なしといふべき如きもの少し、わが國の神話またこの例に洩れず。概括して論ずるに、わが太古の神話の多くは、天孫種族が僻遠の海濱に放浪して、いまだ一所に定着せざりし以前、早く既に傳はりたるものにして、その大和地方において始めて發生したるものにあらざるは、明かなり。海洋に關する説話の多きことこれを證す、伊弉諾、伊弉冉の二尊が天の浮橋に立ちて、矛を下して海水を探りたまひしといふに及ばず、御禊（ミソギ）を行ふに海岸において、河に浴すといはざるが如き、或は潮干る珠、潮滿つ珠の傳説の如き、その他船といひ、鰐（鰐はわが海岸には産せず、或は鱶の類ならんかといへり）といふの類、一

祭祀

一擧ぐるまでもなし。つぎに、由來宗廟を重んじ祖先を敬ふはわが國民固有の美風、記紀の記事には隨所にこれを窺ひ得べきが、神話もまた天照大神の御稜威及び天孫降臨の偉蹟を以て主眼となし、八百萬の神々いまだ曾て大神に對して背叛の言動ありしを傳へず、常にその旨を奉體して從順の意を表はせりとす。以てわが國體の動かすべからざるものあるを知らしむると共に、太初よりわが社會組織が家族制に成りて、族制政治の行はれたるを首肯せしむ。諸神の名を擧ぐるに當りても、必ずこれが後世の何氏の祖たるを明かにせるが如き、また以て祖先を尊崇する念のいかに篤かりしかを證するものにあらずや。

そも〳〵太古文藝のよりて發するところを考ふるに、多くは國民娛樂の用としてよりも、神祇渴仰の具として萌芽を現はすを見る。太古の日本社會は族制制度に成りて、氏族の祖先は子孫世々これを崇敬し、年處を經るまゝに、時代の霧漸く彼我の間を隔て、終に祖先は人間以上の性格を帶び來つて、神とし仰がる。これ卽ち氏神にして、初は父母、祖父母に事へたるもの、いつしか神格を以てこれに附與するに至れるなり。されば神といふも全然人間を超越したるものにはあらずして、畢竟人間とその性質を同じうし、その勢力においてもいたく懸隔あるにあらずと思惟せられたるも、またこの故に外ならず。かの神人相通じたりといへる三輪の傳說(大和の三輪神嘗て玉依姫の許に通ひたまひしに、姫その何人なるかを詳かにせず、試みに男の衣に針を貫き、後朝に至りて針に繫げる絲を手繰り行き、その絲の神殿に入れるを見て、始めておのが戀人の三輪神なるを知りたりといふ、これと類を同じうせる說話韓國の古代にもこれあり。)及び丹塗の矢の傳說(加茂の縣主の祖建角身神の娘玉依姫、背見の小河に丹塗の矢を得て床邊に飾り置きしに、この矢こそ火雷神にして、姫やがてこれに感じて別雷神を生めりといふ。)の如きを見ても、神人の間に確然たる差別なく、二者時に交際談話して關係を保つとなしゝを知るべし。かくて人間に等しき性質を具へ、烈しき感情を有する神祇は、その意思のまゝに、時あつて幸福を下し、時あつて災禍を及ぼす、人類生殺與奪の權かゝりてその掌中にあれば、人間は一意神意を和ぐるに急にして、戰々競々としてその機嫌を損せざらんことを力め、以て人生無上の祝福を得んことを祈求す。これが祈求の手段として

は、また人間に對すると等しく、布帛を捧げ、食物を供し、或は神前に舞踏して、告白の祭文を讀めるも、決して偶然にあらざるなり。祝詞は實にこの祭文として用ひられたるものなりき。

祝詞の性質

祝詞は普通散文として取扱はるといへども、その用神意を悅ばすにあり、一種の諸音を有せしめて、壇前に朗讀せるものなれば、一に節調を主とす。この意味に於て和歌と距ること甚だ遠からず、たゞかれが備へたる如き律格を缺くのみ、卽ちこれを散文詩と呼ぶ、最も當れり。されば祝詞の長所は聲調の整へるにあり、聲調の美にして、思想の比較的に見るべきものなきは、太古文學を通じたる性質なりといへども、祝詞において殊に然りとす。その內容の長所をいへば、秋毫の包むなく、欺くなく、飾るなくして、天眞のまゝに感情の流露せることなるべし。されどさすがにこれも時代の產物なり、その神々に向ひて告ぐるにも、しか〳〵の供物を捧ぐるが故に、願はくは風雨時を違へざれ、年は豐かに、疫病の禍するなからんことをといへるなど、全く交換的に報酬を待てるが如きは、餘に幼稚に、餘に露骨なりといはざるを得ず。行文また變化に乏しく、千篇一律の嫌なきにあらずといへども、譬喩の壯大にして氣魄の雄渾なるは、後世よくこれに及ぶものなし。祈年祭の辭に、

天の壁たつきはみ、國の退きたつかぎり、青雲のたゞ靡くきはみ、白雲のおり居、向伏すかぎり、青海原は棹柁ほさず、舟の艫の至り留まるきはみ、大海原に舟みちつゞけて、陸よりゆく道は、荷の緒ゆひかためて、盤根、木根ふみさくみて、馬の爪の至り留まるかぎり、長道間なくたちつゞけて、狹き國は廣く、峻しき國は平らけく、遠き國は八十綱うちかけて引きよすることのごとく……

といひ、また大祓の詞に、

科戶の風の天の八重雲を吹き放つことの如く、朝の御霧、夕の御霧を、朝風、夕風の吹き拂ふことの如く、大津邊に居る大船を舳とき放ち、艫とき放ちて、大海原に押放つことの如く、彼方の繁木が下を燒鎌の敏鎌もて打掃ふことの如く……

といへるが如き、以てその一斑を窺ふべし。これらの例に見るも、祝詞の最も古きものは、また大和奠都以前、海邊に棲居したりし時代の餘風を帶ぶるものな

きにあらずといへども、多くの祝詞を綜合するに、最古の神話時代が漸く轉じて、農事の重視せられし時代に入りて製作せられしものなりと斷言するを憚らず。祈年祭の詞、風の神の祭の詞、または大嘗祭の詞を讀め、いかに當時の國民が耕耘の事に注意し、焦心して、年々の豐凶に全生命を託したりしかを發見せん。またいはゆる天つ罪として大祓の詞に擧げたる畔放、溝埋、樋放、頻蒔の類も、みなこれ農作に關する罪名にあらずや。海事より農事に移れる太古國民生活の變遷は、正に祝詞によりて反映せられたりといふべし。

太初の歌體

太古の歌、最も古くは律格いまだ定らず、法則に拘束せられずして、思ふがまゝに感懷を行れりき。記紀の歌を計算するに、短歌最も多くして、長歌これにつぎ、旋頭歌と片歌とは幾ばくもあらず、而してこれらのもの、いづれも詩形放恣亂雜にして、一句三言なるあり、四言なるあり、或は六言、七言、八九言に及ぶ。格調整ひ、規則生じて萬葉集に見ゆるが如き、一定の歌體を成し、從つて想形二つながら見るべきものあるに至りしは、おほよそ漢文學の傳來せる應仁天皇の朝より後のことといふべし。

歌謠の性質

太古の歌に取るべきは、祝詞におけると同じく、その外形にありて內容にあらず、語句語調にありて感情思想にあらず。構想直白なりといふの外また奇を認めざるに、措辭いかにも巧妙にして甚だ耳に快し。されど祝詞に比較するに、これには絶えてかれの雄大を見ず、かれが譬喩莊重森嚴、天地と共に大にして、聞くものをして轉た心懷を曠うせしむるあるに反し、これの用ふるところ何ぞ卑近にして平凡なるの傾あるや。これ一は神に告ぐる祭文たるに、一は人間同志の間に謠はるゝもの、用途の差のやがてこの相違を生じたるや勿論なりといへども、余輩をして更に一歩を進めていはしめば、前者はなほ未だ太古民族の抱懷せる征服的氣象を脫せざるに、後者は既に風光明媚の境に定着し、熙々たる春光に浴して、平和の情感を味ふの相違に坐せずんばあらず。試みに二者が用ひたる言辭を引きて比較せんか、等しく自然を寫してもかれは偉大にして勢力あり變化あるものを好む、故に天といひ、雲といひ、霧といひ、潮といひ、風といふ。これは眼前卑近の小景物を捕ふ、故に谷のみ、磯のみ、河のみ、瀨のみ、島のみ、崎のみ。朝日の日照宮、夕日の日陰宮の二語に、日は僅かに見られたれども、月

は詠まれず、星もなし。最も多きは日常目擊接觸する動植物家具の類にして、動植物もまた實用的なるが多く、植物にては野蒜、粟生、韮、薑、蔓菁、大根、蕁、菱、栗、花橘、桑、榛、柧棱、槻、榊、白樹、熊樹など、いづれも衣食住もしくは祭祀の料たるべきもののみ、葉ひろ、五百箇眞椿などは實用の外にして、花も葉も賞せられ、一つ松といへるは姿のおもしろきを愛でたりけん、櫻花、蓮花も歌はれざるにはあらざれども、これらの花が歌材となることは極めて稀なり。動物また細螺、蟹、蠣、虻、蜻蛉、鮪、鯨、雀、鴨、鳴、庭つ鳥、鶏、鵜、隼、鵜、猪、馬の類を出でず、家具は太刀、胡床、菅疊、絹疊の類を見る。男女の姿の玉に比べられたるはその例頗る多く、女子の後姿を小楯にたとへ、齒並の美しきを稱して椎實に似たりとも形容したりき。

古來自然の美を愛し、花木を翫賞するは、わが國民固有の特色の一なりと稱せらる。されど太古の歌を見るに、純然たる敍景詩は甚だ尠く、むしろ人をして奇異の感あらしむ。日本武尊が、

鳴海らを見やれば遠し、火高路にこの夕潮に渡らへむかも。

と歌ひ、また

敍景の詠

はしけやし吾家の方よ雲ゐ立ちくも、大和は國のまほろば、たゝなつく青垣山ごもれる大和し美はし……

と詠じ給ひし如き、一見、敍景の詩なるが如きも、一は境に對して宮酢媛を慕ひ、一は大和を懷うて望鄕の念を述べたる抒情詩のみ。應神天皇が菟道野の詠、

鳥羽の葛野を見れば、百千足家庭も見ゆ、國のほもみゆ。

の如き、雄略天皇が初瀨野に出遊して、山野の形勢を見たまひての

こもりくの初瀨の山は、いでたちのよろしき山、わしりでの宜しき山の、こもりくの初瀨の山は、あやにうらぐはし、あやにうらぐはし。

の吟の如きは、やゝ客觀的敍景詩の體を得たるものといふを得べきが、この種の歌は五指を屈するにも足らざるべし。花木に對する、また既に述ぶるところの如し、後世花としいへばこの花となさるゝ櫻だに、いまだ主題としては歌はれざりしなり。さばれ神代既に木花咲耶姫の名あり。紀元後に稚櫻の宮の名あるを思へば、上代の民も花の眞美を知らざるにあらず、賞せざるにあらず、唯いまだこれを歌に詠じて樂むことをなさゞりしのみ。

抒情の詠

既に客觀に乏しうして敍景に貧なり、敍事詩もまた能くするところにあらずとせば、剩すところは主觀的抒情詩のみ。げにや抒情詩は當時の詩人が最も得意とせし壇場にして、中にも戀歌が過半を占むるも亦怪むに足らず。しかもその戀歌たるや多くは赤裸、男女の愛慾を基として實感に趨り、未だ優婉または精到を以て評すべきものなきは惜むべきに似たりといへども、後世の思想を以てかれらに强ひんは强ふるものの酷なるなからんや。武勇を倡道し、兵氣を鼓舞するもかれらが好題目、後世のいはゆる祝言たる新築を賀する歌、置酒高會の歡樂の歌など、また數見る所にして、從つて酒德を稱へたるものも甚だ少からず。蓋し酒の穀物と共に上代神饌の隨一たりしは、祝詞の明かに示すところにして、酒の太古の神に人に離るべからざる附隨物たるは、洋の東西を問はざるなり。哀悼の歌また多きを占むといへども、戀愛の歌の單に會合の機なきを恨み、戀情の止みがたきを洩らせるに止まりて、近世の人に慊焉ざるもの多きが如く、これはた單純膚淺にして、いはゆる涙痕未だ乾かざるに雙頰早くも笑を湛へたる兒女の感なくんばあらず。要するに眞率樸野は太古の國民の特性にして、恬淡快濶なる現實主義は歌謠の上にも漲れりといふべし。而してこの平和歡樂の氣象に滿てる思想はまた單純易解なる言辭によりて盛られ、時に何等の詩美をも認め難き空文字を羅列することあり。殊に抽象的方面の詞句に乏しく、いまだ夢の通路、戀の淵などいへる、後世に見るが如き微妙なる形容辭を捻出するに至らざりき。

卽興の弊

かく太古の歌が思想文辭二つながら平坦無味に流れ、日常慣用の語句を使用して得々たりしは、蓋しそが卽興を主として工夫を凝らさゞりし結果なり。從來、和歌の墮落せる原因を論ずるもの皆曰く、これ題詠の罪なりと。余輩もまた一面にはこの說を是認するに躊躇せずといへども、これよりもなほ卽興の弊の更に甚しきものあるを忘るべからず。然り、歌題を設けて、苦心慘澹、推敲に推敲を重ねて始めて成れるものを以て、歌合と稱へて勝負を鬪はせたりし題詠の弊と、實地の一端にのみ趨りて、和歌を以て贈答應接の具とし、殊に男女交際の媒としてこれを用ひたる卽興の弊とは、兩々相俟つて和歌の墮落を來せるなり。何が故ぞや、彼は生活の實際に遠ざかりて、迂遠なる閑文字の遊戲に趨り、

此は一時の實用の爲、嚴格の觀念を缺きて淺薄に陷る嫌あればなり。而して二者の輕重を問へば、後者の弊おそらくは前者よりも甚しきものあらん。然れどもこの論は平安朝に於ていふべくして、茲に言はんは早きに過ぐ。また余はこに、和歌の墮落といへり、然れども墮落の語は語弊なきこと能はず、和歌は元來唱和贈答にその端を發し、未だ曾て太古に於ては高尚なる地歩を獲得したることあらざりければなり。墮落といふは一旦興隆したる後の頽勢をいふ、太初の和歌はいまだ興隆の域に入らざりしなり。

時代の大勢

第三章　大化より奈良朝の終まで

聖德太子、不出世の才を抱いて、全力を佛教の興隆に盡したまひてより、漢土の文物決河の勢を以て奔注し來り、大勢こゝに移つて大化の改新となりぬ。かの國の制度に倣ひて、新に官省を設け、冠位を定むるなど、これまで遲々たりし文化は急速の進歩を遂げて、まさに百花繚亂の盛況あり。爾來、留學生は愈〻その傳習するところを以て、歸來盛に實地に施し、相繼いで立ちたまへる天智、天武の兩帝は共に政治に熱心したまへば、國家の紀綱大に振張し、文運またいやが上に發展したり。元明天皇都を奈良に遷したまふに及びて、世は七代七十年の奈良朝の盛時に入り、百般の文物燦たること前代未聞なり。皇居はこれまで一世一代にして嘗て定所なかりしを革めて、永久の帝都を造營す。その設計唐の長安の制に則り、これを後年桓武天皇が經營したまへる平安京に比べては、その規模もとより小なりと雖も、新都の面目は始めて帝京らしきものとなり、青丹よし奈良の賑は未曾有の繁華を呈し、更に聖武天皇の天平時代に至りては佛教の隆盛この一時に極まるとぞ見えし。この時代、年を經ること前後百五十年、諸國荒蕪の地を開拓し、道路を通じ、橋梁を架し、修堤築港等の工事、或は政府の事業として、或は地方の僧侶等が手に企てられて、物質的文化は著しき進境を示しゝが、學問文藝の道はたこれと隨逐して、進歩の機運に後れざりき。

當代の作物作者

この時代の文學的產物としてまづ注意すべきものの一つは、たしかに國史の撰修ならむ。この事業ははやく聖德太子が推古帝の朝にありて着手し、その實

功をも收めしなるが、惜むらくは燒亡して今傳はらず。さればこの朝の初、元明天皇の勅によりて成れる古事記、日本書紀の二書を以てわが國に現存せる最古の歷史とすべし。諸國の國產、傳說等を採錄せる風土記またこの時に成り、更に純文學の方面にしては、文體甚だ祝詞に似て、しかもかれの神前に告白する祭文なるに反し、これは庶民に宣傳する勅語として用ひられたる宣命といふものも、この奈良朝に至りて最もよく發達し、漢詩も行はるれば、和歌も盛になりぬ。漢詩の撰には懷風藻あり、和歌の集には萬葉集あり、前者は專ら當代名家の作を網羅し、後者は時に仁德天皇の古にまで泝るものなきにあらずといへども、それらは實例極めて少く、概してこれを當代の作品といふを憚らず。漢詩人にして支那文學に長じたるものには、吉備眞備、安倍仲麿あり、ともに唐に遊び、眞備は歸朝の後、文學を以て右大臣に進み、仲麿は玄宗に仕へて名をも朝衡と改め、李白、王維等と來往して、遂に骨を異域に埋めき。歌人に至りては更に多士濟々、柿本人麿、山部赤人、山上憶良、大伴旅人、その子家持等は中にもすぐれし巨匠なりき。

當時文學の盛なることかくの如く、その發達の著しき眞に驚くに堪へたりといへども、しかしながらこれを當時の造形美術殊に彫刻の進步に比すればまた遙にその及ばざるものあるに一驚を喫せずんばあらず。聖德太子法隆寺を建立して以來、佛寺の造營せらるゝもの年とともに頻劇なれば、從つて建築の術はいふにも及ばず、造像彫刻の技日に月に進まざるを得ず。今日奈良に巡遊するもの、試に法隆寺金堂の諸像を見來れる眼を以て、東大寺法華堂のそれと比較せよ。その人よし多く審美を辨へずとも、容易に彼の粗樸幼稚未だ原始的氣分を脫せざると、これが優美嚴肅の二面を備へて絕妙の域に進めるとを識別して誤らざるべし。これ固よりその模範たる三韓隋唐の粉本の相違にも基くべしとはいへ、實にわが國におけるこれ等の藝術がやうやく長足の進步を遂げたる爲ならずんばあらず。げに天平時代の前に天平時代なく、天平時代の後に天平時代なし、寫實を超絕してしかも怪奇の嫌なく、理想を表現してしかも寫實の妙を失はざるは、この時代の彫刻の特色にして、これやがてその東洋彫刻に冠絕する所以ならずや。萬葉集の如きはまたそのユニークなる點にお

いてこれと名聲を馳するに足るといへども、その眞の藝術的價値に至りては軒輊するところ頗る遠しといはざるべからず。

宗教思想の有無

かくの如く造形美術が漢土の影響を受けて發達進歩せること頗る大かつ速かなるに反し、しかもこれと並行隨逐すべき文學の、またこれがために開發せらるゝこと甚だ多からざりしは何が故ぞ、余輩の見を以てするに蓋し二つの理由あるが如し。第一には、佛教冲天の勢ありしことなり、君も臣も萬事を抛ちて佛教に沈湎し、位九五の尊におはして三寶の奴と稱せられたるが如きこと、この時代を外にして別にあらず。かゝる非常の熱心のありてこそ、はじめて今日までも世界無比の木造建築たるを失はざる大佛殿も出來しにて、この時代の佛像が極めて優秀なるも、當代の佛師の熱烈なる信仰心が凝つて成れるためにして、渠等は單にこれを美術として翫賞せんが爲には作らず、實に宗教的崇拜の對象として、畢生の心血を絞りて一刀また一刀を下せるなり。されど文學はこれと事情を異にして、なほ依然として男女の戀愛を歌ひ、喜怒哀樂の情を洩らすものとのみ思はれ、宗教的信仰と何等の交渉もなく、從うて文化の原動力と緊密なる關係を有することなかりしなり。第二には、材料の上の相違にあり、すなはち造形美術の如きは用器用材ともに一般的性質を帶ぶるに反して、文學は徹頭徹尾國民的なる點にあり。たとへば彫刻に用ふる大理石の如きは東西産出額の多少、もしくは性質の不同はあらんも、一旦これを得、これを材料として、彫刻家が技を揮ふに當りては、從來みづから扱ひなれたる木材に對すると根本の相違なし。繪畫に就ていふもまた同じく、かの維新前後洋畫の輸入に際して、パレットの上にコバルト、ウルトラマリンを調色したるものは、かたはらその指を臙脂、雌黄に染めたる人々にて、しかも何等堪へがたき程の困難に遭遇せざりしにあらずや。されど文學的作品の基礎たるべき言語に至りてはしかく一朝一夕に習熟練達すべきにあらず、外國語は到底外國のものたるに留まりて、これと邦人との間には超越すべからざる障壁の儼として存するあり。今日、西歐の文化頻に汪流し來りて、これらの國語を操るもの決して少しとせず、しかもこれによりて、或は詩に、或は文に、その思想を發表して成功したるもの殆どこれなきは、洵にこの國際的難關のうち勝ちがたきを證明して餘

あるものならずや。人あるひはいはん、建國三千年に垂んとする文明を有する明治の盛世と、文化なほ草創の世に屬する奈良朝以前とは、全く國情を異にす、當時の國民が支那文化に對する渴仰の念は、到底今日余輩が外國文明に對する歎仰の比にあらず、かれらが從來僅かに口より耳に傳へて止まざるを得ざりしその思想を、新たに眼に訴ふるの術を彼より得たるその喜やいかばかりなりけん、當時の國民のこれが學修に全心を傾倒したりしこと知るべく、その成績の如きも頗る見るに足るものありしならんと。余輩はこれに向つて多く答ふるの要なし、たゞ去つて當時の詩集たる懷風藻等を一瞥せんことを勸めて止まん。集中の絶唱と許さるゝ幾多の作品だに、漸く詩を成せりといふまでにて、竟にかの國人が所作の足下にも及ばざるを自白すべければなり。以上はその形式についてのみいへるなり、もし彼我の根本思想に至りては、二者の間に確然たる相違あり、和歌の漢學傳來の爲に影響を被ること少かりしももとよりのことなり。

漢文學の影響

さばれ水の流るゝ石を轉じ土を穿たずんば止まず、漢文學の感化の直接に間接にわが文藝を刺衝したること少からざりしはいふを俟たず。とにかくに詩人は、文選の律格に擬してゆがみながらに詩を作ると共に、歌人もまたその命題の上、取材の上に多少の暗示を得たりしなり。見よ、和歌はこれまでは專ら抒情の方面を主として、偶ま外物に及ぶも、曩にいへるが如く、日常實用のものの多かりしに、鶯をよみ、梅をよみ、月雪などの景物をよむこと、これより頻なり。思想について見れば、儒佛の影響やうやく著しく、すでに孝德天皇の時代に「山川に鴛鴦二つ浮てたぐひよく、たぐへる妹を、誰か率にけむ」といふ歌あり、これいふまでもなく詩經の關々雎鳩の句をとりたるものにして、かゝる傾向は、一代より一代より著しくなれり。同じ萬葉集の歌人中にても、人麿、赤人はこの外來の思想を受くること極めて少けれど、旅人、憶良に至りてはその影響頗る顯著なり。これらの細論は暫く措きて、次に少しく當代歌人の評價を試みん。

柿本人麿

柿本人麿の傳記はあまり詳かならず、持統、文武の二朝に仕へて官位はなはだ高からず、後に石見國に住して、その國に終れるものの如し。されどその歌は今に存するもの短歌、長歌頗る多し。而してその短歌も山川の風物、羇旅、戀愛の情

を歌ひて、まゝ雄渾雅正の調をなすといへども、人麿の人麿たる所以は、その短歌にはあらずしてその長歌にあり、辭句の端正、格調の雄大、梅櫻桃李百花並び咲きたる萬葉集中、よく一人の右に出づるものなし。その高市皇子の薨去を悲める歌の如きは、集中の最大長篇にして、また最も崇高なるものなり。人麿の特色の一はまた實に哀死の詠の多きにあり、貴人にしては日並皇子、河島皇子、明日香皇女、高市皇子の死を悲めるあり、妻を悼み、吉備津采女、讃岐の狹岑島の死人を泣く、これ等はみな長歌なるが、短歌にもまたこの例多し。香具山の屍を見て詠める歌、土形娘子を火葬する時の歌、溺死したる出雲の娘子を火葬する時の歌の如き、みなこれにして、いづれも免れがたき人世の悲運に滿腔の同情を寄せたるが、中にも、吉備津采女、狹岑島の死人を弔へるは、情緒纏綿、文辭嫋々、途上生面の人に對しても、よくその熱涙を灑げる多涙多恨の渠が面目を躍如たらしむ。否々、この多感の詩人が心奥の琴線に觸れしもの啻に人世の悲哀に止まらず、天地山川の變遷、尙かつ渠をして惆悵低徊千古の絶唱を成さしめぬ。近江の荒都を過ぎし時の歌、輕皇子が安騎野に宿りて懷古の情を謠へる歌の如き、以てその例とすべし、また吉野の宮を詠じ、雷岳の御遊を歌ひて祝賀の意を述べたるが如き、いづれか得意の題目にあらざりける。

格調の革新

然り、長歌に長じ、同情に深きは人麿が特色なり、以て古今に獨歩すべく、以て千古に歌聖たるべしといへども、渠が上下三千載を通じてたゞこれこの人あるのみとせらるゝ所以のもの、また別に理由の存するなくんばあらず。前に述ぶるが如く、わが國和歌の弊は卽興を主とするにあり、一時の感情を吐露するにありたゞそれ卽興を主として一時の感情を吐露す、動もすれば輕浮に流れ、露骨に失し、淺膚にして儀容を缺ける一種の低級文學とならんとする所以なり。わが人麿の眼孔はさすがに大なりき、この宿弊を達觀し、この弱點に想到して、やがては和歌の彫蟲の小技たらんを慨し、新に旗幟を翻して斯道の爲に整々堂々の陣を張らんと企てたり、これ或は支那文學の刺戟にもよるなるべし。かくてこの目的を達し、この蕩逸輕靡の歌壇を覆して、更に沈痛幽玄なるものを得んが爲、その第一手段として渠は森嚴莊重なる祝詞の格調を捉へ來つて長歌に投じぬ。卽ち、筆を天地開闢に起すことなり、天孫降臨に說き始むることな

り、而して滔々數千言を陳ぬ、雄偉と莊嚴とはやがて成りぬ。されど長所はやがて短所なり、そのあまりに極端に趨りたる爲に、狹岑島の素姓も知らぬ死人を悲みて、

玉藻よし讃岐の國は國がらか見れどもあかぬ、神がらかこゝた貴き、天地日月と共にたりゆかむ神の御面とつぎてくる……

と說き起せるが如き、時に題目に相應せざるまでこの法を用ふるに至れるものなきにあらず、深く惜むべし。しかれども高市皇子の殯宮の歌に、

大御身に太刀とりおばし、大御手に弓とりもたし、御軍をあともひたまひ、とのふる鼓の音は、雷の聲ときくまで、吹きなせる小角の音も、敵見たる虎かほゆると、諸人のきゝまどふまで、さゝげたる蟠の靡きは、冬ごもり春さり來れば、野毎につきてある火の風のむた靡ける如く、取り持てるゆはずのさわぎ、み雪ふる冬の林に嵐かもいまぎわたると思ふまで、聞きのかしこく、ひき放つ箭のしげけく大雪のみだれて來たれ……

といへるが如きは何等雄渾の大文字ぞや。筆法、甚だ大祓の詞に似て、格調の森嚴いふばかりなし。格調の森嚴は要するに人麿が最も苦慮したるところにして、これを成就せるは疑もなく歌壇における一大革命なり。人麿一たび出でて和歌の價値九鼎大呂よりも重く、後世萬葉の研究甚だ盛にして、歌人がこれを耽讀尊崇して措かざるもの偶然にあらず。さばれ人麿が歌の長所は所詮その格調の美なるにあり、その思想に至つては祝詞と相距ること果して幾何ぞや、純潔なり樸實なりといふの外、また多く言ふに足るものなし。

山部赤人

人麿に後るゝこと二三十年、聖武天皇の前半世を全盛時代として渠と名聲殆ど相如くものを山部赤人となす。その經歷の明かならざるも人麿に等しく、官位の卑かりしといふもまた相似たり。されどその作るところの歌はおのづから一家の特色を存す。渠や性もと山水の癖あり、屢、吟杖を曳いて天下の勝地に放浪したるが如し。近畿にては吉野宮、難波宮はいふにしも及ばず、やゝ隔りては紀州和歌浦及び播州印南野の行幸に扈從し、東、東海富士の秀容を仰ぎ、勝鹿の眞間娘子の墓を過ぎ、西の方遙かに道後の溫泉に遊ぶ、遊ぶ毎に吟懷を行りて、その歌遺れり。その他行宮を祝せるものあり、山川に對せる懷古の歌あり、生

涯の歌作、旅行に關するもの甚だ多し。

一括していふに、赤人の歌は內容外形共に人麿のと甚だ相反す。これを外形に見んか、人麿は長歌に長じたるに、赤人は短歌に秀でたり、赤人の長歌の存するもの短歌と相半すといへども、概ね極めて簡單にして、人麿が長歌の八百潮の湧くが如くに波瀾重疊せず、その反歌却りて本歌を壓倒せるが如き觀あるは、渠が長歌に屢〻見るところ。さらばその內容はいかといふに、

わたる日の陰もかくろひ、照る月の光も見えず、白雲のいゆきはゞかり、時じくぞ雪は降りける……

これ赤人が神州秀靈の芙蓉峰に對して、その驚嘆渦仰の意を詠めるものにして、わが國の敍景詩にては雄偉なるが中なる雄偉なるものと稱せらる、渠はこの種の詠にもまた體を得たり、されどかくの如きは人麿が得意の壇場にこそあれ、到底赤人の特色とも思はれず、その特色は實に人麿が雄大莊嚴を旨とせるに對して、飽くまで優美可憐の情を喜べるにあり、人麿が痛切熾烈なる感情を主としたるに反して、むしろ天地の悠揚として迫らざるが如く、その居る

敍景の詠

處の境遇に安んじ、よく自己を沒却して、自然と冥合し、山川と同化したるところにあり。わが國和歌の敍景の一面は洵に渠によりて開拓せられたりといふも不可なく、

田子の浦ゆうち出でて見れば、眞白にぞ富士の高根に雪はふりける。

和歌浦に潮みちくれば潟をなみ、蘆邊をさして鶴鳴き渡る。

など金玉の詠吟一々擧ぐるの煩に堪へず。啻に單純なる敍景のみに止まらず、景によりて情を寄せ、いはゆる情景併せ得たるものまた甚だ尠からず、感情を寫すといふも、人麿の如く直ちに素懷を行るにはあらずして、その主觀を對景の中に沒入し去るにあり。たとへば淡海公の山池をよめる歌、

古の舊き堤は年ふるみ、池のみぎはに水草生ひにけり。

など以てその一斑を知るべし。要するに赤人は人麿が詞藻の絢爛なく、格調の威嚴もこれを缺くといへども、深く山川草木の自然を愛し、これと同化し、これと合一して、平坦なる辭句の中、おのづから侵すべからざる風韻をとゞむ、赤人の大なるところはこゝにあり、人麿に讓らざる特色もまたこゝに存す。

大伴旅人

大伴旅人は元明、元正、聖武の諸朝に仕へ、征隼人持節大將軍となる。人生の無常を觀じて佛教に歸入し、また酒德を稱へて晉の清談家に擬するものあり。この時代の俊秀としてやゝ注意すべきが如きも、概して卽興の歌多く、深く論ずるに足らず。旅人が太宰帥たりし頃、山上憶良また國司として筑前にあり、互に相來往したりといへば、旅人の憶良に負ふところ蓋し尠少にあらざるべし。

山上憶良

山上憶良は赤人と時代を同じうして、嘗て遣唐少錄として入唐し、歸朝後東宮に侍讀たりし人にて、漢文學に精通し、從つて外國思想の感化を受くること、萬葉歌人中の隨一たり、この點に於て渠は全く人麿、赤人と出發點を異にす。その歌序に華麗なる漢文を用ひ、また作るところの賦が萬葉集に存するを見ても、漢文學の造詣甚だ深かりしを想見するに足る。この憶良の長所は長歌にありて、長歌中の長歌を好み、時に人麿の壘を摩せんとするものあり。思想は人麿に較ぶれば漸く複雜となり、取材また多方面にして、歌中に人倫の道を敎へ、人生の無常を說きたるもの少からざるが如きは、明かに外國文學の影響による。赤人は深く自然を愛して全く自我の感情を之に沒入し、人麿は之に反して只管熱烈の感情を歌ふと雖も、なほ境に臨みて發する一時的同情の涙に過ぎず、未だ以てその痛苦忘れんとして遂に忘るゝに處なからんとするが如きはなし。憶良に至りては然らず、その貧病の苦を歌へる歌の如き、人倫道德の腐敗を歎じ、社會組織の不完全を慨し、頻に憤懣不平の情を訴へ、之が匡正救濟の道を叫んで、痛切悽愴の氣、人に逼るものあり。從つて形式また複雜となり、或は主客問答の體を用ひたるも見ゆ。されど好漢惜むべし、理を說くに急にして情を逃ぶるに疎し。その用語また頗る粗笨にして、殆ど詞句の烹鍊を閑却し、時に俚諺を連ねて顧みざるが如きは、寧ろその放膽に驚かざるを得ず。余輩をしていはしめば、人麿は格調に長じ、憶良は思想に優る、人麿は舊來の風格を大成し、憶良は外國の新思想を輸入し來る、人麿が古風弊なきにあらざれども、憶良が新しきをのみ趁へるは更に拙なるものといふべし、もし彼の格調と此の思想とを打つて一丸とするものありしならんには、萬葉集の光彩愈〻陸離たるものありしならんと。

大伴家持

さて大伴家持は人麿、赤人のごとく操觚專門の歌人にあらずして、政治史の上

より見ても看過すべからざる人物なり。故にその歌を讀むものは渠が政治的經歷と相關聯して點檢吟味するを要す。家持の歌の萬葉集に見えて年序の明かなるもののうち、最も早きは天平八年の詠なり、同じ十八年に越中守となり、そこに病を得て死に瀕し、しかも命數いまだ盡きず、六年にして更に故郷に歸る。天平寶字三年の歌は萬葉集に見えたる渠が最後の歌なれども、政治上の活動は却つてその後にありしが如し。天平寶字六年、藤原良繼が惠美押勝を除かんとせし時、同類の嫌疑を以て危く罪に坐せられんとせしが、事なくして濟み、ついで延曆元年に氷上川繼が朝家の覆滅を謀りし時、またその謀に與れりとて、こたびはその職を解かれたるも後數月にして官位を復せられ、薨ずる時は中納言持節征東將軍たりき。されど死後に至りて、更に曩に藤原種繼が殺戮せられたるは、その主謀實に家持にありとの宣告の下に、罪科枯骨に及びて、再び官位を褫奪せられ、妻子は遠流せらるゝの慘に遇ひしが、また〳〵疑雲消散、永く青天白日の下に眠るを得たり。

家持が經歷かくの如く、政治に關與し、武事に鞅掌したるの故を以て、論者或は

その壯年時代

渠が諷咏するところを以て武士的剛健の精神を發揮するものとなし、後世の軟弱淫靡に對すべき遒勁質實の例を第一に渠に取らんとす。而していはく、和歌の漸く女らしくなりて、單に戀愛をのみ歌ふに至りしは、實に平安朝に始まると。されどこれは謬れる說といふべし、和歌が戀愛を主とし、卽吟を貴べるは、前にも述べたるが如く、太古以來の風にあらずや、何ぞ平安朝の至るを待たん。人麿、赤人の出づるありて始めてこの弊に着目し、これが革新に力めて、和歌の爲に漸く嚴正なる地步を獲得し來りしも、また前にいふところの如し。然りわが和歌の爲に虹霓の氣を吐かんとしたるものは人麿なり、赤人なり、家持は與らず、否、人麿、赤人が苦心慘澹、刻苦經營の餘に成りて、漸く九仞の功に就かんとしたりし和歌の地位をしも、一朝にして失墜瓦解せしめたるもの、實にかれ家持にあらずや。越中赴任の前、壯年時代における家持は後の業平と多く選ぶところなし。萬葉集に見よ、從妹の近緣を以てして渠が妻たりし大伴坂上ノ大嬢はいふに及ばず、平群ノ娘子、傘ノ采女、紀ノ采女等の女流歌人多く愛をかれに寄せて、互に贈答往復したり。渠が當時浮華輕薄の美男子にして、才媛貴女が愛戀を一身

に鍾めたるさま想ふべし。家持この愛情を歌うて、これを四季折々の景物に寓す、郭公、花橘は中にも多し。これらの花鳥を詠めるもの何ぞ家持一人に限らん、むしろ當時一般の風習ともいふべきも、またかれにおいてその最も著しきは事實なり。夢も旅人その他二三歌人の詠に入らざるにあらねど、家持また特にこれを喜ぶ。

中年以後

およそ此の如きは家持が壯年時代の風にして、人麿、赤人が事業を破壞したること尠少にあらず、されど越中守となると共に、その性行は俄然一變したり。青春の血漸く冷えて、狂蝶は秋の近づけるを知れるなり、過ぎにし榮華を思へば夢か現か、殊に山河隔絶の他郷に病臥しては、病苦と望郷の念とにうたゝ傷心斷腸の悲なきを得んや。されど徒らに衣袵を濕して默して止まんは、渠の堪ふる所にあらず、こゝにおいてか古歌の渉獵は始まれり、而しておのれもまた吟詠を恣にして、鬱悶を遣りぬ。古歌の研究益盛にして、和歌の價値を信ずること漸く深きに伴ひては、長歌をも究め、敍景をも試み、その志專ら先哲に繼がんとせり。この頃の渠が歌の古人先輩に負ふところ多きは歴々指摘すべく、その弟の長逝を哀傷し、壻藤原二郎が母を失ひしを弔へるが如きは、人麿が好題目にして、二上山、布勢水海、立山を詠じたるが如きは、赤人の得意とするところ、而して史生尾張少咋を諭したる歌、病に臥して無常を悲み、道を修せんと欲して作れる歌の如きは憶良が長所、雪梅を詠じ、鹿と萩とを詠じ、酒を僧に進むるが如きは父旅人に享けたるならじか。なほ一歩を進めて辭句の出所を穿鑿せんか、記紀に得來れるもあり、祝詞、宣命に擬せるもあり。かくてあらゆる長所を吸引して自家藥籠中のものとなし、情懷を吐露するや一氣呵成、間々咳唾珠をなすの壯觀を呈す。しかも概するに一家の風格未だ大成せず、古人の糟粕隨處に横はるの觀あるを憾ましむ。これ進程の第二期なり。

晩年の大成

斯くて家持が歌は更に三轉の期に達す。三轉の期はやがて渠が任滿ちて京に歸り、政治界の中樞に進み出でたる時にして、官位漸く高うして社會に對する自己の何者たるかを意識すると同時に、歌人としての天稟もまた十分の發達を見たるなり。宗廟を敬ひ祖先を尊ぶはわが國古來の美風、大伴氏はその先道臣命に出でて、金村が大連となりたるを初め、大化の改新に大臣たりしもののあ

り、壬申の亂を戡定したるものあり、世々功臣を出して、樞要の地位を占め來りしが、藤原氏勢を得るに至りて漸く勢を失ひ、子孫慷慨の士を出すもの多し。家持生れて多涙多血、如何ぞ痛憤悲切の情なくして可ならんや、曩にはこれを戀愛に傾倒したる花々公子、今は却つて忠君憂國の化身となる。陸奥に黄金を產せるを賀し奉れる歌、憶良の詠に和して勇士の名を擧げんことを思ふ歌、防人が哀別の情を陳ぶる歌、一族を論す歌等はこの期に成れるものにして、これらの作を讀めば、明かにかれが意の奈邊に存したりしかを窺ふに足る。かの最もよく人口に膾炙せる、

海ゆかば水づく屍、山行かば草むす屍、大君のへにこそ死なめ、顧みはせじ。

の如き、また

すめろぎの天のひつぎとつぎてくる君の御代〳〵、かくさはぬあかき心をすめらべにきはめつくして、つかへくる親のつかさとことだてゝ授けたまへる生の子のいやつぎ〳〵に、見る人のかたりつぎでて、聞く人の鏡にせむを、あたらしき清きその名ぞ、おほろかに心思ひて、むな子ども、親の名たつな、

その他の和歌

大伴の氏と名におへる丈夫のとも。

といへるが如き、よく國民固有の性情を歌ひて、國體のよりて立つところを明かにし、武士道のよりて成るところを示すものといふべし。その詞藻はむしろ生硬粗雜なるに、殆ど人麿、赤人と幷び論せられ、萬葉の上、和歌の上に、重要の地位を占むる所以のもの、一にこの國民的感懷を歌うて眞情流露せるが爲に外ならず。家持が歌の傳はるもの、天平寶字三年のものを以てその最後とすること、前にすでに一言せり、それより薨去に至るまでなほ二十七年の年月ありこの間全く吟詠を絶ちしか、吟詠はありしもその歌散佚せしか、詳かならず、この二十七年間はかれが最も政治界に活動したる時代にして、三たび罪を得たる時なるを思ふべし。要するにかれは操觚者にしてしかも操觚者を以て安んせず、その最後に歌へる理想を現實に見んとして屢、事を謀り、藤原氏の勢力に反抗して、却つて破滅を招けるものにあらざるなきか。

萬葉集にはなほ卷九に傳說を咏んでやゝ敍事詩の體に近づかんとする水江浦島子をよめる歌あり、卷十六に滑稽の趣致多き歌あり、卷十四の東歌、卷十六

の防人の歌などは、いづれも地方の民が國々の方言によりて歌ひ出でたるものにして、當時下流の人々までも歌をよくし、吟詠にいそしめるを證して餘あり。これ等のもの一々研究に値すといへども、今煩を厭ひてすべてこれを略すべし。

平安朝

第一章　この時代の概觀

所謂平安朝

紀元千四百五十四年の平安奠都以來、頼朝が總追捕使となれる千八百四十六年までを指してわが平安朝とす。大數を以て算すれば、千四百五十年乃至千八百五十年、星霜四百年の間なり。

時代の特色

平安朝は泰平無事の時代なり、初頭に坂上田村麿の東北征討あり、終末に源平の戰あり、その間にまた將門、純友の亂、刀伊の寇ありて、時に兵器を動かすことなきにあらざりしかども、概していふに四海波穩かに、時つ風枝をならさぬ時代にして、わけて都人が安逸に馴れ、遊惰に耽りて、太平を謳歌したる時代なり。こゝに概觀として述ぶるも、またこの靜平なる中間時代にして、そが最もよく平安朝の特色を帶べるは、いま更に言ふを須ひず。

抑〻一國の圓滿なる文化の發達はいかにして期すべきか。曰く、文武は輔車の關

係を以て進むべし、都鄙は唇齒の交渉なかるべからず、一部少數者の手に成る發明創作、固より必要なれど、多數人民の知識と趣味と並に開發指導せらるゝを要す、物質的文明と精神的文明と、理性と感情と、また〳〵互に提携雁行すべし。およそこれらのものの合體整正する時、一國の文化はじめて煥然として見るべきものあるなり。今わが平安朝の社會を觀るに、全くしからず、文武は非常の懸隔を生じ、都鄙は全然沒交渉なり、少數者の創作は頻にあれども、一般世俗はこれに對してむしろ風馬牛の觀を呈す。もとより物質的文明は必ずしも精神的文明と歩調を齊しうせず、理性は殆ど無視せられて、感情ひとり重んぜらる。かくの如き偏重の結果は知り易きのみ、美なる方面をのみ以て論ずれば光彩燦爛たれども、その半面に至りては醜陋眼を蔽はしむるものあり。たとへば朔風凛として梢頭蕾なほ堅きに、南面の一枝ひとり春に誇れるが如きは、實にわが平安朝文化の傾向にあらずや。

外國文化の輸入

かゝる偏奇なる人文發達の珍現象はいかにして作られたるかといふに、上古に於てわが國の文化未だ開けざりし時、一たび隆々たる隋唐三韓の文物に接するや、その開明に驚歎し、驚歎はやがて渴仰と化し、事々物々一意これを移植摸倣してたゞ及ばざらんことを恐るゝの有樣にて、その結果は大化の革新を促し、また奈良期の盛時を現出して、以て平安朝に及べるなり。されど外風輸入の必要を叫びたるものは、國民の輿論にあらずして、實は僅かに朝廷を圍繞せる少數人士の希望なりしなり。その影響の專らこれら宮廷貴族者の間、廣うしても輦轂の下に居住する都人士の間に限られて、一般國民はこれについて殆ど何等關知するところなく、また何等歡迎すべき所以をも悟らず、從つてこの新來の外國文明によりて何等の著しき恩澤をも被らずして、一般社會は依然として舊態を持續し行けるは、まさに當然の數といはざるべからず。かくの如くにして一國文化の普及を望まんは、そも〳〵木に緣つて魚を求むるの類にあらざるなきか。

文事の偏重

さらばこの朝廷に立ちて新來の文化に浴せる少數の貴族者とはたれぞや、いふまでもなく、當時政治界の樞機を握つて、威風堂々天下を睥睨したる藤原氏の一家一門なり。この時代の初期にありては、なほ藤氏以外の權門勢家にして、

ひとしなみに重要の地位を占むるものなきにあらざりしが、鎌足に起りて、奈良朝を通じて潛勢力を養ひ來れるこの一族が、一たび皇室と姻戚の緣を結ぶに至りて、その威望さながら旭日の昇るが如く、群星一時に影を潛めたり。源平二氏の如き近く皇族に出でたるものさへ、帝都にありてこれと角逐しがたく、地方に下つて徐ろに實力を養ひ、他日榮達の期を窺ふのみ。そも〳〵藤原氏は中臣に出でて、世々文事を掌り、佛敎を尊信し、兵馬には關渉せざるを以てその家風とす。由來、職業の世襲はわが國の習慣、この時代に至りても藤原氏は相傳へて文臣の家なり、敢て平安朝の前後とのみいはず、文よりも武を先にして、武事偏重の傾向あるは、日本文化史の一特色なるに、ひとりこの藤原時代のみ文事偏重の異例を見る、また怪むに足らざるなり。文事偏重も一概に難ずべきにあらず平安の世には、武を外にして、文によりてもなほよく國政を料理し、紀綱をも張るべし。たゞその弊や招き易くして、善用の途を得るに難し、一世の指導者たる藤原氏が武を賤みて、兵器を執るを以て上流貴族のことにあらずとせし世は、漸く文弱に流れ、遊惰に耽り出でぬ。當時、中央政府の機關唐朝の制に倣ひて、八省百官を置くといへども、尨大なるかの國の制度を採つて、直ちにわが國に行はんとす、人徒らに多くして施すに處なし、閑散に馴れて、愈政務に熱中せず、唯遊惰逸樂を事とし、初は暇を偸んでこれに充てたるもの、漸く募りては實務の時間をも割愛して顧みざるに至る。唐朝の文化はまた詩文萬能の文化なり、人材の登用もたゞこの一藝に決す、これに學び來れる藤原氏の一門が、文藝に他事を忘れて、昨日も今日も佛事供養にあらずんば、すなはち詩歌管絃の遊樂に睦み暮せるは、怪むに足らざるなり。

物質的文明の缺如

平安朝の文化は中流以下におよばず、平安京の外に出でずして、全く藤家一門の貴族が專有するところたり。奈良朝にありては地方交通の便を開き、文化を四方に普及するの企畫もありしかど、この時代に至りて驛路來往の途また壅塞せられ、都鄙甚しく懸隔したり。文化は文藝重視を主義として、物質的方面においては何等の進歩なく、學校ありといへども、そはたゞ貴族の子弟が仕官の途を得んが爲の階梯として設けられ、庶民開發の機關にはあらず。まして出版の事業のあるべきやうもなく、本草學、醫道も加持祈禱に勢を奪はれ、算道はた

吉凶を占ふ陰陽道に附屬せしめらる。この時にありて誰か殖産工業の發達を計り、一國の文化を進めて、國利民福を增進せんとするものぞ。國家的觀念の缺乏この時に極まりて、地方一般の民衆は如何にもあれ、おのれら少數者間に文藝を享樂して閑日月を送迎し得ば足れりとし、物質的事業の奬勵などに聊かも想ひ到らざりしは、滔々たる當年政治家の常態なりしなり。

貴族社會の眞相

かゝる褊狹不完全なる文化の中心たるこれら貴族を、政治上より、社會上より、はた宗教上より概見せんか。まづ政治上より見るに、これらの貴族が國家を無視し、國民の進歩を顧みざりしは上述の如く、各〻地方に莊園を有して、これが收入によりて活計を營み、貧なるは地方にある富裕豪勢なる受領と姻戚の緣を結んで、實力を養ひ、朝廷にありては、互に權力を爭ひて黨同伐異す。而して初は舊家の紀、大伴、もしくは新興の源平二氏等と相反目せりしが、後にこれらの諸族相尋いで樞要の地を棄つるに至りては、藤氏同族間の爭奪となり、叔姪相敵視し、兄弟墻に鬩ぐの活劇を演じて恬として耻ぢず。大臣、攝政、關白は人臣榮達の極なり、これを得るは一途、皇室の外戚となることすなはちこれ。されば藤氏中の權勢あるものにして、娘をもてるは、われも〳〵とこれを女御更衣に進めて、後宮に納る。女もし幸にして君寵を得ることあり、君寵を得てかつ皇子を生むことあり、皇子はた幸にして儲位に立ちたまはんか、その立ちたまはん日こそやがて父が大願成就の日なるべけれ。平安廷臣が權力獲得の手段といふも畢竟これに盡き、その行動極めて隱險にして、また殆ど顧ふべからざる僥倖を希ふなり。女子ありやなしやの一事既に期しがたきに、さて後宮に入りても、寵愛を壟斷せんが爲には、容貌の美醜なども關すべく、またおぼつかなき產兒の運命はその男女によりて決せらる。これらのこといづれも天なり命なり、得て人力の如何とも爲すべからざるところ。こゝにおいてか三世因果の宿命說はかれらが信ぜざるを得ざる天理となり、加持よ祈禱よと財を拋ち根を盡して神佛の加護を乞ふに餘念もなく、益〻優柔に陷り惰弱に流れつゝ、また爲す事もなく日を送るさま、憐むに堪へたるが如しといへども、またしかしながら必然の勢なるべし。

才女の輩出

この政治的狀態と關聯して特記すべきは、才媛淑女の彬々として輩出せるこ

となり。女子の和歌に秀でて男子をして後へに瞠若たらしむるものありしは、太古以來屢見るところにして、萬葉集中にも、この種の巾幗者流の作品また決して鮮しとせず、されど平安朝に至りては文學殆ど女流の獨占に歸し、男子はむしろあるかなきかにけおされぬ。この東西また見るべからざる奇現象は原づくところ一にして足らざるべしといへども、女御更衣が各〻その威勢を張りて權力を爭へるも、またその一大主因たらずんばあらず。卽ち才學ある女子は擧つてかれらの招に應じて後宮に集れるなり、集りては互に才を競ひ、男子もまたこれと唱和贈答せんことを求むれば、後宮はやがて文學の淵叢、女房はすなはち文壇の粹にして、かくて彩華爛漫たる平安女流文學は生れ來れり。

遊樂の風

次に貴族社會の日常生活はいかに。われらは公卿が惰弱に流れしを以て、宿命說與りて力あるよしを說きしが、その日常生活の不活潑なる眞に人をして顰蹙せしむ。武事に關するは公卿の恥辱、これかれらが抱懷にして、士氣一代を通じて地を拂ひ、政治はた疎んぜらる。年中の行事は神佛の祭祀法要にあらずば、春花秋月の遊興のみ。而してこの興を助くるに詩歌と管絃とあり、詩歌管絃は當時公卿が必修の技藝にして、就中歌は詩よりも盛なり、そは詩形の簡單なるにもよるべけれども、また當時の遊宴、男女席を共にする場合多く、漢詩の男子に限られたるに反し、和歌は男女に共通なりしに因らずんばあらず。管絃は歌とならび、或はそれ以上にも盛に學ばれたるものにして、當時の殿上人は琴笛の合奏を能くするとともに、またよくみづから舞ふ。かくて貴族生活の舞臺は盆大の京都の小天地、たま〳〵旅行するも、石山、住吉さらずば長谷、大峯、後にはりてはやゝ遠く熊野へ參詣するもありしかど、多くは地方に赴くを卑みて、足畿內の地を出でず、生活單調にして變化あるなし。かく生活の單調不活潑を極め、局面の變化を缺けるは實に平安朝の一大特色にして、和歌の千篇一律なる、物語の同一類型に墮せる、いづれかこれが反映にあらざる。卽ち閑散は文藝に沒頭するの機會を與へ、文學史上の偉觀を成さしめし所以なりといへども、抑又時代精神の鬱結不活動を來たすの原因となり、隆々たる文藝をして、十分の變通をなし得ざらしめしは深く惜むべしとなす。

佛敎の盛運

次に儒佛二敎の消長に就ていはんか。儒敎の勢力のさのみに大なるものなく

密教の修法

して、佛教ひとりますゝ盛なりしは、當時非常の流行を見たる漢文學に就て見るも明かなり。卽ち佛教は前代既に沖天の勢ありしに、この時代に更に天台、眞言二宗の入るありて、思想界はたゞ佛教の獨擅場となれりき。俗界の政治を聽きつゝも出家得道して、院政の變態を開きたまへる白河法皇を出し、神祇釋教戀無常とならべて和歌に稱せられたるをも怪まず、本地垂迹說は夙にわが神祇を取つて自家藥籠中のものとなしたれば、神社の建築は漸く佛閣の風を摸するに至り、名流貴族の住宅莊園の寺領に喜捨せらるゝものも多し。佛教の流行また盛なるかな。然れども此の如きは單に形式の上のみ、外部の莊嚴は常に內面の實質を意味するものにあらず、この時代の佛教は外徒らに華麗にして、內實は甚だ荒寥なり、說くもの必ずしも人心祕奧の琴線に觸るゝことなく、聽くものはた安心立命の大事を思はず、かくて佛教自體よりいふも、人心に對する影響よりいふも、漸次佛教の眞意義を遠ざかりて益〻邪路に蹈み入れるに似たり。

當時最も勢を得たるはいふまでもなく新に起れる天台、眞言の二教なり。天台

佛教の墮落

はいはゆる顯教なるもの、教理を明むるを主とし、經文佛典の考究研鑽によりて佛道の極に達せんとし、眞言はいはゆる密教なるもの、これら煩瑣なる手段をすてゝ、單刀直入、頓悟の妙境に入らんとす。卽心成佛はひとしく禪宗の唱ふるところにして、この一點密教と甚だ相似たりといへども、眞言は更に形式の上よりも彼岸に到達せんとす、すなはち意密を重んずるとともに身體の儀容を正しくし、手に印を結び、口に眞言陀羅尼を唱へて、身口の二密を整へ、以て三密相應じて、始めて佛我一體の境地に到らんとするなり。從つて佛像の儀軌を正し、ことゞ〻しく曼荼羅を別つなど、すべて形式を主とすれば、祈禱の目的に伴ひて加持修法も一々その樣を異にせざるを得ず。前にも言及せるが如く、この時代にありては佛に歸するは未來の安樂淨土を願ふに止まらずして、現世の利益をも求むるなり。小にしては安產、平癒、息災延命の祈願より、大にしては國家安穩天下泰平のために禱る。心靈の疾患を救ふべき僧侶はこゝに至りて肉體の病痾を醫し、兵亂鎭定の功も甲冑の士より却つて緇衣の徒に歸せらる。かく現世の利益を主とし、形式儀容を貴べるを見て、直ちに佛教の墮落とのみ

もいふべからず。蓋しかくの如きは一は眞言本來の性質による。元來、眞言は日本に起りたるものにあらずして、早く印度にあるの日、他の外道と混和したるがために、その所謂佛菩薩といひ、儀式法會といふも、佛敎以外の要素を含むこと多く、天台また日本に渡りて後は、純粹なる天台にあらずして、種々の異要素を結合し、殊に形式を眞言に借り來りて、盛に修法灌頂を行ふ、迷信深き人心の歸向を促さんが爲に、密部の行ふところを容れたるは、洵に巧慧の手段といふべし。されど現世の利福を主としたる佛敎は年を經るに從ひてやがてまたそれ自身の腐敗を來しぬ。されとへば天台にありては、山門、寺門常に軋轢して勢力を爭ひ、識德一世に空しき名僧智識を推し來れる天台座主の重位に名門貴族の出を戴いて俗界の權を張らんとす。甚しきに至りては僧兵を養うて干戈を動かし、亂暴狼藉至らざるなく、俊邁なる白河法皇をしてなほかつ朕が意の如くならぬもの、加茂川の水、雙六の骰、山法師と仰せあらしむるに至る。兵備を置けるは叡山のみに限らず、奈良の興福寺、東大寺、その外諸國の大寺また然り。一たび辯難攻擊の募りて劍戟相見ゆるに至るや、山法師は日吉の神輿を擔ぎ出し、奈良法師は春日の神木を振り翳して、はては政權の爭奪にまでも容喙し、ま

衣食住の情態

を騷がすこと、鎌倉、室町時代に至りて絶えず、あさましかりし次第なり。かゝれば徐ろに修養を積んでその德を磨き、一切衆生の濟度を云爲するが如きは迂愚の行とし、僧綱を得るに急に、金襴の袈裟に纏はれて驕奢を競ふもの、滔々としてみなかくの如し。しかすがに中には人里とほき山林の庵室に籠りて瞑想に耽り、或は世の爲體を諷して超然たるものなきにあらざりしかど、そは寥々として晨星も雷ならず、大勢は墮落に墮落を重ねて、俗より出でて俗よりも俗に、平安朝の末期より鎌倉時代にかけて、新宗敎の勃興を見るに至りしまで、混濁の敎界はまた救ふに途なかりき。これを要するに平安佛敎の隆盛は皮相の隆盛なり、宗敎の第一義たる信仰に就いては多く說くところなく、僅かに宿命因果說を傳播し、無常迅速の厭世觀を鼓吹し得たりといへども、それも未だ以てわが國民の根本思想を動かすに足らず、快濶なる日本固有の樂天主義は依然として頽脫せり。

平安朝の文化はめざましきものなり、しかれども科學思想に至りては全くこ

れを闕く。日常生活も實用の方面はいつまでも進歩せず、食物の調理、滋養の如何を度外視してたゞ外觀の美にのみ注意し、建築の裝飾、丹青をこらして綺麗人目を奪ふといへども、内部は陰鬱暗澹、これに住むものをして益〻因循不活潑に傾かしめ、服飾はた實用を蔑ろにして、體裁、文樣、色彩の配合にのみ心をくだく。婦人がいはゆる十二一重の襲着に起居も自由ならぬに得々たりしなど、女性のだしなみはさることながら、めざましくもまた憐むべからずや。一言にしていへば當時の貴族は實用の本を閑却して、形式の末に趨れるなり。たゞ美なるべし、その他はかれらの問ふところにあらず。かの詩歌管絃の遊宴はいふも更なり、神祭佛事を行ふにも多く夜陰を選んで白晝においてせざりしが如き、他に理由あるべしといへども、また一はこの美の標準より來れること疑ふべくもあらず、月光燈影のかすかなる世界はこゝぞ却つて平安貴族が活動の時なりしなり。

情趣尊重の時代

説き來つて平安朝の如何なる時代なるかを髣髴せしめば即ち足る。さらば當時の道德律たりしものは何ぞや。或は曰く、放縱淫逸なるかれらはたゞ意馬心猿の狂ふに任せて行動せるのみ、何ぞ社會の指針たる道德律なるものあらんやと。げにこの時代にありては、後世、世道の準繩となりし武士道あることなく、儒教の勢力はなほ極めて微々たり、宗教漸く高潮を示すといへども、未だ根本的に人心を陶冶するに遠し。されば倫理宗教に束縛せられずして、一面文弱に流れたる結果は、克己制慾の意志を缺き、世人はたゞ感情の趣くがまに〳〵東行西歩せるに似たり。しかはあれど偏したりといへども光輝ある文化を有する平安朝、感情を主として本能の滿足に趨れりといふものの、その中また一片の主義自信なくして可ならんやゞ。すなはちかれらが志す所は感情の中庸を得るにありき、人性本然の要求を適度に達するにありき、換言すればかれらは善に到らむことを期せずといへども美を知れり。しかり、美は平安朝の貴族が生命なり信條なり。かれらの生活はこれが爲に情趣に富み、その文學は著大なる發達を遂げたり。而して、個性の描寫に巧を盡せるその作品に至つては、わが國文學を通じてまた他に見るべからざる特色を存するもの。以上は文學偏重の平安期において特に留心看取すべき諸點とす。

時代の區劃

平安朝四百年を區劃して、一、弘仁時代(一四五〇―一五五〇)二、延喜天曆時代(一五五〇―一六五〇)三、藤氏極盛時代(一六五〇―一七五〇)四、院政時代(一七五〇―一八五〇)の四期とす。(括弧内の年數は多少の出入あることは勿論なり、今、讀者の記憶に便せんが爲、強ひて圓數を取る。)たゞし余輩の見によれば、鎌倉幕府の創立を以て平安時代の終極となすは一般國史の區劃なりといへども、他方面よりはともあれ、文藝の歷史よりいはゞ未だ具はれるものといふを得じ。そは平安末期より鎌倉時代の初承久の亂に至る文學の形勢は、全然同一傾向を以て進みたればなり。故にこの期間を以ておなじ院政時代に總括し、前の王朝の末期に附するか、後の武家時代の初頭に置くを以て、寧ろ正當なる方法となせど、かくては却つて讀者が混亂を來さんを恐れて、今故らに變更せず。

漢文學

第二章　弘仁時代

佛教も漢學も前代にありて既に隆盛に赴きしが、平安朝に入りてその勢力更に大なり。今や唐朝文化の惝恍は靡然として一時代の風をなし、遣唐使のことある毎に留學生これに伴ひ、ひたすらかの國の新文明を移植して及ばざらんことを恐るれば、制度といはず、文物といはず、いづれかその風を傳へたるものにあらざりける。かくて佛教は最澄、空海が新たに傳へたる天台、眞言法燈ひとり幟にして、從來の六宗は殘穗明滅の境にあり。而して學問としいへば、やがて支那の書を讀むことと誰も心得ぬ。古來の格式律令の研究未だ全く衰へたりとはいはず、古事記、書紀の塵を拂ふもの終にまた見られずなりぬとはいはず、しかも記紀を繙かんよりは史記を讀め、萬葉を誦せんよりは文選を講ずるに如かずとなせるは逆ふべからざる時代の傾向なり。蓋しわが國の文學はその收穫當時いまだ豐饒ならず、一朝かの國の充實具足せる穀倉に接して、驚嘆の眼を睜ると共に讃美の聲を放ちて惜まざりしもの、怪むに足らざるなり。元來、大實の制、學者登庸の道を定めて六とす、明經、明法、進士、秀才、書、算これなり。されど平安朝に入りて秀才、進士、書の三のうち、書道はいつしか廢れ、秀才、進士は一に合してその名も改まりて、結局、紀傳、明經、明法、算の四道となる。紀傳道はその

名の示す如く專ら歴史を修むるもの、史記、漢書、後漢書の三史を必修書とし、また文章に達するの要ありて、傍ら文選を學びしが、後には從位にありし文章却つて主位に立ち、紀傳博士の名稱起りて二十餘年、早くも文章博士の名これに代り、論議講說の優劣はいかにもあれ、苟くも囑文に長ずる者は、すなはち對策して任用の榮にあづかる。明經以下三者の博士、こゝにおいてかその下風に立ち、僅かに六位、七位の卑官に止まるに、文章博士のみは遙かに擢んでて數等の高位高官に拜せらる。菅原道眞、藤原有衡等が大臣に上れるが如きは、わけても著しき例とす。學問のうち漢學最も貴ばれ、殊に詩文の重視せられしこと察するに餘あり。凡そかくの如きもの、唐風の感化にあらずして何ぞや。

唐朝の文學

つら〳〵かの國の事を考ふるに、唐の太宗天下を一統して、鋭意力を經術に注ぎ、大に儒學の興隆を期せり。されど太平の波はいつしかに剛健の人心を銷磨し、世を經て逸樂の風漸く上下を靡け、詩を賦し文を綴りて、紀綱の弛むを知らず、修文館の學士を擧ぐるにも、一に詩文に堪能なるものを選ぶに至りて、文學は實に萬能の力となり、玄宗數代の後これにつぎて初の程こそ政治にいそしみたれ、幾ばくもなくまたこれを拋ち、朝にあるもなほ酒盃を含みて詩賦を吟ず。宴飲遊興至らざるなく、胸中風流韻事ありてまた他あることなし、かくて國運の振肅は期すべからざりしも、詩においては絶世の名家杜甫、李白等時を同じうして生れ、各〻特色を有して、唐詩の盛名天地と共に朽ちざるものあり。斯る唐風に心醉せる平安朝の貴紳、いかんぞ經術律令を棄てゝ、詩文に傾倒せざるを得んや。試みにかれらが耽讀せる書目を擧げんか。まづ九經あり、禮記、左傳、詩經、周禮、儀禮、周易、尚書の七書に公羊及び穀梁の二傳を加ふ。孝經、論語は苟くも學者たるものの學ばざるべからざるところにして、老子も喜ばるれば莊子もまた讀まる、たゞ孟子のみはわが國情と相容れざるものありて、著しき流行は見ざりきと傳へらるゝが、果して然りや。群書治要、顏子家訓またさすがに治國齊家の資料として机上にありきといへども、およそこれらを壓して最も渇望熱愛せられたるは、いふまでもなく詩集と文集となり、就中前にいへる文選を以て最とす。文選三十卷、洵にこれ六朝文學の粹にして、當時斯道の經典たりき。猥雜なる小冊子にはあれど、遊仙窟また盛に弄ばれ、白氏文集遙かに後れて嵯

峨帝の時に傳はり、文選を凌ぐの勢あり。

漢詩文の感化

平安朝の貴族が政治に荒みて遊樂を事とせるは、その原因多々あるべしといへども、一はこれ等詩文の影響なり。漢一代の豪奢を集めし武帝が長安の柏梁臺、兎園に梁の文士を招ける孝王が風流は、寤寐思慕して忘れず、長恨歌、琵琶行の如き、はた如何にかれらが多涙多恨の情を動かしたりけん。五節句もおほかた支那文學を讀みての後にかれに擬して興せるもの、白樂天の故事によりては尙齒會をも起す。その他この時代の風俗にして彼國詩文の感化によりて生れたるもの、一々擧げずもありぬべし。四季折々の景物につけての感想、草木花鳥に對する好惡の情など、またこれに左右せられたるもの多し。秋の千草をあはれと見、雁の聲、砧の音を悲しと聞くも、わが國民が本來の性情にはあらざるなり。

かゝる滔々たる時潮を導けるものは誰かといふに、敎界の偉人空海その人なり。空海の才や多方面、宗壇の功績は今更めてもいはず、繪畫、彫刻、書道行くとして可ならざるはなく、いづれを以てするも優に一家を成すに足るべし。その文

僧空海

學上の功績に至りては、啻に隋唐文學の精華を請來したるに止まらず。みづから筆を執りて詩文を作り、縱橫の筆端よく富贍の思想を助けて言々句々靈あるにあらざるかを疑はしむ。ずなはち壯年の作に三敎指歸あり、また詩文の評論を文鏡秘府論といひ、詩文を集めたるものを性靈集といふ。前章に述べたる如く、わが國文化史の第一頁は之を佛敎の傳來に置くべく、これが第一の恩人は聖德太子なるが、第二には空海を推すべし。

嵯峨天皇、篁及び道眞

空海と竝びて漢文學の奬勵に力を竭したまへるを嵯峨天皇とす。天皇ふかく文學に志し、歷朝のうち最も詩賦に堪能なり、その勅撰に成れる凌雲、文華秀靈の二集は、當代諸大家の作を網羅したるものなるが、就中、最も多く聖作を採れるもの、決して故なきにあらず。經國集も恐らくこの帝の勅撰か。小野篁この時に出でて騷壇の鬼才と稱せられ、詩情ほゞ白樂天の境に詣り、その句かれの作に暗合するもの三ありといふ。これより三四十年を過ぎて菅原道眞は出づ。三代の儒家として位右大臣に至り、不幸にして讒にあひて謫處に悶死すといへども、その誠意誠心を披瀝せる詩文は、永く國民の肺腑を衝き、同情敬慕のあつ

まるところ、遂に後世文學の神と崇めらるゝに至る。道眞たるものまた以て瞑するに足る。

漢詩と和歌

道眞が詩の特色は著しく日本趣味を發揮したるにあり、烱眼なる渠は外來のまゝなる作風の摸倣のみを以てしては、到底わが國民固有の思想を盛りがたきに想到し、先輩のなせるところを無視して、已が信念に從つて、盛に和臭の注入を試みたり。併しながら外國語の操縦は難中の至難事にして、組織的研究の進める今日にありても、尙且その神髓を得るに難きもの、かゝる言語をいかに漢譯すべきか、この思想をいかに支那風に表現すべきか、これらの苦心すでに容易ならざるに、更にわが國人には何等の趣味もなき平仄押韻によりて掣肘せられざるべからず、堪ふべからざる負擔にして、かくて經營慘澹、始めて成れるものが、いはゆる虎を描いて狗に類するもの比々皆然らざるなきは、そもそもまた免れがたき結果のみ。文學の價値は人間自然の感情をあるがまゝに歌へるところに存す、而してこはたゞ自家固有の國語によりてのみ表はすを得、いな、おのづから表はる。かの江戸時代に歸化せる明の朱舜水が、日常日本語を慣用して誤らざりしにも拘はらず、その臨終における最後の數語は實にその母國の土音なりしといふも、よくこの邊の消息を傳ふるものにあらずや。思ふに詩想といひ詩形といひ、共に生むべし、作るべきにはあらず。此に於てか當時漢詩の流行盛にして、苟くも學藝に指を染むるほどのものは、その習作に熱中せざるなきに似たりきといへども、眞に文學の本事を解するものは、學者としての立脚地、世間に對する名聞上よりこそ之を弄びたれ、敢てこれに執着することなくして、熱烈の感情を洩すには、また國語國詩を用ひたるなり。道眞が、

東風ふかば匂おこせよ、梅の花、主なしとて春を忘るな。

の詠、また筐が、

思ひきや、鄙のわかれにおとろへて、あまの繩たぎいさりせむとは。

の吟などを思ふべし。

反動の氣運

これを要するに弘仁時代は漢學崇拜の時代にして、日本文學の精髓たるべき和歌がこれに壓倒せられたるは、明かなる事實なりといへども、外國文學は竟に外國文學なり、その異邦に完全なる發達を遂げ難きは寧ろ自明のことなる

のみ、況んやわが國古來純粹の文學として和歌の儼然として存するをや。物盛なれば必ず衰ふ、反動の旗幟は漸く動けり、國民は漢詩の不自由と束縛とに堪へずしてまた顧みて和歌を思ふに至りぬ。この頃支那はさしもに華やかなりし唐朝の榮華も夢と過ぎて、干戈しきりに動き、氣息奄々として餘喘を保つのみ、萬機衰へて文學ひとり盛なるの理なし、道眞すなはち自ら遣唐使の榮を荷へる身を以て建白してこれを止む。かくて漢詩はこゝに直接なる大打擊に會ひ、和歌はこれに反して漸くその頭を擡げ、弘仁時代の漢文學は延喜時代に入りて、全くその勢を和歌に奪はる。この和歌勃興の急先鋒たりしものはすなはち在原業平なり。

在原業平

業平は平城天皇の皇子阿保親王の第五子、母は桓武天皇の皇女にして、兄行平と共に在原の姓を賜はる。時に藤氏一門の勢威盛にして、自餘の門族みなその後塵を拜す。業平兄弟また一生轗軻不遇にして、顯達せず、わけても業平は、妻女の姻戚なる惟喬親王が文德天皇の長皇子に在しながら儲位にもえ立ちたまはず、洛北小野の山莊に佗しくも暮しいますを見るにつけても、一門零落の悲、

ひし〳〵と身にこたへて、不平鬱屈の情遣るに所なかりしものの如し。此に於てか業平も行平もつとめて和歌に萬事を忘れんとせり、殊に業平は天成の大歌人、その特色は天眞の流露せるにありて、一々の作は感ずるまゝに歌となれるもの、苦心も費さず、彫琢も要なし、風の水上を行きて自らに文をなすといふもの、正に斯人の謂なるべし。業平、嘗て鴻臚館に渤海の客を勞問したりきといへば、必ずやまた漢文學に通じたるべきに、しかも和歌にのみ沒頭して、故らに時流を追うて平仄の研究に浮身を窶す事をなさゞりしもの、蓋しその性情の好むところに任せたるものにして、もとより怪むに足らざるなり。されど長所はやがてまた短所、その人情を傾けたる思想の痛切を極めたるにも似ず、とかくに措辭結構の粗鹵を免れずして、心餘りて詞足らずと評せらるゝに至る。さばれ業平は到底この時代の大なる代表的作家なり、萬葉時代の歌風は渠に至りて全く一變せる趣あり。渠が逸事の後世永く佳人才子の談に入る所以のもの、豈に啻にその風流公子たりしのみによらんや。

逼昭、小町等

當時その歌を以て業平に對すべきもの僧正逼昭あり、逼昭は道德堅固の智識

にして、渠が石上寺に小町に對して痛快の諧謔を弄したるは、有名の話柄なり。僧侶なればその歌に經文を釋し、無常厭世の感を述べたるも多く、同時代の歌人と比べて大に異色を存す。その構想の飽くまで思索的にして、修辭の徹頭徹尾技巧的なるは正に業平と反對の極端にあるものといふべし。また小野小町あり、業平の亞流にして、だゞ感情のまゝによみいだす。その歌の業平に比して、更に濃艶佳麗なるもの多かりしは、さすがに女性の作なればなるべし。わが國女性美の權化として謳はるゝもの一人にして足らず、しかも小町が常にその筆頭に擬せられて、男の業平と對せしめらるゝもの、その性行と歌詞とに考へて、そゞろに首肯せらるゝものなきにあらずといへども、また實に二者が牽先して和歌に清新の風を鼓吹せしが爲なるべし。なほやゝ京を離れて近江の湖畔に住み、萬葉の古調を交へて質實素樸の風を喜べるもの大伴黒主あり、その他文屋康秀、喜撰法師らそれ〴〵に聲名あり、前の四者と竝べて六歌仙に數へらるといへども、その實は名に添はず、業平小町に及ばざること遠し。

漢文學跋扈して、國文學の萎靡振はざりしは、漢學傳來以後、平安初期にかけて

漢字使用の不便

の現象なり。一見奇異の感なきにあらずといへども、理由は極めて明白なり、日本固有の文字を缺きたりしことすなはちこれ。わが國の神代に文字あることなし、ありといふも信を置くに足らず、よし數歩を讓りてこれありきとするも、そが文化のやゝ發達したる時代に及びて實用に供せられしことなきは勿論、比較的未開時代において、古代の傳說、和歌を傳ふるにも、またその用ひられしことを聞かず、これ等の傳承は一に口耳の媒によれるにて、漢學の入ると共にその文字を借りてこれを寫せるなり。さればわが國の書契時代は實際に漢文渡來に端緒を開けるにて、かの神代文字と稱せらるゝ日文（ヒフミアナ）、天名地鎭（アマナツチ）、秀眞（ホツマ）の如きはこれを無視するも何の妨ぐるところあるを見ず。さて漢文傳來して目に訴ふべき書寫の途は開けたり、然れども、外國の文字なれば自由自在にわが思想をば盛りがたく、わけて和歌の如きは、これを譯出するにその趣味の大半を毀たる。こゝにおいてか始めてこれを借れる當時の學者はその文字のみを借りてわが音を現はすこととし、やゝ久しうしてその字畫の煩雜なるのみならず、語音と等しき字數を用ひざるべからざる不便に想到して、始めて義訓を用

ひ、また假字を發明するに至る。かくて古事記、宣命、祝詞等の體は成りたるが、なほ理想的國字たるに遠く、萬葉集に至りては一種の省略法を試みる。しかも萬葉集は文字上の滑稽遊戯をさへ弄しければ、平安朝において早くもその訓讀に註釋を要するに至れり。

假名文字の發達

所謂眞假名の不便難澁なることかくの如くなれば、平安奠都以前にありて既に一方に簡便を旨とせる一種の省略文字を見るに至りしは、必然の勢なるべし。例へば記紀に見えたる吳公(蜈蚣)、寸主(村主)の如き、萬葉に見えたる冬木成(冬木盛)、鬼(醜)の如き、等由氣宮儀式帳に見えたる仝(領)、要(腰)の如き類にして、これらの省略法は漢字の本國たる支那にありても、その樂府に見え、わが佛家にてはササ(菩薩)、メメ(聲聞)、ヨヨ(緣覺)、ヤヤ(懺悔)、土犬(地獄)、骨骨(髑髏)、羊石(羯磨)の類今もなほ用ひらる。この省略法を進めて漸く一點一畫を除き、終に最簡至便の境に到着せるもの卽ち片假名にして、これと前後して、漢字を極端にまで和げくづせる草假名卽ち平假名もまた成りぬ。俗傳によれば、片假名は吉備眞備の作にして、平假名は僧空海の手に成れるものなりといふ。されど當時の狀況を考へ、また今日に殘れるその頃の種々の假名によりて察するに、二種の假名文字が徹頭徹尾空海、眞備等ひとりの發明創作に成れるものなりとせんは誤れり。論者或は解釋して曰く、吉備眞備が片假名を作れりといふは、その字畫を作れりといふにはあらずして、漸次に成形し來れる文字を集めて五十音圖を作れりとなり、僧空海が平假名を製出したりとなすは、平假名自體にはあらずして、これを集めて涅槃經下卷なる諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂の四句の偈を意譯せるいろは歌を作れる意なるのみと。諸說紛々として信を置きがたき中に、此說やゝ正鵠を得たるに庶幾しといふべし。蓋し假名四十七文字を使ひて、一字を餘すことなく、また同一文字を重ぬることなく、劃切流暢にかの偈を現はさんは、鬼才空海の如きにあらずんば爲し難き業なればなり。五十音圖に至りては固より印度の悉曇に倣ひて作れるもの、悉曇は恐らく眞備の時代にありては未だ傳はらざりしを、空海が眞言宗を請來すると同じ頃に始めて傳へたるものならん、されば五十音圖もまた空海か、さらずとも空海前後の人の作なるべし。

假名文字の流傳

かゝれば平安朝の初頭において早くも二種の假名文字は成り、漸く弘布したりといへども、當時これが學習に當りては、なほいまだいろは歌もしくは五十音圖等あることなく、「難波津に咲くやこの花、冬ごもり、今を春べと咲くやこの花。」「淺香山、影さへ見ゆる山の井の淺くは人をわが思はなくに。」の二首を以てせるものの如く、古今集の序にも「この二歌は歌の父母の樣にてぞ、手習ふ人の始にもしける」といへり。これにつぎては「天地、星空、山川、峯谷、雲霧、室、苔、人、犬、上、末、ゆゑさるおふせよえのえをなれゐて」など無意味の文字どもを竝べたりしものに似たり。而してこれら草片二體の假字は自ら別途の用に用ひられ、片假名は和漢混淆體及び日記のうちの漢文にて書きにくき箇所に交へらるゝことなり、草假名は專ら女子の間に行はれて、女手また女文字の別稱を得たり。

假名と女子

假名のはじめて現はるゝや、漢文學崇拜の折からとて、男子は卑みて顧みず、無學なる女子が用ふべきものとして、寧ろそを知るを憚りしかど、實は便利平易、その根源たる漢字とは選を異にして、支那人の目より見るもはたその巧妙なるに一驚を喫せざるを得ざる底のものたり。男子がかく之を彈指して齒牙に掛くるを寧ろ恥となせる間に、この新生の國字は漸く女子の間に勢力を得、殊にわが國語のまゝに寫さゞるべからざる和歌の用を辨じて、遂にこゝに日本文學發展の基礎をなすに至れり。竹取物語、伊勢物語の出づるに至りしも、實にこの假名發明に負ふ所多し。

竹取物語と伊勢物語

竹取、伊勢二物語の製作は何れの時なるか明かならず。されどその素朴質實なる點によりて考察するに、この時代の末に成れるものなるべきは疑を容れず。竹取物語は竹の中より生れ出でたる赫耶姫を主人公とし、姫がこの世の戀を知らず顏に、帝王の勅諚をも斥けて、八月十五夜、團々たる玉兎を望んで、月宮の故都に還り行けるを描けるものにして、この一人の女性をおのれが花と眺めんとて、月卿雲客が心をくだき、術をつくして、狂奔せる樣は、宛たる平安世態の縮圖なれど、筆路一轉、この美姫をしも天上の女仙が罪を得て暫く下界の生活に身を托せるものとなせるに至りては、平安朝小說に類例なき趣向にして、漢文學の流行に伴ひて、道家の說などの影響また淺からざりしを想ふべし。伊勢物語は歌物語にして、過半は業平の歌を取りてその由來を簡短なる小話に編

めるもの、事實なるもあり、假託なるもあり、行文簡潔にして流麗、業平の歌と相俟ちて餘韻嫋々、後人をして讃歎措かざらしむ。業平が歌聖として後人に仰がるゝは、この伊勢物語の存することゝ一因ならずとせんや。その作者に至りては業平、その人なるべしと思はるれど、未だ定說なし。

第三章　延喜時代

國民の自覺

弘仁期は漢文學崇拜の時代なりしが、この期は國民自覺の時代なり。恰もこれ繪畫界に巨勢金岡出でて隋唐の畫風を日本化したる時にして、文學の風潮も漸くこの時に移り、曩には爭うて漢詩文の摸倣に傾倒したりしに、今は驕つて自國文學の復興に力め、外國文學を壓して、和歌大に起る。和歌の勃興は實に延喜の偉觀にして、これを古今和歌集に代表せしむべし。古今和歌集二十卷、これを今日より見れば、固より眇たる一小撰述に過ぎざるが如しといへども、しかもわが歌學史上に一時期を劃するの大段落となり、永く和歌に志すものをして斯道の經典と仰がしむるに至る、そも〳〵何の故ぞや。

古今和歌集

古今集はそのゝち續出せる所謂二十一代集の最初のものにして、勅撰和歌集の嚆矢なり。蓋し凌雲、文華秀麗、經國等の勅撰詩集に擬したるものにして、古代の名歌の萬葉集に洩れたるを、當代和歌の秀逸とを輯め、醍醐天皇の聖勅によりてその延喜五年に成る。撰者は紀貫之、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑の四人にして、いづれも官位甚だ高からぬ人々なり。今この集を見るに、集中にて最も多きを占むるは、古歌にもあらず、先輩の作にもあらずして、實に選者等四人が詠なりわけても貫之の歌は全篇千餘首のうち百首に近し、これ豈に輕々に看過すべき事實ならんや。蓋し一國文藝の隆盛はもろ〳〵の作者が現代の社會に對して多大の感興を有し、自家の文筆に不敵の信念を抱きて、その外國もしくは古代に比較して一歩を讓らず、むしろ却つて數歩を進めたるものあるを自覺せる時代に期すべくして、或は外國文學の研究に耽り、或は古代作品の摸倣に自己を忘却せる時代にあり得ざるなり。古今時代は如何、延喜の聖帝はこれら官位卑しき人々をしも篤く信じて、この空前の事業を託し、選者等もまたよ

く自己の才を信じてこれに當り、君臣合體、動かすべからざる信念の上にこの集は成れるなり。すなはち選者等は人麿赤人の聖を聖としてこれを尊び、近くは業平、遍昭等が才を認めてこれを容るゝに吝かならざりきといへども、自己の主張に至つては斷乎として枉ぐるなし。外國文學に對するも亦然り、國詩の漢詩と較べて遜色なきはいふまでもなく、わが國人がよりて思を述ぶべきもの、實にこれを措きて他にあるべからざるを確信したりしなり。されば古人の歌を取るも全然主賓の位に置くことをせず、おのれ等が新體の歌風と相竝べて國詩の光輝を發揮し、以つて漢詩を西の方本國に向つて驅逐し了せんと期したるなり。この集一たび出でて國民詩の基礎始めて堅く、平安朝を通じて永く和歌の軌範として尊奉せられたるも、固より當然のことといはざるべからず。

萬葉と古今

古今集の特色はその調飽くまで優雅にして絢麗なるにあり、これを剛健樸實なる萬葉集に比すれば、一は澎湃たる波濤に對して太洋の巖上に立てるが如く、一は潺湲の音も幽かなる都あたりの河面を望むにも似たり。人麿死して二百年、この顯著なる歌風の變遷はいかにして生じたりやといふに、弘仁期にありて漢文學流行の結果、和歌振はず、隨つて萬葉集の研究も一時疎外せられて、その風を學ぶものなきに至れるが爲なるべし。長歌がこの時代に至りて全く衰頽し終れるもこれと同じ結果にして、續日本後記に嘉祥二年、興福寺の大法師等が仁明天皇四十の寶算を賀し奉れる長歌を載せたるを見るも、その拙劣の程を知るべし。しかもこれらの地にありてはなほ幸にも殘れるなり、都門の内にありては早くもその跡を絶つ。されど此の如きは歌風の變遷に對する直接の一原因のみ、別に間接の大なる原因あり。すなはち當時昇平日久しきに伴ひて、風俗優柔惰弱に流れ、絶えて萬葉集時代に見たるが如き剛健の氣象を見ること能はざるに至れること是にして、從うて奈良朝にありて人麿等が苦心經營、漸く和歌の價値を高めて嚴正なる地歩を作れる工夫をも忘却し、更に和歌初發時代の風に歸りて、もつばら一時的、卽興的なる感情を歌ふの具とのみ心得、嚴肅なる方面はおのづから漢文學に讓れるが如き姿となれる結果ならずんばあらず。而して在原業平の歌は實に卒意的作歌の代表的なるものに

して、歌意幽婉微妙、容易に後人の企及すべきものにあらずといへども、戀愛の情を主とし、異性交誼の媒として和歌を專用したる一事に至りては、かれ實にその責を免るゝ能はざるなり。

國民性の一變

かくて延喜時代はわが國固有の詩形の著しく發達したる時代なるが、しかも從來文藝上に顯著なりし國民性は却つて衰滅の運に向へるが如し。思ふに弘仁時代に隆盛を極めたる漢詩文は延喜時代に至りて全然日本趣味に同化せられたれど、その隆盛を極めつゝありし間に、おのづから國民的氣風を一變したりしなり。いはゆる衰滅せる國民的性情とは何ぞや、尙武的氣象これなり。萬葉集における人麿等が作を回顧せよ。かれらは堂々として建國創業の事實を歌ひ、聲を大にしてわが國體のあるところを疾呼したりしなり。今はすなはち如何に、文弱の風國民と文壇とを靡けて、古今對照し來れば、殆ど別人種ならざるかを疑はしむ。

貫之の抱負

要するに平安朝の作家等は先達が和歌の振肅に力めし苦心をしも忘れて、再び卽興的偶詠の古代に復り、儀容なく主張なき玩弄物を以てこれに擬せんとするに至れるなり。延喜時代に於て更に和歌勃興の機運に際したりといふに拘はらず、かゝる卽興的空文字を連ねたりしとせば、古今集の選者等は果してこれに滿足し得たるべきか。いな然らず、少くとも紀貫之において異見ありしを信せんとす。然り、古今集の選者のうち、遠大の抱負を抱いてその撰述に當れるものは誰ぞと問はゞ、何人か紀貫之と答へざらん。古今集の序とその選擇の標準とを見れば、以てかれが和歌に對する所思を窺ふに足る。かれはつとめて業平、遍昭等が清新の調を採りたりき、されど併せてその弊をも容さんとはせざりしなり、浮華輕薄、一時の興に、成れる如きは渠の最も忌むところにして極力その排斥に力めたり。

貫之と躬恒

されど貫之は歌人としては、天才者の域を去ること遠し、業平が奔放自在、行くとして可ならざるなかりしに似ず、一句一語も推敲熟慮を經て決し、修辭を正しくし、語格を整へんが爲にはいかほどの苦心も吝むところにあらず。やがてその長所は辭句の穩健雅正なるにありて、天眞の流露にはあらず、時には全く自然を缺いて理窟の陳列に終る。これに反して、躬恒はむしろ境に臨み、才に任

せて感懷を吐きたりしが、これとて眞の詩才あるにあらず、僅かに句を連ね辭を飾るに達者なりしといふべきのみ。業平に比ぶれば共に相距ること千里萬里。然れども躬恒を貫之と上下するに、恒躬或は一歩を貫之に越ゆ。貫之の才やかくの如し、しかも平安朝にありて、奈良朝の人麿と竝べてひとり和歌の二聖として尊奉を絶たざるは、一にかれが古今集の歌體を定めたる卓越の鑑識とその序に發表せる評論の才とによらずんばあらず。

貫之の歌論

貫之が和歌に對する意見は古今集の序一篇に盡きたり。實にかの序は歌學の始、和歌評論の始にして、これより先き和歌四式なるものありきといひ、四式の一なる喜撰式は喜撰法師の作として千載集の序にも引きたれど、和歌の體裁の定まらざりし時代にありて早くその形式を說ける歌論の出づべき所以なければ、こは固より無稽の說なるべく、深く信ずるに足らざるなり。貫之はまづ歌を詩に譬へて六義を擧げ、古來の和歌の沿革を概括して述べ、さて「今の世の中、色につき、人の心の花になりにけるより、あだなる歌、はかなきことのみ出でくれば、色好みの家に埋木の人知れぬこととなりて、まめなる所には花薄ほに出すべきことにもあらずなりにたり。その始を思へばかゝるべくなむあらぬ」とて、近き世の和歌の墮落を嘆じ、飜つて前代の君臣が四季折々の眺、嬉しきにつけ悲しきにつけて詠み出せる痛切の調に說き及び、殊に人麿、赤人等は中につきての聖者なりといひ、なほ「この外の人々その名きこゆる、野邊に生ふるかづらのはひゝろがり、林にしげき木の葉の如くに多かれども、歌とのみ思ひてそのさま知らぬなるべし」といひて、近世の歌に滿足の意を表せざるは勿論、歌の上手と許せる六歌仙につきても、花と實と、こゝろと言葉と備はれるは少しと斷じたり。貫之おもへらく、近世の歌人輩古人の用意を忘れて、歌はひたすら卽興を主とする遊戯の具とのみ思惟し、わが神聖の歌の道を辱しめて謹愼の態度を缺くと。ずなはち不撓の信念と不屈の覺悟とを提げて歌風の矯正を叫び、以て和歌の爲に萬丈の氣燄を吐けるなり。されば時潮の導くところ、止むを得ずして四季の歌及び戀歌の二部を以て集の主位に置きたりと雖も、その內容の選擇苟くもせざりしは一見極めて明白なり。換言すれば貫之の古今集を撰したるは、萬葉の後漸く著しき和歌の墮落を救うて、これを弘仁時代に於る

漢詩以上の盛況にも至らしめんと力めたるものにして、その抱負の大なるは亦之を古今集の序に窺ふべし、いはく、「人麿なくなりにたれど、歌のこと止まれるかな、たとへ時移り、事去り、たのしびかなしび行きかふとも、この歌の文字あるをや、青柳の絲たへず、松の葉の散りうせずして、まさきのかづら長く傳はり、鳥の跡久しく止まれらば、歌の樣をも知り、ことの心を得たらむ人は、大空の月を見るが如くに、古を仰ぎて今をこひざらめかも」と。さればこの時代の和歌の傾向として著しきは、長歌の益〻衰へたることと、抒情詩ことに戀愛を主とせるものの勢力を占めたることなるが、貫之はこゝに見るところあり、古今集の選擇に當りては極めてその標準に注意し、貴族間における戀愛の談柄の如きは嚴にこれを避けて、專ら思想の幽奇にして詩味横溢せるものを收め、以て當時の通弊を一掃せんとしたり、しかも大勢の趨くところ抗するに難く、未だ俄に長歌を復興し(古今集に載せたる長歌は四五首のみ)、敍景詩等の隆盛を招くには至らざりき。たゞ所謂平安朝の歌體は貫之を俟ちて始めて確立し、永く範を後世に垂れたり。

貫之の序文

格調を定めて和歌の上に一體を確立せる貫之は、和文(假名文)の上にも亦一體を確立せり。時、假名文字傳播ののち日なほ淺く、軟文學に於ては既に竹取物語、伊勢物語の二書ありしかど、論說序跋など硬文學に屬する假名文の著述はなかりしに、貫之が識見の超邁なる、外國傳來の漢文は到底永く純粹なる日本人の文章たりがたきを思ひ、漢詩に對して和歌を興せると同一筆法を以て、漢文に對して和文を創めたるなり。前に論じたる古今集の序と大堰川行幸の歌の序とはすなはちこれにして、未だ前例なき當時のこととて、勢、漢文に模範を仰がざるを得ず、理路文脈なほ漢臭あるを免れずといへども、漢文直譯の境を脫して、渾熟の一體以てわが新國文の魁をなせり。

土佐日記

これらの諸篇は今も人の推重する所なるが、その短所を指摘すれば、餘りに華麗絢爛なる一點にあり。これいふまでもなくその軌範たる文選等の四六駢儷體に殃せられたるが爲にして、貫之はこれより脫化してよく一家の文を創めたりと雖も、さすがに同じ弊あるを免れざりしなり。これやがて後世の國學者が二序をすてゝ、同じ人の作なる土佐日記を擧げんとする所以にして、その評

先考全集第五

價は當らずとせず。土佐日記は貫之が晩年の作、土佐守の任はてゝ京に歸るまでの日記を婦人の筆に假託して書けるものにして、その文章はつとめて嬌飾の氣を避けたり。國學者評して以て輕妙洒脫、わが古文の標範たるに適ふとす。されど余輩の見によれば、土佐日記の特色として推さるゝ滑稽諧謔は眞の滑稽諧謔にあらずして、一見極めて重くるしく、單に文字上の遊戯に過ぎず、行文輕妙なるが如くにしてしかも輕妙の域を去ること遠きにあらざるなきか。これを竹取、伊勢の二書に比するに、二書の更に簡潔にして古色蒼然たる、曾に一日の長のみにあらざるなり。

貫之の長短

二序と土佐日記と文體を異にせるは今述ぶる所によりて明かなるが、貫之が文章の到る處思想の眞率と感情の横溢とを缺いて、却つて語句の精練と措辭の技巧とに經營苦心したるを思はしむるは、彼此ともに一なり。蓋し貫之はその歌に見るも文に見るも玲瓏たる天成の詩人にあらずして、むしろ頭腦明晰なる評論家なりしが如し。分析的批評にかけては當時第一人者たりといへども、その創作を以てしては第二流の位置に甘んせざるを得ず。その功はやがて

後撰集

彼我の文體を折衷打成して一新國文の體を確立せるにあり、また過去に鑑み將來に慮りて、所謂古今の歌風なるものを定めたるに存して、純文學的創作に秀でたるにあらず。換言せばわが貫之をして平安文壇に重名をなさしめたるは、一にその批評眼の卓拔なるにあり、詩才の豐富なるが爲にあらざるなり。

延喜を距ること二十餘年にして、天曆の盛時を迎ふ、この時に當りて文化更に煥然たり。漢文學は復興の勢を示すと共に、國文學また勢を得て、和歌大に振ふ。かの詩合、歌合等のやさしき遊戯が、多くこの時代に行はれたるを見るも一斑を推すべく、勅撰集としては後撰和歌集の成れるを見る。此集は源順等梨壺の五人の撰するところにして、聲名古今集に亞ぐと稱せらる。されどこれを古今集に比するに、二個の點において遜色あり。すなはち其一は選歌の中に全く撰者等の歌を收めざりしことにして、こは撰者が現代に對する自信の缺如を自白す。その自歌を採らざりしは謙遜の意に出づといはゞいふべけれど、同時代の作の官位極めて高き二三の人々に限れるに至りては、何とかいはん。この後和歌が久しく古今を軌範としてこれに拘泥し、向上の一路塞塞せるは、後撰集

まづ責を負ふべし。

戀愛贈答の歌

其二は、後撰集が最も力を竭したりと覺ゆる戀歌の部に男女の贈答を併せ掲げたるもの多きことこれなり。贈れる歌と答へたる歌と、かくまでに打揃ひて撰集に入るべき程の價値あるを得るやは見易き理にして、撰者等がその選擇に當りて、歌其物の巧拙如何を吟味するよりも、寧ろ戀愛の話柄に重きを置けるを知るべきなり。此の如く贈答の雙方を並び擧ぐるは、後撰集に始まりたるにあらず、その例勅撰集に於て既に古今集ありといへども、その數極めて少く、集錄の用意に至りても彼此大に逕庭あり、卽ち彼のこれを取れるは詩としての價値を標準とせるものにして、未だ所謂花鳥風月の便を揭げて、男女情交の祕密を發かんとはせざりしに、後撰に至りては敢てこれを曝露して怪まず、更に一歩を進めてこれを傳ふるを主とせるものにも似たり。この後撰に見ゆる戀愛の事實は、恐らく同時代の作なるべしと思はるゝ大和物語を見れば更に明瞭にして、前代および當時の青年男女がいかに狂蝶の痴態に半生を送れるか歷々睹るが如し。後撰はもとよりこの風潮に乘じて成れるもの、そのかゝる

宇津保物語と落窪物語

贈答に紙面を割いて憚からざりし選者等の意、蓋し和歌を以て男女交際の媒介となせる爲にして、こゝに至りて貫之が振肅せる和歌の地位は再び下らざるを得ず、この點においてもまた後撰が先鞭を附けたるの觀あるは、深くこの集の爲に惜むべしとなす。

この時代の小說にして今日に存するは宇津保物語及び落窪物語の二つなり。共に當時の社會を寫せるものにして、宇津保が主人公たる一美人を圍みて多くの貴紳が狂奔せるを描けるは、かの竹取に似たりといへども、竹取は前にもいへる如く支那の道家の影響を受けて、人生にあるべからざる神仙譚に髣髴に苦められ、のち少將なる人に懸想せられて幸福の生涯に入れりといへる、これもまた宇津保と同じく戀愛を主題とせるものにして、かれと合せてその時代における一般社會の生活樣式の如何なりしかを窺はしむ。なほこれらの小說につきては平安朝小說の最盛期たる次の時代に併せていふところあるべし。

黄金時代

第四章　藤氏全盛時代

この時代は平安朝の最盛時代にして、一箇の黄金時代とも謂ひつべし。されどこはわが國政治上の威嚴を標準とせる立論にはあらずして、平安時代の爲政者たる藤原氏の榮華がその極に達し、常にこの藤原氏と消長を共にし來れる文藝美術がまた極盛の時期に到達せるを意味せるなり。皇室の尊嚴高調して政綱の緊張せるを以ていはんか、吾人は寧ろ平安時代の初期たる弘仁期を取るべく、本期に至りては貴族政治の弊害愈〻增長して、古今失政の好標本たるを揚言するに躊躇せず。これを都鄙の關係に見るに、地方の形勢は全く京師に知られず、京師の政治は殆ど地方に關係なく、貴族はこれをしも意に介せずして、ひたすら逸樂宴飲に耽り、地方の豪族はこれに乘じて鋭意武を養ひ、その勢力漸く盛なるに及びて征略を思ふ。およそかくの如きものこの時代の大勢にして、革命の機運は漸く成形し來れりといへども、この方面はいま論ずるの要なし、余輩は直ちにこの政治的頽廢の時にしも隆々の勢ありし文學の研究に向はんとす。

御堂殿

既にいへり、平安朝の歴史は京都における宮廷の歴史にして、宮廷の歴史はすなはち藤氏一門の歴史なりと。而してこの藤氏の全盛期こそ平安文藝の頂點にして、藤氏を代表するものは、いふまでもなく御堂關白道長なれ。道長自ら歌うて曰く、「この世をばわが世とぞ思ふ、望月の缺けたることもなしと思へば」と。げに道長は榮華の權化、權力の化身、その富貴尊嚴や皇室も及ばず、これまで世を代へ時を經て、一代は一代より、一期は一期よりも增し來れる藤氏の盛運は、唯この一箇道長なる本尊を齋かんが爲ならざりしかを思はしむ。されど波瀾ある人生の行路は上りつむればまた下り坂なり、望月の缺けたることもなき圓滿具足の境涯も永くは續かずして、明日よりはやく暈虧の歎あり。しかもこれはた今説くの要なし、道長を中心とせる一代はとにかくに黄金時代なり、髮たる藝術全くその保護奬勵に成り、名流才子かれが一身を繞りて燦たり爛たり。かの一條天皇が、朕が世以て誇るに足るものなし、たゞ人材の輩出に至り

この時代の美術

ては前代に耻ぢずとのたまひしもの、洵に所以なきにあらず。

まづ教界を見るに、天台に惠心僧都あり、眞言に寛朝僧正あり。惠心は學僧ながら、また美術に心を寄せて、繪畫彫刻に妙を得たり。專門の佛師としては法橋定朝、最勝圓滿の佛像を刻みて、佛師僧綱の始なり、畫家には巨勢弘高、宅磨爲成等出づ。爲成は宇治平等院の扉に畫ける人、それだに今日にありて人目を眩惑するに足るものあるに、さても道長が六十餘州の富を傾け、極樂淨土をさながらこの世に現はさんとしたる法成寺の輪奐の美、結構の壯や如何なりけん。

文學の大勢

文學に至りてはその盛固より美術の上にあり、卽ち漢文學も前代を受けて知名の士なほ多かりしが、時代は既に遠く漢文心醉の時をさりて、國民漸く自覺の歩を進め、國文學の勢力遙かに漢文學の上に出でたり。勿論、當時の時勢より考ふれば、男子の學ぶべきものは文選、學者の弄ぶべきは漢詩にして、假名文は寧ろ依然として輕重の外に置かれたるが如しといへども、今日よりその作品を比較するに、漢文學に見るべきものなくして、第二位にありし國文學に却つて千載不朽の價値を留めたるもの多きは、爭ふべからざる事實なり。しかもその中優秀の作家は概ね後宮の婦人にして、和歌の和泉式部、赤染衞門、散文の清少納言、紫式部、擧げ來れば僕指に暇あらず、これに反して男子には僅かに歌壇に局在せる藤原公任、同實方、能因法師などのあるありて、僅かにこれと拮抗せるは、空前絶後の奇觀なり。

歌界の反動

和歌は古今集にその體定まりて、久しく後人を掣肘し、その間、時に語法の變化、格調の清新を呼ぶものなきにあらざりしも、要するに大勢は貫之の規矩を奉ずるに異議なく、以てこの時代に及びしが、こゝにこの滔々たる時潮に對して反抗の聲を揚げたるもの一人あり、これを曾禰好忠とす。好忠は當時世を擧つて古格を墨守し、規律に拘泥して思想僵靡ふたるなかから現代の思潮と相協はざるを憤り、この平板を破りて破天荒の大革命を遂行せんと欲したるものなり。古今の穩健雅正は今や陳腐凡庸と化しぬ、後撰の月雪花はこゝに至りて千篇一律の典型を殘す。徒らに古語の狹籠疇裡に蟄伏して無味乾燥の言を繰返さんは新人の堪ふる所にあらず、俗語用ふべく、奇調試むべし、自由は詩人が天與の特權にして、これを得ると否とは一にかゝりて作者の意に存す。歌枕の外

に名所なしとは誰が放てる烏滸の言ぞ、鶯、時鳥、これらを外なる鳥の聲は野に滿ち山に響かざるか。およそ此の如き主張に驅られたる好忠は飽くまで時流の反對に出で、惡戰苦鬪、その志は嘉すべかりしも、その詠や粗笨蕪雜、好漢をして「曾丹」の嘲聲を受くるに止まらしむ。これ畢竟思想の根本を忘れて寧ろ形式の末に趨れるが爲にして、却つて藤原公任をして一代の耆宿として歌壇にその名を恣にせしめし所以なり。

歌論の興起

四條大納言公任は和漢朗詠集の著者にして、有職故實の造詣深く、學問才藝を以て一世に重んぜられたる人、宵て道長の父兼家がその才を羨望して、わが子は影蹈むことだに能はざる口惜しさよといへるはすなはちこの公任なり。のち道長が大堰川に詩歌管絃の船を浮べて、當時の月卿雲客を招き、各自がおぼえある一藝によりて乘船を定めし時、所謂三舟の才に長じたりとて、名聲一時に高かりしは、昔く人口に膾炙するところの話柄なり。されどそのうち特に人も許し、我も許せるは和歌の道にして、和歌が一科の學問として研究せらるゝに至りしは公任實にその魁をなす。所謂歌論歌學が、句格辭法の用例を討究して、是非の標準を定むるは、後世も相同じといへども、この時代にありては未だ內容の價値について問ふところ少く、かれ等が故實と呼び先例とする所にひたすら研究の主力を注ぎたるものの如し。公任は此種評家の代表者にして、斯く作品の古格に外れざるや否やを檢し、終に歌學なるものを起すに至れるなり。思ふにかくの如きは當時一般の人士が不知不識の間に抱懷せる思想にして、偶、その發言者を公任に見、さてこそこの人を斯道の先達として、悉くその脚下に集まれるものといふべけれ。而して時人の公任に服せるや、爭うてその品隲論評を仰ぎ、褒められたるものはこれを以て一代の榮譽とし、貶されたるものはこれが爲に悶死するものあるに至る、その愚及ぶべからずといへども、時勢の赴くところはすなはち然りしなり。公任が歌界に重きをなす、それかくの如し、されどその詩才はよく盛名を辱かしむることなきか、固より疑ふべし。渠の歌は或は雅正なるべし、しかも平凡なり、或は穩健なるべし、しかも暢達の氣なし、保守を信條として、好忠と互に他端にありて相睥睨せりと雖も、その詩人の資を闕けるは、敢て好忠に讓らず。たゞ批評の才に至りては、とかくの是非を

外にして、遙かに儕輩を擢んづるものありしを信ずべく、これよりさき貫之が古今集の序にその萠芽を見たりし歌論歌學は、公任に及びて全く確立せりといひて不可なし。

和泉式部

かくて公任は歌論の先達、好忠は和歌改進の急先鋒として、とにかくに當時の歌壇に貢獻するところなきにあらざりしかど、余輩が天成の詩人として推重措かざるは宮廷の才女和泉式部なり。式部は初め和泉守道貞に嫁して小式部を生み、のち出でて、道長の女にして一條天皇の后たりし上東門院に仕へたり。才色雙絶、しかも多感多情にして、敢て後世の德操なるものに掣肘せられず、引く手は多し、水のまに〳〵誘はれて、とゆきかくゆきし戀愛の一生まさに平安朝婦人の一典型たり。この性行ありて始めてその歌あり、奔放流麗はやがてその特色にして、そのいづれの歌を取りて見るも、詞意人を動かすの概あるものの洵に所以あり。和泉式部を以て小野小町に比するに、詩才の豐富にして、所作の多量なる、蓋し數等彼の上に出づ。しかも小町の名ひとり喧傳して、和泉式部をいふもの少きは、一に前者が時代を先にせるが爲にして、作品の價値を以て論すれば、後者をこそ業平と竝べて平安歌人中の二星とすべけれ。

散文全盛

和泉式部以外にも女流歌人にして名あるものなほ多しと雖も、概していふに古今の舊套に局して、新調を歌へるもの少し。和泉式部の如き、偶その感情熾烈にして眞率、古今有數の歌人として特筆するに足るものすら、その風格よりいへば、また依然として古今集中のものにして、いまだ大なる特色の數ふべきなし。幾たびいふも古今集は平安朝の和歌の經典なり、時代の進むに伴ひて多少の變遷はあれども、大體において終始その歌風の仰がれしは事實にして、日本文學の黃金時代といはるゝ藤氏全盛の時代にしも、なほ歌人を擧げてこれが規範を脫することを能はず、好忠の如き、稀に革新を唱ふる者あれば却つて狂と笑はる。かくて和歌は、その間さすがに二三の名家を出しつゝも、終に新風の樹立を見るに至らず、後世の文學研究者をして浩歎これを久しうせしむる所以なるが、散文に至りては然らず、延喜以後漸く行はれたる假名文の隆盛その極に達し、所謂古文中の秀拔なるものはこの一時代の作に限られたるの觀あり。以下徐ろにその眞相を窺はしめよ。

枕草紙

假名文卽ち後世に謂ふ所の雅文は此頃に至りて未曾有の發達を遂げたり。中にも枕草紙、源氏物語の二書は啻に平安文學中の白眉たるのみならず、前後三千載を通じてまたわが國に匹儔を見ざるの傑作とす。枕草紙は清少納言の作にして、紫式部日記、和泉式部日記など、同時代に出でたるこの種の作物數あれど、いづれも一歩を此書に讓れり。その材とするところ、多くは著者が嘗て遭遇せる事實の追憶、または時々折々の見聞感想記にして、秩序もなく筆に任せて書き連ぬ。固より章節おの〳〵獨立せる隨感隨錄なれば、全局の結構など云爲すべきものにあらず、筆致奔放自在にして、些の澁滯を見ざると共に、貧弱の思想を修辭たくみにいひくろめたる如き、後世の隨筆に有りがちなる弊もなく、僞らず飾らず、眞率に著者が本來の氣稟を暴露し來りて、嬌慢なる虛榮心の隨所にほの見えたるなどをかしき節多し。而してその特色は觀察のいかにも女性的に、緻密周到を極めたると、これに反してその言句の婦人には不相應なりと覺ゆるまで、警拔奇矯寸鐵よく人を殺すが如きとが交錯せる所にあり。換言すれば所說自然人事の隱微を穿つと同時に、行文の大膽なる省略讀者の意表に出づ。されどその自然人事に對する緻密の觀察も多くは外面的にして、哲學的の色彩に缺けたるは、女性に免れ難き短所なるべし。もしそれその趣味性の發達に至りては、後人の及びやすからざるものあり。雅俗美醜を甄別して、ある に甲斐なき草蟲の上にも美を認めたるところなど、覺えず案を拍ちて首肯せしむ。下りて徒然草や更に下りて花月草紙やみな範をこの草紙にとると雖も、終にその上に出づる能はず。宜なるかな、人の清少納言を論じて紫式部の好敵手とし、二者の相反せる性情と、從つて全く相違へるその著書とを對比して、わが平安朝文學の雙璧となさんとすることやさばれ枕草紙を以て源氏物語に比するに到底花の前なる深山木なるの觀なくんばあらず。源氏はこれ渾然たる一大長篇、眞に古今獨歩と稱すべく、眇たる枕草紙と日を同じうして談ずべき作品にはあらざるなり。

源氏物語の本篇

源氏五十四帖分ちて二部とすべし。すなはち初の四十四帖は本篇にして、光源氏を主人公とし、終の十帖は源氏の子薫大將を主人公として、續篇と見るべし。光源氏は桐壺の帝の皇子にして、圓滿幸福なる生涯を送れる人、これを中心と

して數多の婦人を點出し、剖析批評、一々その性格を活寫して頗る精細なり。圓滿幸福なる源氏を繞る世界は少しく單調なるを免れずして、讀者は一讀これが變化の乏しきに倦み、波瀾重疊の妙なきを慊焉らず感ずべしと雖も、再讀三讀回を重ねんか、諸々の個性のいみじくも書きわけられて、坐ろに人情の琴線に觸れ來るものあるに驚き、むしろ落涙の滂沱たるを禁ずる能はざるべし。蓋し著者は著しく佛教の感化を被れり、一派の論者のいひけん如く、此書を以てこの教の教義を祖述せんと試みたるものとなさんは、誇張に過ぎたりと雖も、盛者必衰の世相を現はし、因果應報の理を寓せんとしたるは、明かなり。幸福なる源氏の身邊にしも一たび犯しゝ罪惡の影は去る時もなく、心は常にこれが爲に苦められ、輾轉反側、終には明々地にその報を受けざるべからず。自己の衷心の愛を灑げる紫の上を先だてゝよりは、痛恨遺るに所なく、佛事供養に餘念なき幻の卷を過ぐれば、所謂隱れたる雲隱れの卷にその身も終る。思ふにこれ著者の佛教的人生觀の顯現にあらずや。さはいへ更に著者の用意を忖度せんか、此等の悲哀分子は源氏一篇の眼目にはあらず、寧ろ之によりてその主人公が生涯の單調を破らんと試みたるものにして、單にその結果が二者の死に終れるを見て、直ちに悲劇を以て呼ばんとするは早計に過ぎたり。思へ、人の一生をその初より終まで洩らすことなく寫さんには、筆をその誕生に起すと共に之を終焉に結ばざるを得ざるは、論ずるまでもなきことにして、死はこれ何人にも免れがたき命數のみ。余輩は源氏の生涯の大部分が狂蝶の蜜の甘きに醉へるが如きものあるを見て、却つて著者の樂天的人生觀を暴露したるにあらざるなきかを疑はんとす。

宇治十帖

されど宇治十帖に至りて傾向は漸く一變し、厭世的の分子を帶ぶることすこぶる著しきを加ふ。主人公薫大將は源氏の本妻女三宮が柏木右衞門督と通じて生める罪惡の子にして、源氏の浮華なるに似やらず、生れ得て多感多涙、深く佛法に歸入し、厭世的の思想を抱いて、帝の八の宮の、都の塵を厭ひ、世の騷がしきを避けて、洛南宇治川の畔に淋しくも行ひすませるを尋ねて、一見舊知の思あり。忘年の友としてこれと交はるに、宮には姉妹の姫君ありて、いつしか身は大姫を戀ふ奴となり、挑めどすかせど、聽てうせにし父宮の性をうけたる姫は

世の常の女子ならねば、只管父宮の菩提を弔らふに忙はしく、妹姫をすゝめて自らは知らぬ振にくし。薫は妹姫をば匂宮に嫁がしめて、なほも時の到るを待つほどに、思ひきや大姫は父宮の後を追ひて、早くも白玉樓中の人とならんとは。薫、亡き人をおもへば悲し、繙つて中君を慕へど、それだに今は人妻のまゝならず。かゝる時しも浮舟の君は現はる、面影のみか物ごしさへ似たる異母妹の、いかで憎かるべき、大姫の形見とも再生ともめでいつくしみつゝ、ふるき胸の傷もやゝ忘られなんとするに、運なるかな、好色にして思へば行ふ匂宮はこれにしも語らひよりて契をこむ。浮舟の母は身分高からぬ女性なり、浮舟は鄙に育ちて、人生は如何なるものなるかもえ知らず、薫大將の熱き情は知れど、そのわびしく淡々しげなるに比べて、娘氣のうれしきは花やかなる匂宮の姿、さりとてこれは浮きたる戀にあらじかなど、心ひとつを定めかねて、身を宇治川の淵に投じぬ。されど宿業いまだ盡きず、さながら死にもえやらで、再び人の世に迷ひ歸り、煩惱の絆斷たんとして、髮は削れども浮世の執着は去りやらず、かくてはかなき運命に泣き明しつゝ、終るとも終らざるともなく、源氏一篇は中絶して、讀者をして長へに亡羊の嘆あらしむ。

源氏における佛敎の感化

宇治十帖はこの女主人公が浮舟のよるべもなみに定めかねたる心理狀態を旨と描寫して、變化極りなし。これを本篇の人物餘りに複雜にして、しかもその記事の坦々たるに比べて、讀者の感興さらに幾何ぞや。試みに薫大將の性質を思へ、光源氏の單純なるとは痛く趣を異にして、その一身には常に二個の異なる性質の相鬪へるを見る、すなはち一は平安貴族に通有なる變愛本位の樂天的性情にして、一は當時漸く人心の根柢に感化を及ぼせる佛敎的厭世思想なり。大將が當然手中に握るべかりし中君を失ひ、さらにまたわが妻としながら、浮舟の君を匂宮に奪はれて、一時失戀の淵に沈淪したりしもの、實にこの二性質の存在せるが爲にあらずや。源氏は平靜樂易の境涯を享樂するに、薫の生涯は全然悲愁の二字を以て蔽はる。相違はこれのみに止まらず、舞臺も十帖に至りてまた一轉す、かれは錦繡眼を射る金殿玉樓の中、これは滿目蕭條の洛南の片山里、對照し來つて著者の人生觀の、卷を重ぬると共に漸く進み、この世は到底源氏、紫の上などの樂めるがごとき兜率天上にあらずして、萬事蹉跌多き不

如意の境たるに想到せるを知るべく、また同時に佛教の感化の愈甚大なるものあるに至れるを窺ふに足らん。宇津保といひ、落窪といひ、等しく源氏と共に戀愛を主とするものなるが、その外に別に主張するところあるにあらず、現實世界を樂觀して、圓滿なる局を結べり。思ふに紫式部は平安朝の一般作者よりも佛教の影響を蒙ること著しく、この佛教尊信の念はやがて式部の思想をして深からしめし所以にして、源氏が日本文學中の傑作として嶄然頭角をあらはす所以もまたこれに歸すべきものあり。

著者が思想の結局

薫大將の、一面平安朝公卿の樂天的戀愛主義を代表しながら、他面には來るべき鎌倉時代以後人心を支配せる厭世思想を豫言せるは、前に述べたるが如くなるが、更にその心理を解剖すれば、渠の意馬心猿の狂ふがまゝに任せずして、むしろ動もすれば後に顧みて逡巡せしもの、佛教の感化はさることながら、また實は本來の性質の優柔不斷なるの致すところならずんばあらず。しかも戀愛の盲目的なるは佛教思想などの如何ともしがたきところにして、勝利は常に前者の有となれり。且、全篇を通じたる事件の進行も決して悲哀には終らず

一種の理想小說

して、不幸の中にも必ず一點の光明を認めんとつとめたるは、厭世的思想のなほ全くは著者を左右するに至らざりしを窺ふるに足る。これを要するに源氏本篇の巧に個々の性格を寫し分けたると、十帖の境遇の變化を描くに苦心せるとは、兩々相俟ちて源氏をして古今小說に冠絕せしむる所以にして、紫式部の思想は特に十帖に至りて著しく進歩したりといふべし。

紫式部の女性的觀察の緻密なるは清少納言と上下して敢て劣るものにあらず、加ふるに此は彼に闕きたる一味のあたゝかき同情を以てす。かくて審かに當時の人情風俗を研究せる結果は、渾然結んで一部源氏の雄篇とは成りぬ。論者こゝに於てか或は源氏を以て當時の活社會を描寫せる一寫實小說を以て擬せんとすといへども、余輩を以て見るに、必ずしも然らざるが如し。式部は決して何等の理想もなくして社會の實相を捕へず、源氏に描かれたる平安の舞臺は、一に著者が批評のレンズを通じて始めて現はれたるもの、これを一種の理想小說といふも、何の妨ぐるものぞ。しかり、源氏は理想小說なり、さりとて現實を忘れて極端に空想に偏せるものならざるは、また論なきことにして、實に

二才女の比較

著者が着實なる觀察と深邃なる思想とが抱合するところに、この空前絶後の傑作は生れたるなり。これをしも思はずして、或は皮相淺薄なる寫實小説と評し、或は單に幽玄なる純理想小説を以て呼ばんとするは、共に著者を知らざるものにして識者の與せざるところなり。

源氏物語の特色の一はその結構あくまでも、用意周到にして、抑揚頓挫の妙端睨すべからざるところに存す。すなはちそのはじめは事もなげに起せるが如き筆の、讀みもてゆくうちに、そは漸く伏線なりしを悟らしめ、霧は雲を生じ雲は雨となりて、筆の意のまゝに從へるを三嘆せしむるもの比々然らざるなく、未だ曾て一命題、一事件の不用意に投入せられたるものあるを見ざるなり。蓋し著者は全篇の結構を通じて、多少因果應報の理を示さんと試みたるものにして、そは卷を繙く者の容易に首肯するところ、時にはむしろその照應のあまりに著しきに食傷せんとす。紫式部を清少納言に比するに、後者は奇峭、云へば必ず人の意表に出でんことをねがふに、式部は縷々説き去り説き來りて煩を厭はざる風あるを見る、これやがてかれの動もすれば放膽に失し、これの時に

源氏以後の小説

冗漫に陷らんとする所以なり。しかも枕草紙が外面的觀察の精緻微細を極めたると、源氏が爬羅剔抉、人情の祕奥を穿てるとは、互に相侵すべからざる特長にして、共に到底後人の及びがたしとするところなり。若し强て評せんか、一筋に己が才を恃みて思ふがまゝに振舞へど、向日葵の胸中一片の信仰ありともみえざるは清少納言にして、谷間の百合の幽けきながらも、蔽はれぬ理想の光の中に輝けるは紫式部ならずや、後の江戸時代に兩者の對を求めば、清少納言は井原西鶴にして、紫式部はやがて近松門左衛門なり。

思ふに竹取物語、伊勢物語以來、漸次に進み來れる小説界は、源氏に至りてその極度に達し、それよりはまた沈滯すること、なほ古今集の一書斯道の典型と仰がれて、和歌向上の一路忽ち壅塞せられたると全く事態を同じうす。源氏の後、狹衣、濱松中納言以下小説の現はれたるもの雨後の筍の如しといへども、その何れかよく源氏の糟粕を嘗めたるものにあらざる。しかもその摸倣といふも形の上のみにして、著者の深意に至りては傳へんことを企てず、企つといふとも能はざるなり。あゝ中天月懸りて餘星影くらし、仰げりな、その光を。

現代の描寫

こゝに平安朝小說の壓卷たる源氏物語につきてその大要を說ける序に、この時代における一般小說家の取扱へる取材と構想とについて少しく述ぶべし。おほよそ一時代の作品を通覽するに、創作の多き時代と歷史的研究の盛なる時代との二傾向あるものの如し。もとより一方のみ存して他方の全く闕けたる時代はあるべからずといへども、おのづからその何れかに偏するなり。單に創作のみにつきて見るも、著者が生活する現在の社會を以て、過去に見るべからざるわが世の天國として、その榮華に甘んじ、その境涯に滿足せる時代と、ひたすらに古を慕ひ、來るべきに憬がれて、現實世界を無下に悲觀視せる時代とあり。前者は現代に對する自信の存在を示し、後者はその缺乏を自白す。さらばこの時代はいかにといふに、歷史的研究は寥々指を屈するにも足らざるに、いかに創作の多かりしよ。しかもその創作は悉くその材料を當代に取れるものにして、いまだ曾て過去に對する回顧的悄悅なし。これを曲亭馬琴が好んで鎌倉室町時代の古武士を寫し、菊池容齋が主として南北朝の事蹟を描けるなどに比らべて、著しき時代精神の相違を見るべし。奈良朝もいふに足らず、貞觀の

描寫事件の制限

古も今には過ぎじとせるはこの時代の風潮にして、その描寫の舞臺はいつも己がまのあたりに對せる現在の社會なり、すなはち出でゝは宮廷貴族の有樣をゑがき、退いては一身一家の生活を寫す。たゞこれ等のものが一々嚴密なる意義における寫實主義によりて成りたるものにあならざるは、いふまでもなきことにして、その間に往々源氏の如く著者の理想の著しくその述作を通じて穎脫せるものさへなきにあらずといへども、その理想主義たると寫實主義たるとを問はず、そこに描出せられたる社會なり、天地なりがひとしく當代の反映なるは明かなる事實なり。されば後世平安朝生活の眞相を窺ふべきもの、わが源氏物語の右に出づるものなしとし、甚しきはこれを歷史と對照比較して篇中の一事一件悉く當時の史蹟なりとして疑はざるものあるに至れるも、強ち不當にあらざるを思はしむ。

かくて平安朝に於る小說は多くは京都の外を知らざる作者の手に成り、また宮廷の貴族を以て讀者となすが故に、寫されたる內容もまた京都における貴族生活なるが常にして、中流以下の社會もしくは邊僻の土地の如きは殆ど現

はれず。これを源氏に見るに、偶須磨明石の海岸の風景、そこに佗しき謫居の有様、さては常陸、筑紫の遠境にも及びたれど、その描寫は極めて簡單にして、以て地方の風物を窺ふに足らず。また五條の假の宿りに近隣なる貧人の境涯を說きもしつれ、此の如きは極めて稀なる例なる上に、その目的も單に上流生活描寫の單調を破らんとするに過ぎず、これを以て下層社會の描寫となさんは覺束なし。此の如くにして生活難多き下層社會を閑却し、また比較的活潑の氣に富める地方を寫すに疎ければ、卷中の葛藤も寧ろ悠閑を極め、江戸時代に至りて戲曲小說の好題目として屢捕へられたる、例へば一旦の零落に刃も恐れざる忠臣義士が貧乏に顎も廻らぬ話、所天の病氣に藥用の人參え買はで悲歎にくるゝ女房の話、主家の寶物をとり戻さん爲には大事の娘をうき川竹の流に投じても惜しまぬ親の話、さては上りつめて才覺つかずなれば、道行心中と歌はせてなか〳〵心やすげに死にゆける男女の心事などは、覺に平安貴族者流の夢想だもせざる所、この時代の小說のこの種の題材を缺きたるは言ふまでもなきことなり。また平安朝の貴族にして、日常その食膳に上る米菜のいかに

悠々たる生活

して生じ、日常その膚に着くる服裝の如何にして成れるかを知れるもの果して幾人ありや、もしかれ等のうちに、これらのもののおのれが莊園に作られ、またはおのれに事ふる奴婢の手を煩はせるものなるを知るものあらば、それだけにても學者なるべし。況んやかれ等には緣遠き金錢の計算をや。

「悠々たるかな、平安貴紳の生活や。春來ると年立ちかへるといづれか疾きおそき、白馬の節會、後七日の修法の噂に日數經れば、桃咲く頃の上巳のにぎはひ、菖蒲ひきては端午をことほぐ。今宵の七夕を二星は逢ふといふに、などわれには人目の關守多き、聖壽を祈る重陽の宴、御佛名にもなりぬれば、いつしか年もくれゆきぬ。公事に數へられし年中行事と花紅葉折につけての宴飲遊樂とは平安朝貴紳の生活の全體にして、もしこれらを除かば、この時代の小說もおほかたは白紙となるべく、殘るはそれたゞ戀愛か、さらずば冠婚葬祭ならん。げにやうきがうからず、うれしきもいまだ喜ぶべからざるは人界の有樣にして、平和の日は常住に續かず、悲みの雲をり〳〵來りて面を蔽ふ、榮華の極だにも盛者必衰の理は免れがたくて、事は屢志と違ひぬ、煩悶あり、暗鬪あり、歡樂世界なる

が如き平安朝の裏面も實は悲哀に滿てるなり。されどさすがに後世に珍らしからざる殺人、復讐、決鬪などの殺伐なる事件はいまだ見るべからず、嚴格なる道義の制裁を缺けるこの時代にありては、良心の苛責に堪へずして自らその身を縮めて死を早うしたる柏木右衞門督の如きも稀有の例とすべし。

いつの世にありても生死は人生の最大事件にして、平安朝の小説もまたこれを寫すに吝かなるものにあらざりしかど、男女の戀愛に至りては他の何物よりも多くを占めたり。當時、戀愛はいかにして成り立つかといふに、こゝに某の家に女ありとせんに、女は猥りにその容貌を人に見せぬをこの頃の風とすれば、眉目もよく手蹟もよしなど知るべきたつきは世間の噂あるのみ、噂をきゝては意馬しきりに狂ふ若殿上人、我も〳〵と心のたけを文和歌に通じ、折もあれば几帳簾を隔てゝ語をかはすに、いよ〳〵ゆかしと思へば、直ちにわがものに眺めまほしきといひ贈る。敢ておのれが性質の彼方のと適合すべきか、女は妻としても果して愛すべき女性なりやなど、深く思慮しての上のことにあらず、すでに子ある身なるを忘れ、齡の漸く傾きたるをも顧みざるが多し。一夫多

男女の愛

妻は公然の俗、先なるが本妻とは必ずしも定らず、好もしきがあれば幾人を娶るもまた心のまゝなり。かゝる世の女性は禍なるかな、女子の身にとりて、はたるその父兄にとりて、一生の苦心は婚嫁の時にあり、男子が愛情の濃淡をその贈れる歌文に計り、性情行爲の如何を世評に尋ねて、沈思熟慮、始めて十中の一人を選ぶ。この選ぶの日は卽ち女子の權威の男子に移る日にして、男子をして或は憂へ或は歎き、まごころをつくして膝下に伏せしめしも昨日をかぎり、今日の婚嫁と共に地位は顚倒す。幸にして愛を得ばよし、されど數多なる妻女のうちにおのれひとり移り氣多き夫の愛を獨占せんことは期すべくもあらず。一たび寵愛を失はんか、秋扇の如く捨てられて、ひとりさびしく月日を送らざるべからず。げふもあすも戰々兢々として良人の鼻息を窺ひ、心術を傾けてその歡心を買ふに急なりしもの、豈に憐むべからずや。然れどもこの時代の小說には戀愛に對する義理、乃至愛人間の生活難等はあまり描かれず、大和物語に貧に迫られたる夫婦の離栖を描き、源氏物語に蓬生の君がわが家の零落の爲め住み馴れし都と源氏とを棄てゝ田舍へ移り行くを寫せるの類、全く無きにあ

倫理的制裁の缺如

らずといへども、かの鴛鴦も啻ならぬ夫婦の間の義理の爲に裂かれ、新たに女子を愛しては許嫁をも振りすて、また身代金の調達の道なくて契りし遊女をわがものともえせぬなど、後世の小説に普通なる事件も、この時代にありては殆ど見ることを得ざるなり。

要するに當時の社會は未だ確乎たる道德の制裁なく、儒教も根柢より人心を陶冶するに至らず。男子が己が好もしと思ふ女子を得んが爲には、左顧右眄するものにあらざれば、朋友も排擠し、親子も競爭す、甚だしきは、人の妻を姦するもいまだ大なる不倫とはせられざりしなり。勿論、光源氏が藤壺の女御と通じたるは直ちに父帝の后を犯したるもの、柏木右衞門督が女三宮を姦したるは當時權勢旭日の上るが如き源氏の夫人を汚せるものにして、さすがに心中安からざるものあり、源氏はこれより一生苦惱を重ね、右衞門督は一歩を進めて悶死するに至れりといへども、これらは他に類なき例なり。女子に至りては男子の如く自由なるを得ずして、一たび定めたる一人の夫に對しては飽くまで貞順の實を盡すを以て必要とせり。しかもその夫は多く放縱多情にして、多くの妻女を貯へ、感情の趣くまゝに愛憎常なければ、かれらが地位の安からざる、さながら浮雲の如く、涙痕乾くに暇なくして、これを題材として平安朝の小説にも變化あり、波瀾あり。蓋し輕薄なる男子が愛情の動搖に伴ふ女子の一喜一憂は、いづれの時代にも免れがたきことなれど、わけても平安朝はこの事實の著しかりしなり。

親子の愛

男女の戀愛と比較するに足るべき人生最大の愛情の發現は親子の恩愛なり、後世の戲曲小説を見るに、これを材料とせるもの頗る多し。然るに平安朝の小説は然らず、限も知られず行方も量られざるは天地間たゞ兩性の愛のみなりとし、親子の愛に至りては閑却し去つて言の及べるもの極めて稀なり。小説は時代の反映なり、當時、一夫多妻の風ありて、それ〴〵生母の家に起臥する子女は、その母に對する父の愛情の特に濃密なるものあらざるかぎりは、その音容に接する機會少きと共に、之に對する恩愛の情もまた薄し、もしそれその母にして全く夫に疎んぜられたるものならんか、この母の兒は生涯父の一瞥をだに得ずして止むこともありなん。父にして既にかくの如し、況んや母の競爭者

たる義母達に於てをやたゞ實母との情愛のみは流石に深きものありて、屢、和歌などに現はる。父子の愛を以て小說の材料となしたるは甚だ少く、强ひて求むれば宇治の八の宮の自らその女を撫育したる、濱松中納言が父の再生したりといふを尋ねて入唐せるなどあるべしといへども、これ等も畢竟男女の戀愛を引き出さんが爲の緒に過ぎずして、戀愛を主題として委曲を盡せる描寫の多きに比すれば、眞に九牛の一毛のみ。

第五章　院政時代

藤氏の傾衰

院政時代とは後三條天皇の時より鎌倉幕府創立の時までをいふ。太古以來、王政を以て傳はれるわが國家の秩序紊亂して、政權武門に歸するに至れる、その過渡時代にして、畢竟王政の末期なり。これよりさき名は王政とこそいへ、上御一人の下に藤原氏の一門ありて、大政に與り、全權を恣にしたりしは、平安朝初期このかたのことにして、この藤原氏の盛衰やがて平安朝の歷史の全部とも見るべく、一門の權威道長に極まりて、頼長、敎通ののち春日の神燈影漸く暗く、朝廷に於ける官位のみはをさ〳〵劣なれど、實力はまた曩日の比にあらざるなり。翻つて見るに、都鄙の懸隔もこの時に至りていよ〳〵著しく、皇室の威嚴求むるに難ければ、從來こゝのみは夢穩かに、干戈を見ざりし京都にさへ人心動搖し出でて、洛中洛外早くも源平兩氏が跋扈跳梁の巷となりぬ。あはれ光榮ある藤氏全盛時代の文學はこの世相の大變動に際して如何の運命にかあへる。

小說の衰微

平安朝の文藝の消長は藤原氏の盛衰と相伴ふ、これ既に屢〻述べたるところ。これを小說壇に見るも、この一門が全盛期をまたその黃金時代として、源氏物語の名篇は出でたり、しかもその後、漸く振はず、藤氏が道長時代の榮華を追想して、また斯る兜率天上の世界を再現するに由なきを悲觀せると同じく、源氏以後の小說家は源氏を以て動かすべからざる典型とし、渴仰摸倣して敢てその右に出でんとは試みざりき。されば當代の小說を見るに、剽竊の痕歷々として指點すべく、その間往々にして新意を加へ、結構を變改して人の耳目を引かん

とせるものなきにあらずといへども、それらは空想を主として作爲の弊に陷り、甚しきに至りては猥雜の氣紛として近づくべからざるものあるに至る。源氏出でて源氏なし、この衰運はこの過渡期に止まらずして、延いて遙かに中世の末に及べり。」

歴史的述作

榮華の頂上より墮落せる者は蹉跎たる人生の行路に想到して、その運命を自覺せざるを得ず、氣力あるものは勇猛心に鞭ちて更に回復を圖らんとすれども、氣力なきものは徒らにその悲境に泣いて、昔日の追懷にせめてもの慰藉を得て止まんとす。院政時代の藤原氏は正にこの氣力なきものの好例にして、此時に當りてまた如何ぞ現代を活寫せる雄篇傑作あらん、歴史的述作は此に於てか起る。「榮華物語、大鏡は卽ちこの黄金時代憧憬の所産に外ならず。」榮華物語はその體裁一見源氏物語に似たり、されどこれは唯その形式のことにて、內容に至りては全く相同じからず。源氏は全篇を通じてすべて著者が眼前の實社會を觀察して生むところなるに、榮華は道長の一生を中心として、その前後の事蹟に說き及ぼせる一箇の歴史のみ。これを史的述作として見んか、頗る有益の資料たるべしといへども、その冗漫にして魄力を缺ける筆致と平板無統一なる敍述とは、文學的作品として推稱するを憚らしむ。大鏡もその材を藤氏全盛時代に取れるはまた榮華に同じ、されど本紀列傳を立てゝ史記に倣へる點は、かれとその體を異にし、しかも遵勁にして繁簡宜しきを得たる書きぶりは、國文體歴史のうち比類なき傑作として尊重するに足る。水鏡、今鏡、增鏡などこれに次いで出でしかど、その文は皆大鏡の敵にあらず。なほ前時代の末かこの時代の初に現はれたりと覺しく、古今の奇話異譚を集めたものに今昔物語三十一卷あり。著者は博く書史を涉獵して、日本、支那及び印度の物語を集めたるさへあるに、更に珍とすべきは、平安朝のあらゆる作物が悉く貴族社會の狀態を以て對象としたるに反して、階級の上下に通じたるにあり。吾人が今日平安朝中流以下の風俗習慣さてはその間に行はれし傳說迷信などを知るべきものこの書を措きてまた他にあらざるなり。」

歌壇の動搖

かくてこの時代には純文學としての小說は衰微の兆漸く著しく、却つて榮華あり、大鏡あり、今昔ありて、新たに假名文の歴史を出し、いはゞ文學一轉の機運

革新の機

に向へるを示しゝが、その傾向はこれらの散文よりも韻文の方面に於て更に顯著なり。小說界にありては源氏出生の時代を距つることいまだしかく遠からず、その光明はなほ赫灼として後進の容易に埒外に出づるを許さゞるに、歌壇に於ては斯道の經典たる古今集撰述の後年やうやく久しく、今や全くその風に倦みて、革新の旗幟は機を待つて動かんとす。而してこの歌壇の變動は政權の轉移と恰も符節を合するものあり。

藤氏既に實務に倦みて、院宣の政治を見るに至り、なほも隋力によりて持續したる藤氏の威權を壓倒せんが爲に院中に北面の武士なるものを置く。これらはやがて源平二氏勃興の端緒にして、二氏は茲に始めて藤氏一門の貴族に代りて京洛の一大勢力となる。この時に當りて皇室における法皇と當帝との兩立は、天に二日あるが如きものにして、到底諧調を保ち難く、終に延いて皇位繼承の爭となり、この爭はまた移つて武家軋轢の因となり、保元平治の戰亂うち續きて、古來固定せる階級の制度こゝに破れ、人心頗る動搖す。兵亂が文藝の永久の[illegible]方ならぬは論を待たずといへども、當時の月卿雲客の優長なる、花を賞し月を眺めて詩歌管絃の宴に日もまた足らざるもの、この國家多事の日も曾て變らず、且つ文藝にかけては新來の武士をさへその勢力範圍に入れたればこそ、頼政、忠度の和歌における、經正、敦盛の管絃におけるが如き、以ていかに平安貴族の感化の著しかりしかを思へ。歌壇は却つて一種の活氣を生じ、政治において變革の機熟すると共に和歌に於ても論議盛に行はれて、機運は漸く刷新を呼べるなり。

新派の風尚

然り、院政時代における和歌は、社會人心の漸く動搖せるに拘はらず、依然として行はれたりといはんよりも、むしろ更にこれに刺戟せられたること大なりといふを以て、一層妥當の見解とせん。殊にその盛なりしは保元の亂以前にあり、月花につけての宴など屢、行はれ、名流きそひてその技を闘はす。而してこの風潮に乘じて、まづその旗幟を明かにせるを源經信、俊頼父子とす。經信は革新を叫べりとはいへ、なほ大なる決心を以て全く舊調を棄つることはせざりしに、俊頼に至りては清新の家風を承けて、夙に出藍の譽あり、鋭意歌運の勃興に力む。その主張するところは曩に曾禰好忠が唱へしところとほゞ同じく、しか

散木奇歌集

も道長の頃にありては徒らに世の嘲笑を招くに過ぎざりしを、更に聲を大にしてこの時に持ち出でたるなり。俊頼以爲らく、古今集に定めたる歌格、古今集時代に用ひたる語彙は以て古今時代の思想を盛るに足るべし、されどわが時代の複雜清新なる思想を容るゝに足らざること、なほ革囊の酒を盛ること能はざるが如きのみとぞ。げに古今の用語句法は先人すでに用ひ盡して陳腐を極むるに、これをのみ何時までも斯道の金科玉條として奉せんは、さすがに倦怠の情なき能はざるべし。俊頼等はこの新風潮の急先鋒として起てるものにして、その作風はやがて自由を標榜し、世の中のこと見るにつけ聞くにつけておのが感ずるまゝに感懷を遣らんとし、これが爲にはまづ古今の制限せる用辭の法格を破りて、上は萬葉を採り下は卑近としたる俗語をも取入れたり。而して單に必要に迫られてこれを用ひたるのみならず、故らに好んで奇異の物名を詠じ、故らに險難晦澁の辭句を使役す。すなはち古今時代には體言少くして助辭多かりしかば、歌調おのづから溫柔暢達なるを致しゝが、こゝに至りて助辭の省略、名詞の連用の外、辭句の倒置をも好み用ひ、ひたすら佶屈贅牙の體を喜ぶに至りぬ。その作歌の內容はいかにといふに、古今時代にありては主觀的抒情の一面にのみ走れるに、一轉して客觀的敍景の歌をよむもの少からず、その方面に於ても間々秀逸なるものさへ現はるゝに至れり。これは或は漢詩の感化にもよるべきが、とにかくにその發達は注目すべきものあり。

かれらの弊

かくて新派は舊來の弊風に對してよくその庶幾するところを遂行し得たる觀ありしかど、思ふにこれもまた別箇の弊に陷れり。すなはち故らに奇怪の文字を連ね、難解の句法を用ひて得々たるものあるに至れることにして、所謂清新の歌風なるものは、毫も內容に於て進歩を示さず、思想は舊套を脫せざるに、形式の上にのみ變化を衒ふ、これこの革新の眞に意義ある革新たらずして、歌壇は更にまた幾ばくもなく古今の舊調に復歸したる所以ならんか。當時、この新派歌人等が代表せる勅撰集には金葉、詞花の二集あり、しかも勅撰集はその慣例として、優雅穩健の調を旨とすれば、これのみを以ては未だかれらの眞面目を窺ふに足らず、更に去つて俊頼が撰べる散木奇歌集を見ば、その所思の那邊に在りしかを首肯すべし。

歌學の旺昌

いづれの世いづれの社會にも急進派に對する保守黨のあらざるはなし。政治上に於て藤氏等の上流貴族が今の時世に志を得ずして古代に眷戀したりしと同じく、和歌の上にもひたすら古今の盛時を慕ひ、これを崇拜して斯道の動かすべからざる鐵則となせるもの、また頗る多かりき。これら尙古派の人々が新興の歌風を評するや、いはく、此の如きは古代の先例故實を無視せる無節制の妄言のみ、一定の標準を示してかの卑俗の野語を制せんはわれらが任務なりと。こゝに於てか歌學の勃興となり、また一方に於ては歌合の流行に伴ひ、辯難攻擊の武器に備へんが爲に歌論の益〻進むを見たり。歌學は前にいへるが如く、早くその萌芽を貫之の古今集序に見、公任に至りて漸く形體を備へしが、こに至りて全く一箇の學問となり、これを以て生涯の事業となすものさへあるに至れり。されどこれらの歌學は、和歌は自然人生と如何なる交渉を有し、その文學としての絕對的價値はいかになどいへる根本的論點には向はずして、唯古人の作歌としいへば、その優劣をも問はずして直ちにこれに盲從し、これをまたなき標準として、偏に形式の末を云爲するのみ。要するにかれらは褊狹固陋なる自己の見解より割出せる笑ふべきの論法を以て敢てその內容の空虛を飾らんとせるものにして、學問とはいへど、その薄弱膚淺にして、殆ど科學的價値を認むるに難きは言ふを須ひず。蓋しかれらが歌學を倡道せるは、眞に歌道の進步を思ふが爲にあらずして、一にこれによりて自家の無學と淺薄とを蔽はんとせるのみ。

有名なる歌學者

さらば院政時代における歌學の代表者は誰ぞといはゞ藤原基俊を以て第一に推さん。俊賴をもつて好忠の跡を追へるものとなさば、基俊は正に公任の衣鉢を繼げるものといふべし。一條天皇の時、好忠彈指せられて衆人の間に伍せられず、公任ひとり一代の耆宿と仰がれしに、院政時代に至りては俊賴却つて斯界の權威として一世の渴仰をあつめ、基俊は不遇に身を處して時人に惡まる、時勢の變遷の如何に急なるか、驚くに堪へたり。基俊につぎては藤原清輔及び僧顯昭の二人を擧ぐべし、清輔は詞花和歌集の撰者たる顯輔の子にして、父子共に和歌を能くし、爾來全く和歌を以て家業となす、所謂六條家これなり。顯昭は顯輔の猶子とす。

俊成の企畫

概するに院政時代は和歌の盛行せる時代にして、保守、急進の二派が互に自黨の樹立を計り、紛々擾々として未だ勝敗を決するに至らざりし樣は、源平二家の爭鬪にも似たるかな。この時に當りて嶄然として頭角を現はし、快刀亂麻を斷せるを藤原俊成とす。俊成は初め六條家の門に學び、のち基俊が尙古の風を倡道するに及びてこれに投じ、更に俊頼の急進說に動かされて、その影響を受けたり。俊成が經歷かくの如くなれば、その間に自らよく諸家の長短を汲み、その特色のあるところを取捨して、以て一箇理想の樓閣を築かんとせるものに似たり。當時の歌壇を瞥見するに、いづれの歌人か保守に傾かずんば卽ち急進の一端に走らざるものぞ、彼に萎靡沈滯の嫌あれば、此に自由亂雜の弊あり、若し彼と此とを折衷融和して束縛に失せず、放縱に流るゝなくば、清新にして窮屈ならざる一箇の歌體こゝに成り、歌壇の統一やがて期して待つべし。おほよそ此の如きもの俊成が心事にして、基俊等が定めたる舊例古格に軌範を求むれど、全くこれに泥むことをせず、俊頼等が唱へたる清新の調を喜べど、また力めてその蕪雜粗漫の嫌あるを避く。折ふし源平爭亂の世ながら、俊成長壽を享けて、一生を文藝の道に捧げ、歌壇の刷新を志して、計畫着々としてその圖に當り、終に儕輩を擢んでて一代の先達、天下の判者として許さるゝに至れり。

佛敎の影響

さらば院政時代の和歌の特色は那邊にありやといふに、佛敎の影響の一層加はり來れること卽ちこれなり。而して余輩はこの特色ある和歌の代表者として、まづ指を西行法師に屈せんとす。西行は出家の身なれば、その詠の佛敎臭味を帶ぶるは、當然のことなるが、こゝに注意すべきは、この時代の和歌に對する佛敎思想の影響は、ひとり緇衣の徒の間のみならず、一般人士の間にも浸染して、その傳播の範圍甚だ廣かりしことなり。この間の消息は從來腐敗せる佛敎がこゝに至りて一生面を開き、新たなる活動を始めたるに徵するも想像するに難からず。

佛敎の革新

思ふに天台、眞言二宗の盛衰はまたこれを藤原氏のそれに比すべし。嘗ては從來の諸宗を壓してひとり覇を敎界に稱したることもありしに、藤原氏が惰眠を貪りて、政治上に實力を失へると同じく、二宗もまた漸く墮落して、佛敎の眞義を失ひ、僧侶の分を忘れて俗世界の事に鞅掌し、干戈を動かして、自派の勢力

を張らんとす。二宗既に此の如くなれば其餘は推して知るべく、宗教は今や危急存亡の秋に會せんとせり。然るに此時良忍の融通念佛宗を唱へ、源空が念佛宗を起すありて、他力の宗門始めて開かれ、士民爭うてこれに歸依したれば、舊宗教こそ淺ましくもその力を失ひたれ、新宗教は之に代りて暗黑の教界を照し、更に鎌倉時代に禪、一向、日蓮等の諸宗相前後して生れ來るに及びて、佛教は再び文化の指導者となり、學問藝術はたその感化を被むること尠少にあらざりき。院政時代はこの佛教改革の過渡期にして、當時の和歌に現はれたる佛教的色彩は平安朝に於けるよりも濃厚にして、未だ後の鎌倉時代に然りしが如く全くその奴隷たるには至らざりしかど、大いにこれが感化を蒙りて、ひとり僧侶の詠のみならず、あらゆる歌人を擧げて、多少ともその影響を見ざるなし。而してこれが爲に幾分思想の深きを致しゝ傾あるも爭ふべからざる事實にして、從つて一種の厭世觀を歌ふもの多きに至れり。

座上漫吟の弊

この潮流に乘じて現はれたる歌人は前後その數甚だ乏しからずといへども、天成の歌人としては西行ひとりその名を恣にす。西行の特色は何處にありやといふに、一言にして盡せば境に臨みてその有りの儘なる實感を歌へることこれなり。かくいはゞ聞くものの或はいはん、和歌の道は所詮實感を詠ずるにあり、豈他あらんや、かくの如きは西行あるを俟ちて後に知らざるなりと。洵に然り、歌人が實感を歌ふは、尋常一樣の事柄にして、世間またかくの如く當然なることあらず、然りといへども飜つて當時の情勢に想ひ及ばゝ、わが强勢を加へたる言の、一見奇怪なるが如くにして、毫も奇怪ならざるを發見せん。見よ、當時の滔々たる歌人が行へるところを。かれらは名所を詠ずること百千にして足らずといへども、所謂坐ながら知る名所にして、そのうちおのれが實見せるもの果して幾何ありや、また或は煩悶すといひ、或は解脫すといふも、かれら果して幾半宵の襟を濕し、もしくは沈思默考卒然案を打つ底の工夫を積めりや。否、月といひ花といふだにそれ〴〵の既成觀念あるなり。俊頼出でて革新を唱へたりといへども、親しく自然の懷に出入して、その默示に從はんとせしにはあらず、これもまた題を探り、先人に作例を求めたれば、在來の弊は依然として止むことなく、その說の如きもいたづらに牽强附會に陷り、作風また賞するに足

西行の特色

るものなし。

さらばわが西行の歌は時勢を超越して、全然その弊を脱却したりしかといふに、また全く然りとはいふを得ず、歌壇因襲の久しき、古人が句格語調は知らず識らずこの天稟をしも侵せりといへども、たゞ西行や生れて煙霞の癖あり、儕輩が盆大の京都に一生を送りて、坐ながら名所を知るを以て得意の色ありしとは選を異にし、身を一笠一杖に托して、南船北馬老に及びて足跡殆ど海内に普く、まのあたり境に對して感懷を吐く、見るべし、かれが歌の今日もなほ讀む者をして脈々として盡きざる興味あるを覺えしむるを。これやがてまた余輩が鷄群の一鶴として西行を推す所以なり。さばれその歌ひとへに感興に任せてよみ放ち、敢て推敲練磨を經たるものにあらざれば、玉石混淆、時に景情活躍の高調を示すと共に、時に平凡兒戯にひとしきものあり、渠が私淑者を以てして尚且慊焉らざるもの少からずといへども、一長一短は何人にも免れず、西行また歌人として強ひて一家を立てんことを庶幾したるものにあらずとせば、深くこれらを咎めんは當らずといふべし。

結論

要するに院政時代は政治に於て然りしが如く、文學に於ても優柔懦弱なる舊風に飽き來れる時代にして、次の鎌倉時代に入らんとする過渡期にあり、去らんとする舊時代と來らんとする新時代と相繫がるところに興味あり。

中世

第一章　この時代の概觀

所謂中世

こゝに中世といへるは、源頼朝が府を鎌倉に創めて天下の政權を握りし時より、德川家康が海内一統の志を遂げて江戸開府を宣言せし時まで、すなはち普通にいふ鎌倉時代、南北朝時代、室町時代、戰國時代を經て織田豐臣時代の末に及び、圓數を以て算すれば紀元千八百五十年（建久元年）より二千二百六十年（慶長五年、この年關ヶ原の役あり）まで、すべて四百五十年の間なり。

この時代の美術

この時代はいふまでもなくわが歴史上の混亂時代にして、戰亂隙もなく打續き、太平無事の日少うして、上下擧つて武事に熱心すれば、平和の世を粉飾すべき文藝はおのづから疎外せられ、これを享樂するもの、これを述作するもの共に寥々たりしは自然の勢なり。わが國歴史ありて三千年、時勢は展轉して止まずといへども、前後にこの時代ばかり亂れたる世もなく、この時代ばかり文藝

の衰へたる時もなし。さはいへ亂世にはまたおのづから亂世の文藝なき能はず、並に亂世の美術なき能はず、而して自ら一時代の特色をなせり。まづこれを美術に見んか、彫刻には鎌倉初期に運慶、快慶の二佛師あり、共に一代の巨匠にして、尤も寫實に妙を得、殊に運慶は豪宕の姿、瞋恚の相を寫すに古今獨歩と稱せらる。丹青には鎌倉時代に信實、隆兼等繪卷物に遒勁の筆を揮ひて、永く後人の追隨を許さず、東山時代には雪舟、元信等水墨を以て宋元名家と拮抗す。茶の湯、香、花の道等の起るに伴ひて諸種の工藝美術も亦見るべきものありき。

文學と美術

たゞ文學に至りてはその性質上必ずしもこれらのものと並行しがたき事情あり、すなはち美術は比較的短日月にも能く進歩するの可能性あるに反して、文學は常にやゝ長久なる年月を要するが如し。されば余輩はこの兵馬倥偬の時に際せる中世の文學が、同時代の造形藝術に比べて著しく遜色あるを見て、直ちに當時の文學者の無能を責めんとするものにあらず、つとめて深厚の同情と感興とを以て之に對せんとすといへども、これを美術の盛なるに比すれば、遂に貧弱の評を免れず、平家物語はあり、源平盛衰記はあり、徒然草はあり、しかも斯界の運慶、雪舟は出でざりしなり。固より文學と他の藝術とを比較せんは俳優と力士との伎倆を上下せんとするが如きものなりといへども、二者が發達進歩の程度に於て大なる逕庭を存したるは疑ふべくもあらず。かくいはば論者或はこの時代の特產物たる謠曲、狂言を以て特筆に値せずとなすかといはんか、これとても余輩はわが文藝史上に一時期を劃すべきものとは信ずる能はず、東山時代の繪畫が不朽の價値を留めたるに比して及ばざること遠しといふべし。

兩盛代の連鎖

抑わが國文學を通覽するに、その最も盛なる時代は平安朝と江戸時代とを推さゞるを得ず、これ殆ど定論なり。わが中世はこの二大盛時の間に介在して、恰も二山を繫げる一谿谷の觀をなす。而して前後の山は各大なる特色あり、晉に外貌に於て然るのみならず、根本地質の構成に於て相一致すべからざる特徵あるを見る、この特徵ある二つの山が一谿谷を隔てゝ相對立することは眞に一箇の奇觀なり。さらに譬喩を換へていへば、平安文學は上方にして、江戸文學は東國なり、相望めば雲煙萬里、よく一躍の移すべきにあらざるを、この隔絕せ

る兩地をしも連結するものはすなはちわが東海道たる中世の文學にして、その短からざる道程を經るまゝに、かれの面影の漸く失はるゝとともに、これの異なる傾向は次第にその頭を擡げ來る。畢竟、王朝文學を滅せるは中世にして、近世文學を興せるもまた中世なり、中世文學はたゞ二大文學盛時の連鎖たるところに興味あり。

兩盛代の比較

平安文學と江戸文學とその特色を異にせるはこれを後章に說くこととし、茲に少しく文學以外の方面に於ける兩時代の相違を比較せん。卽ち人間生存の第一要件たる衣食住を見るに、卓を竝べて箸と共に匙をも備へ、醬油、鹽酢等を陳列して、おのがじし食ふ人の嗜好に任せて調味せしむるやうにせること、なほ今日の西洋料理の如くなるは平安朝にして、香味料を置くことなく、匙をも略せるは江戸時代の風なり。裳、唐衣、その名を擧げんだにことゝしき十二一重の地も色も華やかなるに、螺鈿、蒔繪の巧をさへ盡したる平安朝婦人の服裝が江戸時代に至りて幾分簡便となれるはいふに及ばず、男子が束帶、直衣の寬濶の姿も、江戸時代に烏帽子を捨て、また素袍の袖を切りて上下となり、住宅の結構も平安朝の宸殿造は江戸時代の書院風と變ず。要するに何事にまれ戰亂多事の世には煩瑣を棄てゝ簡潔に就き、華麗を遠ざかりて質實に歸る。中世に隔てられて、その前後に連る二時代の面目は單に衣食住のみに就て見るも此の如く相異なり。しかも此の如きは物質的方面に於る一例のみ、更に精神的方面に至りてはその相違いよ〳〵著しく、從つてその反映たる二時代の文學の特色に非常の差あるは、言ふまでもなきことならずや。

近世より見たる理想的時代

中世時代なかりせば平安朝の文化は衰へず、中世時代なかりせば江戸時代の文化は起らざりしなり、中世時代に於ては何等見るべきの文化なく、寧ろその時代は野蠻蒙昧の語を以て評すべきに、しかも德川時代の人士間に、これを仰視して以て自己の理想を實現せるユートピヤの如く思惟せるものあるは、固より事實以上の想化を試みたるものにして、笑ふに堪へたり。中世は到底何れの方面より見るも、文化史上の暗黑時代なり、たゞこの暗黑時代の數百年を通じて次期に至りて來るべき別箇の文化の漸く凝成しつゝありしは疑ふべくもあらず。德川時代の人士が動もすれば中世を過重視せんとするは、偏にこの

時代關係によるものといふべし。政治上に於ても江戸幕府を開きて勤儉尚武を奬勵したりし家康は、頼朝の先例に倣へるものにして、その制度の如きも多く範を貞永式目、吾妻鏡等に取れり。文學の上よりいふもまた中世文學の貧弱は、平安朝文學の豐富に比べて天地雲泥の差あるに、尚且江戸時代に喜ばれたるは、平安朝の小説にあらずして、寧ろ中世の軍記謠曲なりしにあらずや、中世の江戸時代に及ぼせる勢力乃至感化の著しき驚くに餘あり、なほ一二の例を引かんか、猿樂は江戸時代に至りて武家の式樂となり、民間には中世の戰記を節面白く讀み上ぐる太平記讀なる講釋師の起るあり、義經は傳説的色彩を帶びて武勇を人格化せる武士の典型となり、敵討といふことも歴史を泝れば早く眉輪王の事蹟もあるに、中世ならでは夜の明けぬ時代は、曾我兄弟を權輿とせずんば折合はず、年々の江戸の初春の芝居にも何は措きても曾我對面を出すを吉例としたり。中世の江戸時代に對する權威や大なりといふべし、されど繰返し述ぶる如くそは彼が此に先だつこと一時代にして、先驅者たりしが爲にして、その文化に於ても道義觀に於ても、其他何にまれ、中世は決してかれら

新思潮の勃興

が夢想したるが如きものにはあらざりしなり。

中世に於ける文化の特色は、之を概言すれば畢竟新舊二潮流の戰鬪に外ならず。さらばこの新舊二潮流は各〻何によりて代表せらるゝかといふに、政治の中心よりいへば、舊思想は朝廷にして、新思想は幕府なり、その位置の上よりいへば、一は上方にして、一は關東なり、狹うしては、彼は京都にして、此は鎌倉なり。而してその文化を享樂せる社會の階級よりいへば、一方は公卿にして、一方は武士なり、かれ有職故實を主とすれば、これは武備兵術を專とす。やがて古法の墨守と因循とは前者に免れ難き必然的特色にして、革命の傾向と殺伐の氣風とは後者に伴ふべき特質なり。舊潮流の利害はいま措いて問はず、新潮流は質樸と自由とを標榜して新に立てるものにして、いはゞ歴史と習慣との產物たるもろ〳〵の形式を打破し、進取氣鋭の態度頗る刮目に値するものありしかど、惜むらくは潮流の魁となれるもの、多くは武事一偏の人々にして、他を顧みるに暇あらざりしが爲に、文學は比較的にその影響を被むること少く、光榮ある革新はさておき、舊觀を持續するだに難くして、墮落に墮落を重ね、僅かにいは